であつたことが、容易に推察される。

（五）天照大御神が豐之國なる保食神に對して開始された外交工作は、天孫御差遣の準備交渉であつて、一方出雲國に對して開始された讓國の交渉と同じ性質のものであつたと思考せられる。すなはち大國主神の讓國によつて朝鮮半島の日本海及び關門の通航が自由となり、保食神の統治した豐之國の歸順によつて、九州の一角への上陸及び占據が自由になつたわけだ。大國主神がかしこみて出雲の讓國をうべなひ奉り、豐之國の方も、保食神の後繼者が天孫の御降臨を迎へて、九州の或る地方に御案内申上げることが確定したので、天照大御神から瓊々杵尊に對して嚴かなる神誥があり、豐葦原瑞穗國は未來永劫わが子孫の王たるべき地であるといふことが、中外に宣揚された。そこで天孫は儀表堂々、武歩蕭々として、大陸の或る地點から御降臨に召され、日本聯島に向けて御發航になつたのである

天孫御降臨の水先案内を奉仕した兩豐の大わだつみ族

現今の豐前・豐後・及び日向の北半分、すなはち神代の昔、『豐之國』もしくは『碩田（おほきた）』の名で呼ばれた地方に蒼衍して居た大わだつみ族の一派が、原日本人すなはち高天原民種の葦原中國經略に寄與した功績の最も大きいものは、天孫の御降臨に際し、先づその海上の御案内を申上げ、ついで御上陸地點から、豫めその御根據地として選定されて居た高千穗高原への道を開き奉つたことであらう。

そこで天孫は九州のどこに御上陸遊ばされたかといふことが問題となつて來る。

天孫の御上陸地點は、神代史上千古の大懸案であつて、まだ何人もこれに明確な斷定を下し得たもののあるのを聞かぬ。さりとてこれはいつまでも神祕の霧の中に封じ込め、障らぬ神に祟りなしとして永く放置するには、われら日本民族の據つて以て進むべき針路を決定する上から考へて問題があまりに重大に過ぎる。

天照大御神が天孫を御差遣になるに先ち、出雲國の大國主神と、豐之國の保食神とに豫備交渉を開始遊ばされ、その外交的工作が完成を見た上で、いよ〳〵天孫に神誥を下されて居るところから見ると、天孫の御船はアジア北方大陸の或る地點から、出雲國に關係の深い日本海の一部分を經て『筑紫の海北』にさしかゝられたことが、さほどの不自然なしに想像せられる。

文獻歷史の語るところからいつても、日本聯島の情勢がくはしく高天原に知られたのは、伊非諸・伊非冊・兩神の滄海原御巡檢以後のことで、いよ〳〵天孫が御降臨遊ばされるまでには、素盞

鳴尊の御經略もあり、大國主神の建國もあり、それに續いては出雲國へ、又豐之國へしば〳〵使節の御差遣もあつたことで、國津神系の文化と、天津神系の文化とが渾然融合したのは決して神祖三代の短い期間に限られたことではない。天孫御降臨までには、大國主神もすでに出雲の讓國をうべなはれて居たし、豐之國なる保食神の子孫も恭順を誓ひ奉つて居たし、天孫は漢・魏・支那との正面衝突を避けて、筑前の那津（博多）寄りを避け、先づ同じ筑前の神港崎附近から、名古屋崎附近に至る『筑紫の海北』の或る地點を選んで御上陸遊ばされたと見るのが、自然でもあり、妥當でもあるやうに考へられる。

宗像三女神の御本體

こゝに於いてか、筑前國宗像郡神港（みなとのみなと）附近に祀られて居る宗像三女神のことが問題となつて來る。宗像三女神のことは、『古事記』の中、天安河原に於ける天照大御神と素盞嗚尊との御誓約のくだりに現はれて居るのがそのはじまりである。記の敍述を文字通りに讀んで行くと、宗像三女神なるものは、天照大御神の生ませた女神で、高天原直統の神となるのであるが、しかしそれが素盞嗚尊の佩びさせた劍からあれましたと明記されて居るところに、尙ほ大に考ふべき問題が殘る。

『民族日本歷史——建國編』以降この著者がしば〳〵述べて來たやうに、素盞嗚尊がその御姉・天照大御神と衝突遊ばされたのは、大八洲經略の根本精神に關する問題ではなく、たゞその政策上の問題について、互にその御意見を異にされたからだと解釋すれば素盞嗚尊の御身につけさせたものは、皆、國津神（先住民族）のものと見るべきである。その尊の佩劍から生れたものが、宗像三女神であつたといふことは、その時すでに尊の領有された豐之國の三女王を、尊から誓ひのしるしとして高天原に上つたといふことになるのでないか。又、天照大御神の佩びさせた曲玉からあれましたといふ五柱の男神にしても、その大概が日本海沿岸から上陸して、本州の中部に進出する要衝に鎭もりますところから推し考へて、これ或は兩神の間に、太平洋沿岸と日本海沿岸との勢力範圍が劃せられたことを意味するものではなからうかと考へられることだ。

何にしても天安河原の誓約といふものが、古代史上の最も大きい謎として殘されて居る限り、これを文字通り天照大御神の產ませた三女神とするのはどんなものか。豐之國の三女神とすれば、それはいふまでもなく、大わだつみ系國津神の女王である。大わだつみ族はその名の示す如く、航海術に長け、造船の技術に於ても、大山祇系の刳船などとは、比較にならぬ高度の文化を持つて居た。（恐らくイラン人—大食人—からフェニキア式造船術の何ものかを學び得て居たで

あらう）すなはち尊から高天原に上つた宗像三女神が、やがて天孫降臨の爲に水師を供し、その水先案内となつて、天孫を『筑紫の海北』の或る地點に導き入れ奉つた。風土記逸文の中にも『其大海命子孫、今宗像朝臣是也』とあるのに見ても、高天原民種と同じ系統の大陸民種ではなかつたことが察せられる。又、宗像三女神は只今でこそ一箇所に祀られて居るが、これは今の宗像郡から遠賀・鞍手・企救・と豐前の平野にかけて蓍衍した大わだつみ系國津神の支配者として、それぞれ領域を分つて居たものと思はれる。それは遠賀郡の中にも、別に宗像といふ地名のあることによつて容易に想像されることだ。宗像氏が筑・豐・土著の豪族で、天孫の最も有力な協力者であつたことはこの著者ばかりでなく、吉田東伍博士なども大體に於てそれを認めて居られるやうだ。（大日本地名辭書）かやうに見て參ると、天孫の上陸地點が今の神港町附近でなかつたにしても、神港崎から名古屋崎に至るいはゆる『海北』のどこかであつたといふことを想像することは、決して一片の荒誕な臆測に墮するものでないと信ずる。笠狹崎の地名は、今湮滅してしまつてゐるが、いづれはこの邊にあつたもので、天孫がそこに上陸遊ばされたとすると、天孫は必ずや遠賀川の流れを傳つて、その水源地方にある日向の高千穗（霧島山でない）の方においでになつたものと考へられる。豐後の日田（日田郡）、竹田（直入郡）、日向の高千穗（西臼杵郡）、この三點を繫ぐ高原は高天原民種が、大陸以來好んで常住の地とした代表的の地形――日高見國であつて、天孫がこゝに第一日高見國を建設されたといふことは、上陸地點の穿鑿は別問題として、殆ど爭はれぬことのやうに、この著者は考へて居る。

御歷代南部九州御巡撫の御道筋

神祖御三代の後、神武天皇が大和國の地を相して第二日高見を御建設遊ばされてからも、九州の御巡撫には必ず長門の豐浦附近から關・門・海峽を九州の地に渡御遊ばされ、右折して筑前の平野をみゆきあらせず、左折して豐之國に入らするのが順路となつて居た。すなはち景行天皇・仲哀天皇・が九州再整理の爲に御親征遊ばされた時の御道筋がそれだ。これより先、神祖三代の御經略で、葦原中國があらまし王化に服したので、四代目の神武天皇は先づこの邊でよろしからうと第二日高見建設の爲に大和に御移りになつたのであるが、垂仁天皇の頃から支那本土の情勢に大きい變化がおこり、從つて朝鮮半島も動搖し、景行天皇の御代になると、九州を再整理する必要が生じて來た。その爲に景行天皇は畏くも九州親征の壯圖をおぼし立たせた。その時豐之國すなはち碩田（大分）を經て日向から大隅・薩摩・の方へ御巡幸になつた道筋といふものは、天孫御降臨

以來、期間も極めて短いことではあるし、(これを非常に長いことのやうに考へるのは東亞の歴史に通ぜぬからのことだ)必ずや歴史ある道をお通りになつたに相違ない。その道はやはり大分から、日向國西臼杵郡の高千穗地方をお通りになり、都城邊から大隅・薩摩・と、順次に隼人族を御招撫になつて居る。この景行天皇親征の御道筋を以て『天孫遊行』の御道筋に擬することは、日本の古代史を決定する上に有力な考へ方であらうと考へる。

海幸・山幸・の爭議及びその解説

さて右の如くにして九州に第一日高見を御建設になつた天孫の、やがて着手遊ばせられたのは隼人族を招撫することであつた。天孫は前述の道筋を日向・大隅・薩摩・と御征旅になり、薩摩國に到り、こゝで大やまづみの神の弟姫・木花咲耶姫を納れて妃と遊ばされた。この御納妃に關する一條には、さま〳〵なあはれな物語が傳つて居るが、さういふことは一切省略することゝして、われわれはこの御納妃の一條で、原日本人の血と大やまづみ族の血とがほゞ渾融同化したといふ事實を認めて置きたい。支那の古代史でもさうであるやうに、或る偉大な帝王が、他の氏から妃を迎へたといふことは、決してその王室だけのことを意味して居るのでない。氏族と氏族、民種と民種との混血を意味して居るのだ。

さて天孫と大やまづみの神の弟姫・木花咲耶姫との間には、火闌降命(ほすそりのみこと)・火酢降命(ほすりのみこと)・火遠理命(ほてりのみこと)・火照命・と申上げる三人の御兄弟があれました。この三人の御兄弟の中、火闌降命と火遠理命との間には、後に由々しい爭ひが生じた。すなはち『古事記』の中で最も興味ある部分――山幸・海幸・の爭議がそれである。この神話は神話としてその儘に解釋しても大へんに面白いのであるが、山幸は大やまづみ系國津神と提携してこの國土を開拓して行かうとする主義、海幸は大わだつみ系國津神と協力してこの國土を開拓して行かうとする主義、この二つの國策の正面衝突と解して、始めて日本の古代史が夜のあけたやうによく分つて來るのだ。

今、神祖第一代から第二代に亙る九州の情勢を考へて見るに、豐前・豐後・筑前・筑後・の間に大わだつみ族(アジア大陸南種)が蟠居して居り、大隅・薩摩・の全部及び日向・の一部分に、大やまづみ族(隼人族)が蕃衍して居り、天孫民種は日田・竹田・高千穗・を繋ぐ裏阿蘇の盆地に國を建てて、南方の大やまづみ族(隼人族)とも婚を通じ、北方の大わだつみ族とも提携して著々國土の開拓に歩を進めて居られたのだ。しかし南方の隼人は元來精悍な、驚蹇な、頗る好戰的な民族であつて、天孫と婚を通じたといつても、その反覆常なきこと掌をかへすが如くで、到底恩德

を以てこれを綏撫することはむつかしい。それに反して保食神の國すなはち『豐之國』の方はどうであるかといふと、これは初めから天孫に協力して、曾て背信の行爲に出でたことのない非常に平和な、協調的な、民種であつた。

そこで木花咲耶姫の御產みになつた火闌降命・火遠理命・御兄弟の時代となると、南方の隼人と提携して行くべきか、北方の大わだつみと協力して行くべきか、御兄弟がこの國策をめぐつて相對立されるやうになつた。

さてこの御兄弟の爭議は、最初御兄-火闌降命が海を領し、御弟-火遠理命が山を領し、互に相協力して國土の開拓に從つて行く筈であつたのを、御兄-火闌降命の御擅私から、再度まで權利の交換が行はれるに及び遂にその破綻を見たのであつた。御弟-火遠理命、すなはち後の彦火火出見尊はもとより御兄-火闌降命に對し、極めて悌順に在し、何事も唯命これ從ひ參らせるといふ態度であつたが、最後の權利交換に際し、御兄-火闌降命から預つた海幸經營の器械器具を完納し奉ることが出來ず、その嚴峻なる督促に遭つて高千穗の地を脫し、鹽椎神の示唆に任せ、無目勝間小船（なしかたまをぶね）に打乘つて、海路をわだつみの神の宮居に到らせ、そこで豐玉姫といふわだつみの神の御女と婚することにより、婿引出として非常に優勢な海軍（諸鰐）を御手に入れることが出來たのであつた。かくして火遠理命はわだつみの神の後援を得、その海軍の力を以て、御兄-火闌降命を屈服させ、大やまづみ系、國津神（隼人族）を容易に再起の出來ぬところまで打のめしてこれを天孫民種の部民（地下人）に配することが出來たのであつた。これが後世武士階級の起りで、天孫民種が高天原から從へて來た、舊來の兵員はこの時以後、この新しい武士階級の上層に班し、その中でも身分のよいものは、皇室から多くの奴隷の管理を委ねられることになつたのであつた。又この天下分目の合戰で天孫民種を助けて殊勳のあつた豐族、すなはち大わだつみ系國津神は、この時から公民として隼人族の上に班し、貴族の末班と相接する地位にあつて容易に貴族の血液の中に融込むことが出來たものと考へられる。

常世族の籠船について

神代に於ける、民種的闘ケ原合戰といつてもよい、山幸・海幸・の爭議にかゝる物語の中で、われ〳〵が特に注意して置いてよいのは、火遠理命が、御兄-火闌降命の嚴峻なる督促に遭つて高千穗を脫し、大わだつみの神の國に赴かれる時、鹽椎神なるものが火遠理命を『無目勝間小船』に乘せて送り屆けたといふ一條である。この『かたま』といふのは日本の古い言葉で『籠』のこ

とをいつたものだ。『勝間』と書いたのは日本語に漢字を充用しただけのことだ。この『かたま』に就いては德川時代に及び、國學者の間に、段々と面倒な議論が起り、『かたま』と『こ』とは同じ籠でも物が異ふ。『かたま』は魚籃のこと『こ』は一般に籠をいつたことば、この二つの意味はは、つきり區別して解釋せねばならぬといふので、籠の場合はこれを『こ』と讀み『勝間』の場合だけを『かたま』と訓ずることに、今日では大體の意見が一致して居るやうだ。『萬葉集』には、その卷頭第一に雄略天皇の御製が載つて居る。それは

こもよ、みこもち、ふぐしもよ、みふぐしもち、この岡に、菜つます子、家のらせ、名のらさね、そらみつ大和のくには、おしなべて、あれこそをれ、しきなべて、あれこそませ、あれをこそ、せとはのらめ、いへをも名をも。

と拜誦せられる。これをも契沖阿闍梨は『こ』とはよまず『かたま』と訓じて居たので、契沖派の國學者は『かたまもよ、みかたまもち、ふぐしもよ』と訓じて居た。現にこの著者なども『かたまもよ』と敎へられたものである。しかるにその後『籠』字の充用されて居る場合に限りかたまとよんではいかぬといふ說が、强く一派の國學者の間に主張され、『勝間』だけを『かたま』(魚籃)とよみ、『籠』はすべて『こ』とよむことに今ではどうやら決つてしまつて居るやうだ。しかし、このうるさい議論はいづれにしても、『こ』といひ『かたま』といひ、籠であることには相違はない筈だ。記・紀・に『無目勝間小船』とあるのは、つまり魚籃の目の細い、殆ど水も滲透せぬほどのものと解釋されぬこともないが、水が滲透しなくては魚籃の用をなさぬ。そこでこの『無目勝間小船』とはそも〳〵何かといふことが問題になつて來る。ところがこの謎を解く船が世界の中にただ一箇所シアム・安南・地方にあるといふことだ。つまり樹脂と馬糞とを練り混ぜて作つた塗料で籠の目を塗潰し、水が滲透せぬやうにして河を渡る。これはタイ・安南・地方で蕃族が河を渡るに用ひて居る以外、世界のどこにもない舟ださうだ。(西村眞次氏)しかるにわが神代の歷史にはこの世界のどこにもない筈の籠船が、堂々と登場して居るではないか。

これで火遠理命に、婿引出として優勢な軍艦と水師とを提供した大わだつみの神の故鄕が『鰐の國』すなはち現今の南支から佛領インド支那方面(常世國)にわたる地方であつたといふことがよく分る。

かやうにして海幸・山幸・の爭議は、その大詰の大合戰で火遠理命の勝利に歸し、葦原中國は完全に彥火火出見尊(火遠理命)の統治に歸したのであつたが、この天下分目の大合戰の後、火遠理命の御跡を慕つて日向國に到らせた豐玉姬は、間もなく皇子をお產みになつた。そのお產をな

さる時に豐玉姫は、一切の事を本國の風習に從つて遊ばされた。先づ母屋の外に產殿を作つて、その屋根を鸕鷀草でお葺きになつた。さうしていよ〳〵その產殿におはひりにならうとする時、豐玉姫は『女がお產をする時は本國の形になつて生むものであるから私のお產をするのを外から覗かれてはなりませぬ』といふので、彥火火見尊から固い言質を取られた。それにも拘らず彥火火出見尊はいたく好奇心に驅られ遊ばしたものと見え、外からそつと產殿の中をお覗きになつた。すると驚くべし、たとへやうもなく美しきものに思召された豐玉姫は、見るも恐ろしい鰐の形となり、腹ばつてしきりに苦み惱んで居られた。その『本國の形』といふのが亞熱帶(常世國)でなければ見られぬ鰐であつたといふことが、はつきりと文字の上に現はれて居る。こゝに至つて大わだつみ系國津神の故郷が現今の南支から佛領インド支那方面にわたる地方であつたといふことは、もはや疑つて見る餘地のないことだ。さうして皇子が生れました時には、まだ鸕鷀草で產殿の屋根を葺く仕事が完了されて居なかつたので、この皇子の御名を鸕鷀草葺不合尊と申上げ奉つたと記されて居る。

鰐魚及び鰐魚を象徵とする常世族

前揭、海幸・山幸・の爭議に關する一場の神話から、われ〳〵は豐玉姫の御父神・わだつみの神の宮居のあつた豐之國の建設者が、常世族すなはち亞熱帶人の一派(獵々もしくはモン・クメール)であつたといふことを斷定してよい有力な證據を握ることが出來たわけだ。それはわれらがその戰艦水師を『鰐』と呼び、海員を『諸鰐』と稱へ、鰐を以てその『本國の形』として居たといふ事實である。しかるわが古史の上でこの鰐に關する記述の現はれて居るのは、上揭、海幸・山幸・物語のくだりばかりではない。出雲國に關するくだりにも白兎と鰐との爭議に關する一條があり、古くから神前の舞踊などに取材されて來て居ることは、普く人々の知るところだ。

今、耶馬臺國(兩筑)と豐之國(兩豐)とを比較して考へるに、その民種に或る血統上の差別のあつたことは想像せられるが、その同じくアジアの南種、すなはち常世族(亞熱帶人)であつたことは、諸多の資料から容易に察せられてゐることだ。ところが、出雲國となると、これは明かにアジアの北種と、アジアの南種とが聯立提携して打建てた國家であつたことが、神々の系統の上から明かに證據立てられる。出雲國は高天原系の原日本人、それと同種異族の關係にあるアジアの北種を中心として、大わだつみ系國津神(アジア大陸南種)大やまづみ系國津神(大洋種)の各種族を打つて一丸とした一種の聯立國家であつて、神話は、アジアの北種を白兎で表徵し、

アジアの南種を鰐で表徴して居たのだ。白い烏・白い狐・白い熊・白い兎・白い鯨・概してこれアジア大陸の北部のものである。白兎が北種の中の或るものを象徴し、鰐が南種の或るものを表徴して居ることは、殆ど疑を容れるの餘地がない。

これは何人にも異存のないことであらうが、鰐は日本の近海には殆ど姿を見せぬ動物だ。揚子江まで南下すると初めてアリゲータアと呼ばれる鰐の一種が見られる。しかし一般には何と考へても、南支那・佛領インド支那・タイ・ビルマ・マレイ・もしくは南洋諸島のものだ。從つて漢・魏・時代支那人から倭人と呼ばれた民種は、現今の南支那から佛領インド支那・タイ・ビルマ・マレイ・方面にかけてはびこつて居る玀々（タイ）モン-クメール・サカイ・もしくは苗族のいづれかにあたるものと見なければならぬ。但し、現今この方面には嚴密にいふと、その後悠久の歳月を經る間に玀々・モン-クメール・苗族・とは全くその系統を異にする幾多の民種・民族・が打交つて分布せられて居ることを注意して置く必要がある。例へば廣東で珠江の流れに舟を泛べ、陸上と全くかけ離れた特殊部落を營んで居る『蛋民』と呼ばれる頗る好戰的な、慓悍な民種、最近、日本軍によつて占領された海南島の中央山嶽部に苗族と境を接して蕃つて居る『黎』と呼ばれる蠻族の如きそれである。或る人はこれらの蠻族を、北種の中の或るものが中原に於ける存立競爭に敗れて、南方に押出されて來たものとして南方諸種族との間に於ける民族性及び文化の差異を說明して居るやうであるが、その系統は全く疑問として置いてよい。『黎』の如き、わが臺灣の生蕃の客家に似たところもある。故に南支那から、佛領インド支那・シアム・ビルマ・マレイ・にかけての民族を總括して玀々とか、苗とか或る一種族の名で代表させることは、少しく無理であらうが、わが『古事記』の名稱に從ひ、これを總括して常世族（亞熱帶人）と呼ぶことには、何人にも異議あるまいと信ずる。今日では南支・佛領インド支那・方面も追々に開けて來て、人畜に害を及ぼす鰐の如き動物は、滅多に姿を見せぬことになつて居るのであるが、唐代の文豪-韓退之が、憲宗に封事を上つて政弊を痛論し、その逆鱗に觸れて潮陽に流謫された頃は、この鰐が廣東に近い潮州あたりにも少からず棲息して居て、人畜を害することが夥しかつたものらしい。韓退之が潮陽に流されたことは、かれが潮陽に下る途中、陝西の藍關に至つて姪の孫湘に示したといふ有名な詩、

一封朝ニ奏ス九重ノ天、
夕ニ貶セラル潮陽路八千。
聖明ノ爲ニ弊事ヲ除カント欲シ、
肯テ衰朽ヲ以テ殘年ヲ惜マズ。

雲ハ秦嶺ニ横ハツテ家何ニカ在ル。
雪ハ藍關ヲ擁シテ馬前マズ。
知ル汝遠キヨリ來ル應ニ意アルベシ
好シ何ガ骨ヲ埋メヨ瘴江ノ邊。

で廣く日本人の間にも知られて居る。韓退之は、さうしてその謫地に著いたのであつたが、この地方の谿水に獰惡な鰐魚が棲息して、常に附近の人畜を害して居る噂をきくと、それは困つたことだといふので、得意の大筆を揮ひ『鱷魚文』の一篇を草して一羊一豚の犧牲を捧げ、これを谿水に投じ、その名文の德で鰐魚を退散させたといふことがある。韓退之の流された潮陽が廣東省に屬し、福建省との境にある汕頭附近であることも、支那事變以來、殆ど知らぬ人もないほど有名になつた。

（註記）鰐は一般にアフリカを本場とし、アジア・アウストラリア・アメリカ・の熱帶地方に分布されて居るクロコダイル（Crocodile）をいふのであるが、その一種、アリゲータア（Alligator）と呼ばれるものは、現今でも揚子江に棲息して居る。汕頭に棲んで居たといふ鱷は、いふまでもなくアリゲータアであらう。

米と絹

原日本人がその高天原時代、すでに葦原中國なる保食神から、米作と蠶絲業とを學び得て、大にその國富の增殖に成功すると同時に、葦原中國に對する伊弉諾・伊弉冊・兩神以來の國策遂行に拍車をかけられたことは、すでに述べて置いた通りであるが、こゝに天孫民種と豐之國なる倭族との文化交渉を打切るに臨み、今一度、米作と蠶絲業とに就いて、記・紀・の記述から若干の證據を補つて置きたいと思ふ。

米の原產地がインドからビルマ・ベンガル・にわたる地方であることはこゝに物識りめかして、片假名の學者の名を列記するまでもなく、日本の學者も齊しくこれを認めて居る。こんどの事變で南支一帶の地が皇軍の占據するところとなつてからは、米の原產地が、その地方であるといふことは、いよ〳〵われ〳〵日本人の常識化してゆくことと察せられる。國力の發展といふことは、どの方面から考へてもよいことだ。

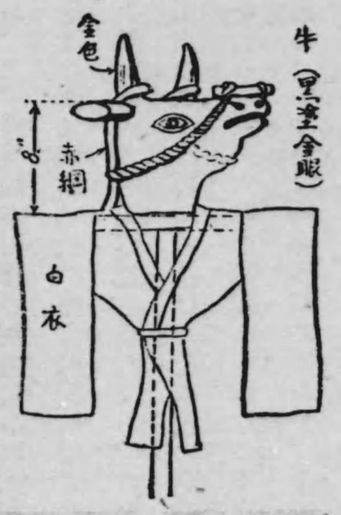
養蠶を漢族に傳へたものが苗族であつたことも、今日では殆ど疑ふ餘地のないこととなつて居る。但し、苗族の持つて居た養蠶・製絲・の方法はまだ極めて幼稚なもので、繭を口の中に含み、

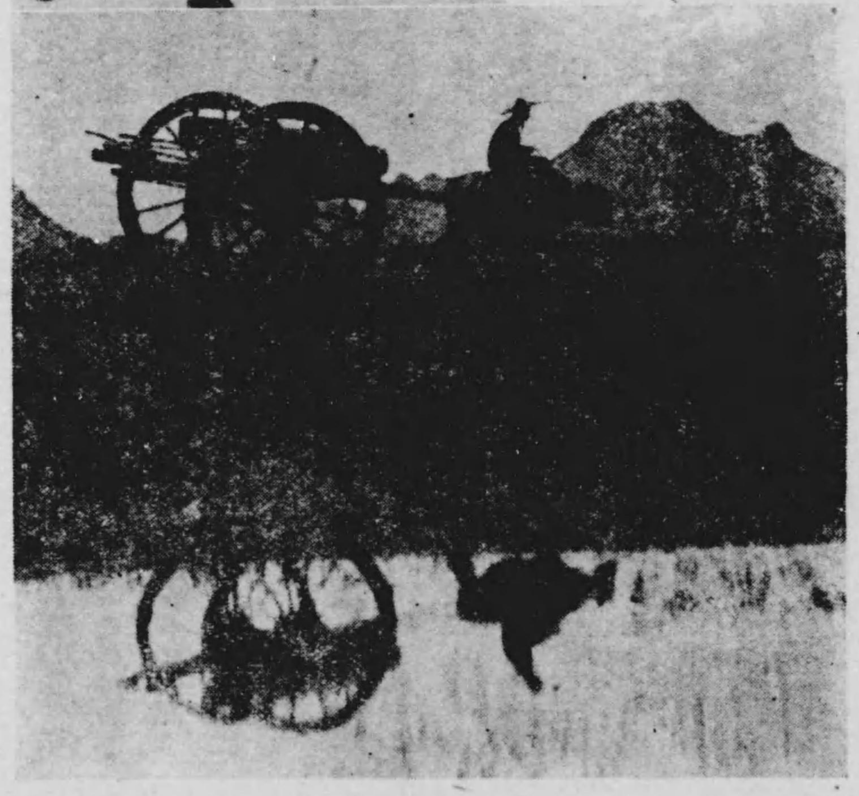
それから絲を紡ぎ出し、その絲で布を織るといふ程度のものであつた。豐之國なる保食神が高天原に傳へた養蠶・製絲・の法も、恐らくその程度のものであつたに相違あるまい。養蠶・製絲・業が跳躍的の進歩を遂げ、その精巧な絹織物が、陸路エウロッパ諸國に傳はつて、白人の眼を驚かし、東方に不可思議な『絹の國』のあることを知らせたのは、恐らく周代以後のことであらう。

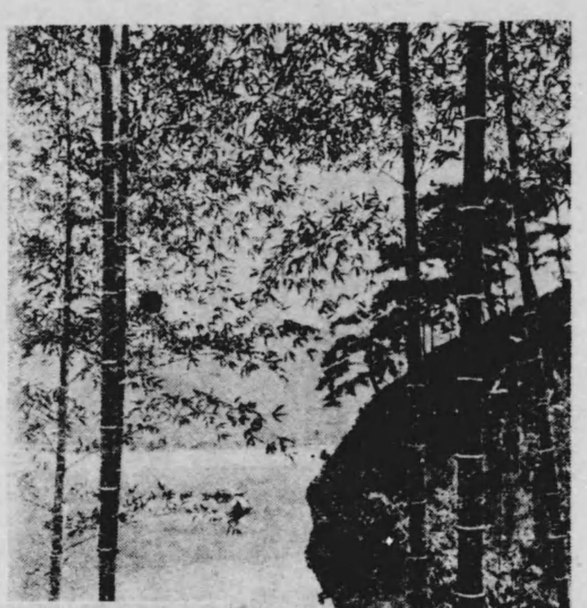
第二節　天然物その他による豐族の研究

騎牛の八幡神

なほ、この豐族が南方アジア大陸を故郷とする國津神であつた著しい文化的特徴として、牛と鰐と竹細工とを擧げることが出來る。牛は、文獻歷史と關係のない地質時代まで遡るとすれば、北方大陸にも南方大陸にも到るところにその骸骨を發見することが出來るであらうが、凡そ現世界となつてからは、主として南方大陸のものであることが著明である。アジアで最も多く牛を產し、農業に工業に或は交通運輸に最も多く牛の利用されて居る部分は、南支那・インド支那・タイ・ビルマ・マレイ・インド・を包括する南方暖・熱・帶地域である。豐族の故郷はこれらアジア南方大陸の或る部分であつたに相違なく、その文化には牛の利用が著しい。たとへば平安朝時代に入り、八幡三所大神は八幡太郎義家の武名に因み、軍神として崇拜されることになつたが、この神の本地である宇佐地方に行くと、八幡神は馬に乘らず牛に乘つて御座る。大分縣には宇佐八幡を繞つて騎牛の神佛が頗る多い。中津に近い八幡古表神社には、國寶に指定されてゐる『女神騎牛之像』が安置せられて居る。古くから神功皇后の御姿と傳へられて居るが、それは明かでない。神像の高さ約一尺三寸、顏面は白く、黑髮を後方に垂れ、玉眼を嵌裝し、赤地に劍花菱、金文ちらしの唐衣を著し、無地絲一色の半被を纏ひ、黑地に金花菱文の袴を穿ち、牛背に乘り、手綱を取つて居る御姿が現はされてゐる。牛の高さは一尺八寸、長さ二尺五寸、黑塗りで玉眼が嵌裝されて居る。又、豐後國高田驛の東南なる西國東郡田染村眞中の眞木大堂には騎牛の『大威德明王』が安置せられて居る。この像も國寶に指定せられて居り、高さ約七尺、三面六臂六脚、頂上更に三面を戴いて居る。炎髮逆さまに立ち、口を開き、牙を現はし、巨大な臥牛に跨がつて御座る。手は正面の二手に縛印を結び、その他の脇手はいづれも物を執持つて居る。面貌は穩やかの中に威力を含み、六脚六臂の體軀にも聊かの不自然を感ぜしむることがなく、牛背上に安定の趣きを得て居る。かやうに神佛が馬に乘らず、牛に乘り、牛が神佛とともに神聖視せられて居ることによつ

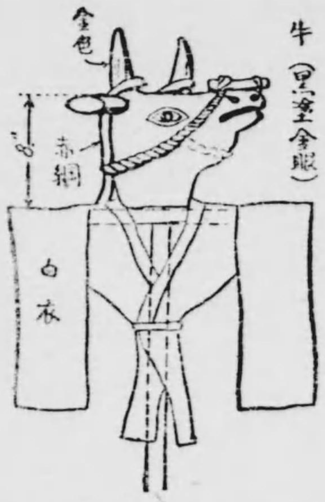






（右ページ上段右）米の作付及び收穫に深き關係ある阿蘇神宮祭典の立物。（同上左）豐前國中津近郊、八幡古表神社の神體―騎牛の女神像（同上段）廣東省の農村風景、夕燒を浴びて家路を急ぐ農夫と耕牛

（五ページ上圖）浙江省の竹林風景、竹はどこにも生えるやうで實はさうでない。暖・濕・帶地域こそ竹の本場である。（同下圖）廣東・廣西・地方の農村に見うける竹細工の水車。



（右ページ上段右）米の作付及び收穫に深き關係ある阿蘇神宮祭典の立物。（同上左）豐前國中津近郊、八幡古表神社の神圖—騎牛の女神像（同上段）廣東省の農村風景、夕餉を浴びて家路を急ぐ農夫と耕牛

（乙ページ上圖）浙江省の竹林風景、竹はどこにも生えるやうで實はさうでない。暖・熱・湿地域こそ竹の本場である。（同下圖）廣東・廣西・地方の農村に見うける竹細工の水車。

て、豐族の故郷がアジアの暖・熱・帶地域であつたことが明かに想像せられる。總て牛を神聖し、神佛とともに崇拜するの風は、アジアに限らず、世界を通じ暖・熱・帶地域を周る著しい文化の一端である。殊にアフリカ大陸に於いてそのしかるを見る。

牛を神格化して崇拜する習俗が、廣く南方・暖・熱・帶人の間に行はれて居ることは、人のよく知るところであるが、天熊大人といひ、大背飯熊大人といひ、『大人（うし）』の敬稱を以て呼ばれた人が、わが古代史の上で、常に常世族と深い關係を持つて居たことは、必ずしも偶然であるまいと考へられる。

『大人』の敬稱について聯想されることは天孫民種の間で貴人を『うま人』と呼んで居たことだ。駿馬はいふまでもなく北方高原のものだ。天孫民種が北種でその貴族を『うま人』といひ、豐族が南種でその氏の上を『うま人』といふなど、何だか談義が落語に墮したきらひもあるが、ユウモリストが口から出まかせにやつてのけるユモレスクが、期せずしてエチモロジイの圖星をさすことわれ〳〵の往々にして體驗するところだ。

暖帶植物としての竹

竹について考へるに、竹は日本の風土・氣候・に適應してから餘りにも普通のものとなり、これに對しては何人も特に暖・熱・帶地域のことを考へぬが、實は溫・寒・帶地域には全く惠まれぬ植物であること、朝鮮半島から滿洲・シベリア・にかけて旅行したことのある人の切に感ずるところでなければならぬ。日本にこの植物が廣く普く行渡つて居るのは、全くその本來の氣溫が日本海流と對馬海流とによつて調和されて居る結果であつて、暖・熱・帶地方から來る海流と氣流とに惠まれぬ朝鮮半島の大部分（全羅南道・慶尙南道・の一部分を除く）と滿・蒙・シベリア・には、絶對にこの有効な植物の姿が見出されぬのだ。

日本內地でも竹林の鐵道沿線に見られるのは、せいぜい仙臺から小牛田あたりまでで、それから先は熊笹程度のものとなり、物の役に立つほどのものは全く見られない。（但し海岸地方のことは知らぬ）福建・廣東・廣西・雲南・地方に上陸して奮戰した皇軍の勇士たちは、竹が江南の地でどんなにその日常生活の上に大きい役割を負擔して居るかを具さに見學されたことであらう。この竹の利用は、佛領インド支那・タイ・ビルマ・マレイ・と赤道に向つて進むに從つていよいよその範圍を擴めて居る。タイ地方には竹籠で造つた船さへ見出される。イギリス人はこれをバスケット・ボートと呼び、メーコン河流域地方では、この籠船で相當重量の荷物が運搬されて居るのを

見かける。この竹籠の船の目は、牛糞と樹脂とを練混ぜた塗料で塗潰されて居ること前に述べて置いた通りだ。

神代以來の寧波航路

されば豐族は、その文化の最も著しい特色である操船・航海・の術によつて、神代から夙に南支那地方と交通往來して居たものに相違なく、日本と支那との直接交渉は、推古天皇の御宇、聖德太子によつて發遣された小野妹子を正使とする遣隋使がその濫觴といふことになつて居るが、それは文獻の上に現はれた限りのことであつて、豐族は天孫民種の前衛として、すでに神代の昔から盛んに南支那地方と直接交渉を持つて居たものに相違なく、雄略天皇の卽位十四年、身狹村主（むさのすぐり）・青（あを）等を吳國に遣はして刺繍織文の熟練工を召された時も、宗像神社の宮司はその神代以來の傳統に基き、何くれとなく御船の御案内を仕つたものに相違なく、青等が首尾よく使命を果し、吳國から四人の織女・漢織・吳織・兄媛・弟媛・を率ゐて歸朝した時も、宗像神の御仰せで四人の女工のうち一人を神に上れとあると、青等は一儀に及ばずその中の一人を宗像神に上つたうへ、住吉の津に著船したといふことが見える。これで神代以來、宗像神と寧波航路との間にどんなに深い密接な關係があつたかといふことが察せられる。

平安朝の末造、平淸盛が都を福原、すなはち今の神戸の地に遷し、和田岬に築港し、音戸の瀨戸を開鑿し、瀨戸內海の海賊船を總動員して大いに南宋との貿易を振興し、その收入によつて政權を保靠しようとかゝつた際、安藝の宮島に宗像三女神の一柱・市杵島姬を祀り、社殿を宏莊にし、港灣を改修して船舶の碇泊に便したことも、國史の上に著しい事實である。

弓矢の神・隘路の神・としての八幡大神

されば宗像三女神と異名同體なりとの說の有力である欽明朝以前の宇佐三所大神も、初めは明かに、航海の神であつた。この神が軍神、殊に陸戰の神と思惟されるやうになつたのは、八幡太郎義家の誕生に因む傳說が、俗耳に入り易く、一般の成心を形造つてしまつたからで、その取るに足らぬことは伴信友先生の辯妄に一任して置いてよいことだ。八幡太郎は人も知る如く騎射の名人で、弓馬が八幡太郎か、八幡太郎が弓馬かといはれるほどのものだ。ところが八幡神の元の御姿は、馬とは全く緣が遠い。前にくはしく述べて置いた通り、豐前の中津から宇佐に至るいはゆる碩田（大分）の平野には、到るところに八幡神が奉祀されて居るが、地元の八幡神は馬に乘ら

す、牛に乘つて御座る。この牛が大分縣の名産である竹とともに『おほわだつみ族』が南方から將來したものであり、その植民地である但馬・丹波・の牛と密接の關係のあることは疑ひのないことだ。少年時代鎭西に人となり、八幡船の徒弓（かちゆみ）に練達して、世にその手だれを謳はれた爲朝も、騎射全盛の京都に入つては、折角の神技も施すにところなく、保元の亂に五人張の强弓に、三年竹の節近なるを、山鳥の尾にて矧ぎ、七寸五分の鏃をくはせた恐ろしい矢を番へて、先づ伊東景綱の郎等・伊東五を殺し、伊東六を脅かしたが、第二矢ではまんまと山田小三郎といふ敵方の荒武者を射損じて居る。それから莊嚴院の門前に立つて諸兵を指揮して居る義朝をねらつたが、その兜の星に中つただけで、『八郎の術未だ至らず』と嘲られた。やゝ焦り氣味となつた爲朝は、更に大庭景能に對して一矢を送つたが、これも右手に交されてまんまと射損じた。八幡流の弓勢は馬上の役に立たなかつたことがこれでよく分る。騎射は元來、蒙古人・トルコ人・のもので、南方種族のものでない。事の初め義朝が爲朝の弓勢を評し、『八郎筑紫に人となり、船中に遠矢を射ること、或はこれを知らん。徒立のいくさはかれの尙ほ未だ熟せざるところ、若し馬上の働きに至つては、かれいかで坂東武者に敵せんや』といつたのは當つて居た。これで坂東武者の間に八幡流の弓勢が如何に評價されて居たかゞよく分る。

それかといつて、宇佐八幡と軍旅と全然關係がないかといへばさうではない。豐前の宇佐は、國東系連山と由布系連山との隘路を扼する軍略上重要な地點で、天孫御降臨以前から日向・大隅・薩摩・の一角に蟠居した隼人族に對する究竟の要害となつて居た。隼人族は『おほやまづみ族』の一派で、火闌降命を擁して、『おほわだつみ族』と乾坤一擲の輸贏を爭つたが、一敗地に塗れて火遠理命の御稜威に靡き、永く吠犬となつて朝廷の御墻を守り、又俳優となつて奉仕せんことを誓つてから、表面は恭順の意を裝ひつゝも、內心には常に反噬の牙を磨き、中央に事が起ると、必ず叛いて不逞の徒に味方するのであつた。隼人族が大隅・日向・の境を出でて、海岸傳ひに延岡・臼杵・大分・別府・と進出し、由布系連山と國東系連山との隘路を越えて、豐前の平野を侵さうとかゝつた時、これを拒ぐ究竟の要害こそ宇佐の地であつた。この隘路に八幡三所大神の鎭座ましますことは決して偶然でない。（本書第一九二ページ挿入地圖參照）

もちろん八幡流の弓勢も船中もしくは徒立のいくさとなつては天下無敵であつた。それは義朝も認めて居たところだ。この弓術は宇佐のやうな天然の要害を守る上に最も效果的な武器であつたといふまでもない、海南島の中核、山嶽地域に居住する『黎族』にも素晴らしい徒立の弓がある。徒立の弓はすべてその張りが强い。强弓でなければ百發百中と行かぬ。古來別府の方面か

ら宇佐の隘路にさしかゝつて豐前の平野を侵さうとした隼人族は『おほわだつみ族』のこの强弓にかゝつて散々に惱まされたものに相違ない。この點からいふと、八幡神は航海の神樣であると同時に、軍の神樣でもあつたわけだ。八幡神を軍神とする世俗の常識も決して一概にこれをけなすことは出來ない。

現に日本全國に遷祀されて居る八幡宮は、何ほどか、宇佐の地形に因むところに奉齋されて居る。村の名もなき八幡宮でも、岡と岡との間に隘路が通じ、帶のやうな水田の開けて居るところに臨んで遷祀されて居る。八幡宮を遷祀した地形の傑作としては、もちろん山城國石清水の八幡宮を推さねばならぬ。西の方からは天王山が迫り、東の方からは男山がこれを迎へ、天王山の端とが、巾著の口のやうに締め括られたところから、淀川がとろ〳〵と流れ出して居る。この隘路を以て、高千穗・日高見の廻廊である宇佐に擬し、皇城の鎭護として勸請した行教といふ坊主こそ只物でない。

だが石清水の八幡宮は宇佐から遷祀された最初の八幡宮ではない。石清水八幡宮の遷祀される約百年以前、それは稱德天皇の神護景雲四年（寶龜元年）若狹國小濱なる後瀨山の麓に遷祀されて居た八幡宮はすでに官幣の典に預つて居た。石清水の八幡宮の遷祀されたのは、それから約百年後の清和天皇の貞觀二年である。石清水八幡宮の遷祀は、天王山と男山との隘路が皇城守護の上から見て、究竟の要害であつたからであるが、後瀨山の八幡宮は、もつと意義が大きく且つ深い。

第四章　若狭灣廻廊地帶に於ける大わだつみ族

第一節　文獻の上に現はれた若狭灣廻廊地帶の大わだつみ族

北赤道海流及びその支流

さて天孫御降臨以前の日本で、この兩筑・兩豐・以外に大わだつみ族(常世族)の一派の分布されて居たところは、裏日本の若狭灣廻廊地帶だ。裏日本といふと讀者諸君の中には、皆までいはせず、目を丸くして驚かれる向もあらうが、大わだつみ族の故郷は前來、段々述べて來たやうに現今の廣東・廣西・雲南・地方から安南・カンボヂア・タイ・ビルマ・マレイ・方面に亙る亞熱帶地方であるから、この亞熱帶人、すなはち常世族が日本に徙つて來るにはどうしても黑潮の本流には乘らず、黑潮の支流に乘つてやつて來たものと考へられる。黑潮は、學名を北赤道海流と呼ばれて居るやうに、メキシコのアカプルコ沖にあたる洋上から、赤道に沿ひ太平洋を横斷して眞直にフイリツピン群島に吹きつけ、それから鋭角度に折れてわが九州の南端を洗ひ、四國・紀伊・の沿岸を東海道に沿つて金華山沖に至り、そこで千島の方から來る親潮、すなはち千島海流と衝突した後、アラスカの近海に向けて外れて居る。北赤道海流のこのコースを假に黑潮の本流と呼ぶことが許されるならば、この海流が八重山群島中の石垣島附近で分岐して、東支那海に出で、朝鮮海峽を通過して、規則正しく裏日本の線に沿ひ、日本海と津輕海峽及び間宮海峽の兩方に融けて居るのを、黑潮の支流と呼ぶことも許されてよいわけだ。

山陰道の海岸地方から若狭灣廻廊地帶は冬季シベリア方面から吹付けて來る西北風をうけて、寒嚴が甚しかるべき筈であるのに實際はさほどでなく、山陰道から若狭灣廻廊にかけ亞熱帶植物の繁茂が盛であるのも全く對馬海流(黑潮支流)が、氣候を調節して居るからだ。石見・出雲・の海岸には稀にはまゆふも見出され、出雲・伯耆・には大分縣に劣らぬ竹林も目立つ。隱岐が全島亞熱帶植物で蔽はれて居ることも、人のよく知るところであるが丹波・丹後・若狭・越前・の宮々にはいぬ樟の老木が鬱蒼として茂り、天橋立なる出洲には、岩見重太郎が親の讐を討取つたといふ跡に近く、めづらしいやまもものの老木が二株まで盤踞して居る。又、若狭小濱の町には姥目樹の相

當年緒を經たのさへ見うけられる。

今、大わだつみ族が南支那もしくはインド支那の或る地點から海に乘出したとすると、その好むと好まざるとに拘らず、黑潮の支流に乘つて、東支那海から朝鮮海峽の方向に吹きつけられなければならぬことは必然の理だ。さうして大わだつみ族が朝鮮海峽を通過して若狭灣廻廊に上陸することは、その針路を變じて玄海の風浪を征服し、博多の津に著くよりもむしろ容易であつたに相違ない。未開時代の船は一に風任せ、潮任せで、今日の機械船のやうなわけには參らぬ。大わだつみ族の故郷・常世國からいつて、若狭灣廻廊地帶は、最も遠いところに置かれた植民地ではあつたが、その航路は博多に著き、出雲に著くよりも、むしろ遙に容易且つ安全であつたに違ひない。未開時代の航海のことを、今の機械發動船時代と同じに考へてはならぬ。

新羅建國の神話に搖動する但・丹・若・越・人

大わだつみ族は兩筑・兩豐・地方及び若狭灣廻廊地帶以外、出雲國にも朝鮮半島の南端にも分布されて居たといふまでもない。しかし、前にもちよつと觸れて置いたやうに、出雲地方は大陸との關係上、アジアの北部から押出して來た天孫民種と同種異族ともいふべき、先住民族が少からず混つて居た。その上、黑潮本流（北赤道海流）の關係による大やまづみ系國津神―マレイ・ポリネシア人も混つて居たことは申すまでもないことだ。しかるに出雲地方とちがひ、若狭灣廻廊地帶は概して單一大わだつみ族（豐族）の植民地であつたと考へられる理由が多分にある。この若狭灣廻廊地帶と朝鮮半島南端の倭人部落、すなはち當時、馬韓・弁韓・辰韓・と呼ばれた地方との間には、隨分親密な關係があり、その交通も頗る頻繁に行はれて居たものだ。この交通關係が、後に新羅の起るに及び、重大な事實となつて歷史の上に現はれて居る。後の三韓は前の三韓と違ひ、半島の殆ど全部が、新羅・高句麗・百濟・と三分されたわけであるが、この後の三韓の中、最も強かつた新羅といふのが、前の弁・辰・韓から起つて居ることは朝鮮の古文獻に著しい事實だ。しかもこの弁・辰・韓といふのは、元來馬韓にくらべて、人種が遙に劣つて居た。それにも拘らず、新羅が非常に強大となつたのは何故であるか。これは外でもない。その建國の傳說に光つて居る偉大な王樣が、殆どすべて土著の弁・辰・韓人でないからだ。或るものは瓢の浮力を利用した船に乘つて漂著したらしく、又、他の或るものは、蓋のある桶のやうなものに這入つて、筏で漂著したらしい形跡が十分にある。いづれにしても新羅の皇祖は、初代も二代も土著の新羅人でなかつたことが、朝鮮の古文獻の上に明かである。

さてこれら新羅建國史の上に、最も輝かしい光を放つて居る王様の一人に脫解といふ英傑があつた。傳記によるとこの脫解の母なる人は、もと倭國のもので、父は『多婆那國』の人とある。又同じくだりに多婆那國はわが九州の倭人國すなはち筑・豐・の地から東北凡そ一千里の地點にあると註されて居る。これは何としても但馬もしくは丹波のこととしか考へられぬ。

『魏志』の『投馬國』は果して但馬國

こゝで前に兩筑の平野に蓄衍してゐた倭人の諸部落に關して述べたくだりで、その斷案を保留して置いた不彌、すなはち現今の筑前國糟屋郡宇美町から『南へ水行二十日』のところに投馬國があるといふ『魏志』の倭人傳による記述が再び問題となつて來る。これは前にも詳しく述べて置いたことであるが『魏志』の倭人傳によると、當時わが兩筑の諸女王國に向けて派遣された魏國の使節は、朝鮮半島の南端・馬山灣あたりから船出して對馬・一支・末盧・伊都（委奴―怡土―絲島）・那・不彌・と經て、耶馬臺（山門郡）女王國に達して居る。その記述は各女王國間の道程に何程かの誇張があるだけで、完全に天然地理と合致して居る。たゞ不彌から南へ水行二十日のところに投馬國（但馬國）といふ一女王國があり、魏の使節はそこへも立寄つたといふことが天然地理と合致せぬので德川時代からすでに學者の間に激しい論爭の種となつて來たものだ。但しこれとても筑後川の河口が今よりもつと灣入し、山門・三潴・三井・三養基・神埼・佐賀・の諸郡を蔽ふいはゆる筑紫平野が大部分海であつたとすれば天然地理と合致して來る。しかし『投馬國』は何としても『但馬國』の訛傳らしく、新羅建國の歷史に明記されて居る『多婆那國』の位地及びその倭國との關係を照較して考へると、『南へ水行二十日』とあるのを『北へ水行二十日』の誤記であるとした伴信友の說（中外經緯傳）が非常に有力となつて來る。

伊覩の縣主・五十迹手の事

更に若狹灣廻廊地帶に蓄衍した大わだつみ族が、天孫御降臨以前から兩豐の沿海地帶をめぐつて蓄衍し、神祖御三代の前衞として、朝鮮及び南支那地方との交通貿易を管掌して居た動かぬ證據の一つに、神武天皇大和御建國の後も、歷代の朝廷は若狹灣廻廊地帶から人物を選び、もとの倭國の咽喉にあたる博多地方の縣主として任命して居た形跡が著しい。

仲哀天皇は御即位二年正月、新羅征伐の作戰上最も重要の地點である丹波國から皇后として丹波主・息長宿禰の女・息長足姫を迎へられることゝなつた。皇后の御母は、一般に新羅の歸化人と

いはれて居る天日矛の後裔に當る多遲摩比多訶の女にて在し、古來韓半島とは最も關係の深い家柄であつた。これより先、天皇の妃には、御叔父の女に當る大中姫があつたのであるが、この時に至り、新羅との關係がいよ〳〵切迫したので、息長足姫が皇后として迎へられた次第である。又なぜ丹波國が新羅征伐の作戰上、重要となつて居たかといふと、それは丹波はその頃新たに開けた笥飯の港、すなはち今の越前の敦賀を包括して居たからで、笥飯は垂仁天皇の時、都怒我阿羅斯等が當時尚ほ女王國の統轄に屬して居た筑前の那津を避けて穴門に著船し、そこから內海に入つて直接大和の朝廷と交渉を開始しようとしたが、穴門に伊都々比古と呼ぶ豪族があつて、われはこの國の王であると稱し、海峽の通行を阻み、阿羅斯等を抑留すること久しきに及んだので、阿羅斯等は迂廻して日本海に出で初めて笥飯の港に入つた。この時から笥飯と加羅國との交通が大いに開け、新羅と事を構へる上には最も重要な地點となつた。後に、この港を角鹿（敦賀）と呼ぶやうになつたのは、都怒我阿羅斯等の著船以來、俄に開けたからであらう。

新羅の亡狀はすでに景行・成務・兩朝以來の大問題であり、笥飯の行宮に於いては、丹波公・多遲摩公・の一族を始め、北國の豪族どもを召集して、新羅征伐の大軍議が催されたものに相違ない。かやうに軍議の催されて居るところへ、熊襲不穩の情報があつたので、天皇は皇后及び諸官を笥飯の行宮に止め置き、親らは二・三・の卿太夫と、數百の供奉とを隨へ、三月輕裝して南國に御巡幸あり紀伊國德勒津宮に於いてしば〳〵軍議を重ねられた結果、いよいよ親征といふことに決した。德勒津宮は今の紀の川の河口に當る。これは船艦の艤裝に關係のあつた土地であらう。

かくて一切の戰備が整つたところへ、熊襲がいよ〳〵叛いたといふ牒報があつたので、天皇は急遽德勒津宮を發して海路直に穴門に向はせられ、笥飯の行宮なる皇后の許には、特使を以て別に將士を勒し、戰艦を率ゐ、北海から巡つて穴門に天皇の御軍と會するやうに命令が下された。六月、天皇は穴門なる豐浦津に御船をとゞめさすところに、皇后は北國の兵を率ゐ、多くの戰艦を引具して、七月豐浦津に來會された。

かくて天皇はその年の九月豐浦津に宮殿を營み、先づ北九州の經營を先にされることゝなつたらしく、八年の正月まで豐浦宮に駐蹕あらせられたが、この月豐浦宮を發して筑紫に渡御あり、岡（筑前國遠賀郡）の縣主・熊鰐、及び、伊覩（筑前國怡土郡）の縣主・五十迹手等の奉迎を受け、遂に那津に幸して、橿日宮に駐蹕あらせられた。

この熊鰐が大わだつみ族の中、豐族に屬する有力者であつたことは容易に知られる。前にも幾度かことはつて置いたやうに熊は米の古語であつて、獸の熊ではない。米作民族には形容として

熊を冠した。鰐は豐族の表徵であり、豐玉姫のくだりには海軍もしくは水兵の意味に用ひられ、『本國の形』とまで强調されて居る。

伊覩（怡土・伊都・委奴）の縣主・五十迹手（伊覩縣主の意）は、前掲天日矛の後孫で、垂仁天皇の御宇、『非時の香果』をとる爲に常世國に發遣された多遲摩毛利（但馬守）の一族であることが分つて居る。この時、五十迹手が天皇を恭迎し奉つたさまは、古史の明細に記述するところであり、その大和朝廷との關係が尋常一樣のものでなかつたことがよく分る。

すなはち五百枝の賢木に八尺瓊・白銅鏡・十握の劍を掛けて船の舳艫に立て、穴門の引島に奉迎して恭しくこれを獻じ、奏し申すらく、『臣敢てこの物を獻る所以は、天皇八尺瓊の勾れるが如く曲妙に天下を治めしめん。白銅鏡の如く分明に天下に照臨し、十握劍を提げて天下を平げたまへとなり』と。天皇これを御嘉納あらせ、號を伊蘇志と賜はつたとある伊蘇志は有効者の意である。

これで若狹灣廻廊地帶の豪族（おほわだつみ系）を簡拔して、奮倭國の縣主に任命して居られた事情がよく分る。倭は豐とちがひ、久しく漢・魏・の支配をうけて居た關係上、その統治がよほど困難であつたものと見える。

第二節　神社の系統並に配置から觀た若狹灣廻廊地帶

若狹彦神社と若狹姫神社

神武天皇の御東征といふことは、高千穗・日高見を、大和・日高見に移されたのだといふことでさへ、これまでの歷史だけを讀んで來られた讀者には耳新しく聞えるであらうが、その御東征は實は日高見ばかりでなく、日高見の廻廊である『おほわだつみの國』をも若狹灣の邊に移されたものであつた。その動かぬ證據には、凡そ『おほわだつみ族』の本國であつた豐前・豐後・の海岸に祀られて居るかれらの祖廟は、悉く若狹灣をめぐる半月形廻廊地帶に移されて居る。『おほわだつみ族』の根本的祖神は、前にいつた豐受姫神、又の名、保食神であるが、この神は今の丹後國、すなはち昔の丹波國に宮があつて、そこから雄略天皇の時伊勢の外宮として奉遷された。又宇佐八幡の御神體については種々の說もあるが、應神天皇・神功皇后・比賣大神・の三柱を奉祀するやうになつたのは欽明天皇の御時からといふことになつて居る。しかし八幡三所大神といふものはそれ以前からあつたもので、それ以前の三所大神は、前にいつた宗像三女神と異名同體說が

最も有力だ。（註の一――第三八五ページ參照）宇佐八幡の勸請されたものの中、最も著名なのが男山なる石清水八幡宮で、これは京都の鎭護となつて居るのであるが、その勸請に先つ百年前、宇佐八幡はすでに若狭國の後瀨山の麓に奉遷されて居たことが文獻の上で明かである。今では石清水八幡の方が有名で、後瀨山八幡のことは知る人もないが、本來後瀨山八幡宮の方が少くとも百年以前の勸請でもあり、大和・日高見の廻廊としてあらたかなわけでもある、殊に爭はれぬことは、『おほわだつみ族』の援助を得て『おほやまづみ族』すなはち『隼人族』を討平遊ばされた彦火火出見尊の御妃は『おほわだつみの神』の御女・豐玉姫といふことになつて居るのであるが、その由緒深い彦火火出見尊（火遠理命）と豐玉姫との御靈が、やはり後瀨山八幡宮に近い遠敷村に古くから若狭彦神・若狭姫神・として祀られて居た。この若狭彦神と若狭姫神とが彦火火出見尊と豐玉姫との御靈を奉遷したものであることは、その神社の記錄に徵しても明かだ。

豐受姫神（保食神）の御社

但馬・丹波・（丹後）若狭・越前・の地が大和・日高見に於ける皇居の廻廊であつたといふことは、必ずしも　神武天皇が大和を御平定になつた爲にその廻廊となつたのではなく、その由來は天孫・瓊瓊杵尊が九州の一角に御降臨になる前からすでに『おほわだつみ族』の植民地であつたといふ關係に基づいて居るのだ。そこに『おほわだつみ族』の中の豐族の最も根原的な祖神である豐受姫神の御社があるといふことは、これも隨分古くからの問題である。それにはこれを文獻的に證明する幾多有力な資料（支那・朝鮮・の古史によるも）もあるが、それは省いて置く。豐受姫神の御靈が、雄略天皇の御宇、伊勢國五十鈴川の上なる天照大神の御召により、外宮として伊勢國に御遷幸になる前、丹波國に鎭座ましましたといふことについては、古來、國學者が『倭』（九州）と『大倭』（本州）とを辨別し得なかつたところから、一つの大きい錯誤に陷つて居る。豐受姫神の御靈は崇神天皇の御宇まで『倭大國魂神』として、天照大神の御靈とともに宮中に奉齋されて居た。しかるに日本にも　崇神天皇の頃から祖先の御靈を同床に奉安し起居をともにして居たのでは神威を汚す恐れがあるといふ思想が起り、これをしかるべきところに遷して奉齋しようといふことになつた。その時崇神天皇の皇女・豐鍬入姫命が勅命を奉じて、その御靈の『御杖代』となり、天照大御神の御靈を奉じて、一先づ大和の笠縫邑に奉齋した。この時『御杖代』として選ばれた豐鍬入姫命と申上げ奉るのは、アジアの北種すなはち、ウラル・アルタイ系（ツラン系）民族の間に弘通して居る祖廟齋仕の巫女に見る靈の仲媒性を具備して居た御方であつたらしく、しき

りにその祭神の御告が御身の上に乘り移つて來る。もちろん、著者はこゝに輕々しく日本の『齋宮』を以て、ウラル-アルタイ系諸民族の間に弘通する『巫女』に擬するものではない。たゞその清淨な肉體の上に、祖先の靈魂が乘り移つて、その神託を傳へる靈媒の働きの頗る似たものがある事實をいふだけのことだ。その御告で笠縫は御氣に召さぬといふので第二番目に丹波の吉佐宮にお移りになつた。ところがそこも適當でないといふので、大和の伊豆の加志本宮といふのに還幸になつた。それが今の磯城郡初瀬村である。これより先、天照大御神の御靈が宮中を御出ましになると同時に、豐受姫神（倭大國魂神）の御靈も、皇女-渟名城入姫命を御杖代として、大和の市磯といふところにお移りになつた。ところが、『紀』にこの豐受姫神の御魂が『倭大國魂神』と記されて居るので、德川時代の國學者中誰一人としてこれを豐受姫神の異名と氣づくものがなく、大和國地元の神の御靈と間違へてしまつた。『倭』は狹義に『耶馬臺』をいひ、廣義に『九州』をいふのだ。本州の『大和』は斷じて『大倭』でなければならぬ。つまり　崇神天皇以前は、宮中に內宮・外宮・が並祀されて居たわけだ。丹波の吉佐宮に、天照大御神の御靈と豐受姫神の御靈とが並び鎭まりおはしたのは、『倭姫世記』などによると、豐受姫神の御靈が天照大御神の御側に天降られたといふことになつて居るが、それは國學者達が、『倭大國魂神』を豐受姫神と異名同體と解することが出來なかつたから起つたことで、この兩神こそ、崇神天皇の御宇までは、宮中に並び齋かれておはしたのだ。雄略天皇の御宇に至り、伊勢國に定まつた內宮・外宮・の制は、元元宮中にあつたもので、そこに日本肇國の歷史に甚く深い意義が存するのだ。

すでにして、天照大神は丹波國を去つて大和の初瀨にお移りになつたが、豐受姫神の御靈は依然吉佐宮にお留りになり、その時から凡そ五百年間、別座にて在したものらしい。ところがそれが雄略天皇の御宇に至り、時の齋宮（御杖代）倭姫命に神がゝりがあつて、伊勢に召寄せられた。これより先、豐受姫神とお別れになつた天照大神の御靈は、その齋宮とある皇女に神がゝりして諸國を轉々して居られたが、その間豐受姫神の御靈だけは丹波に留つて居られた。その丹波の吉佐宮といふのが、今なほ名所爭ひになつて居る。それは與謝郡の吉津村であるか、同郡の府中村であるか、又は現に天橋立の洲元に近い與謝郡魚井原にある籠神社であるか。とにかく、三箇所の候補地がある。それではなぜ豐受姫神だけは丹波國にさう長く留つて居られたかといふと、それは丹波國は天孫御降臨以前から倭族と豐族とを併せた『おほわだつみ族』の植民地であつたからであつた。その證據が支那の古史にも、朝鮮の古史にも、はつきりと殘つて居る。一方豐受姫神と御分れになつた天照大神の御靈は、それから轉々として西は岡山、東は遠江・三河・あたりまで

も御意に召すところを求めてお廻りになつた。天照大神が伊勢にお移りになつてから、凡そ五百年の後、朝晩食事をするにつけても、自分一人では寂しいといふ仰聞けで、豐受姫神を丹波から伊勢にお迎へになつた。この御託宣から推して考へても、兩神が元、一箇所に並祀されておはしたものであるといふことが察せられる。豐受姫神は前に述べたやうに保食（うけもち）ともいはれ、米作と養蠶との神である。この豐族の根本の祖神、前にいつた八幡三所大神よりも、宗像三女神よりも根元的な神靈が、丹波國に長く留つて居られたといふことは、但・丹・若・越・地方が、兩豐（碩田―大分）地方を基地とした『おほわだつみ族』の植民地であつたといふ究竟の證據である。

後瀨山八幡宮

八幡様は隘路の神様で丘陵と丘陵との間を通ずる隘路に臨んで祀られてある。すなはちこゝぞ天下の要害ともいつた地點に鎭座しておはする。これは本元の宇佐が龜の甲羅のやうな國東（くにさき）半島の山塊と、由布山塊との隘路を扼する要害で『大わだつみ族』がこの地點に據り常に大隅・日向・地方から北上して豐前の平野に侵入しようとする隼人族を拒いで居たことに由緒するものであらう。『おほわだつみ族』はまた徒立の强弓をよく用ひたものらしく、これは奈良・平安・朝以後、韃靼人によつて傳へられた騎射術と、日本に於ける弓術の二つの流れを成して居る。海南島の黎族の如き徒立の强弓をよく射る。八幡太郎義家は韃靼系の騎射を善くしたが、八幡神の弓術とは緣が遠く、その名の由緒の淺いことも伴信友の喝破して居る通りだ。源頼義の長男・八幡太郎義家は七歳の時、石清水八幡（？）の社殿で元服加冠したから八幡太郎と名乘り、源頼義の二男・賀茂次郎義綱は、賀茂神社の社殿で元服加冠したから賀茂次郎と名乘り、同三男・新羅三郎義光は新羅神社の社殿で元服加冠したから、新羅三郎と名乘つたのだ。たま〳〵八幡太郎が一人とりわけ有名で、賀茂次郎も新羅三郎もさほどには聞えなかつた爲、八幡大神がひとり源家の守護神でもあるやうに聞えるやうになつてしまつた。八幡太神の御由緒といへばそんな淺聞なものではない。八幡神の弓術に緣の深いのは義家でなくしてむしろ爲朝である。爲朝は徒立の强弓の名人で、その術は少年時代漂浪した兩豐地方での會得にかゝること、史の語るところによつて明らかだ。清和天皇の貞觀二年に僧行教が京都なる皇城鎭護の神として宇佐八幡を男山に勸請した。ところが若狭國後瀨（のちせ）山（やま）の北の麓に宇佐八幡の祀られて居たことの史に見えるのはそれより百年以前、すなはち稱德天皇の神護景雲四年八月一日である。八幡神のそこに祀られた因緣は、結局若狭灣をめぐる半月形廻廊が、太古から倭族及び豐族の植民地であつたからである。

第三節　傳說の上から觀た若狭灣廻廊地帶

彦火火出見尊の神話と浦島太郎の傳說

記・紀・で火遠理命（彦火火出見尊）が鹽椎神に教へられ、無目勝間小船に乘つて『おほわだつみの神』の宮居にいたり、豐玉姫と婚するくだりを讀んだほどの人は、誰でもその物語が、幼年時代から母の膝の上できかされて來て居る浦島太郎の童話と、全く同巧異曲であることに氣付かぬものはなかつたであらう。ところがこの火遠理命と豐玉姫との神話と、全く同巧異曲に屬する浦島太郎と鮫人・乙姫との傳說が、丹波國（今の丹後）與謝郡筒川村に祀られて居る宇良神社に根基して居ることもまた驚くべき事實の一つだ。筒川村に殘つて居る浦島太郎の傳說の、記・紀・の上に殘つて居る火遠理命の神話と異るところは、後者の場合、命が『おほわだつみの神』の宮居に到りまして、そこで豐玉姫と御結婚を遊ばされること、現に行はれて居る童話の條理と全く同じであるのに、前者の場合、すなはち　雄略天皇の御即位二十二年、丹波國筒川村に起つた事件の條理によると、乙姫が先づ水江浦島の海上に姿を現はし、浦島がその容姿に感じてこれと結婚し、ついでその跡を追つて蓬萊山（常世國）に赴いたといふことになつて居る。つまり、現に行はれて居る童話は　雄略天皇御即位二十二年の記事よりもむしろ火遠理命の神話に近いものに作りかへられて居るわけだ。水江浦島の子の記事は前掲『日本書紀』を始めとして『扶桑略記』『釋記』等、いづれも大に潤飾を加へてこれに載せて居るが、こゝには潤飾の最も少い、『日本書紀』雄略天皇御即位二十二年のくだりを引いて、讀者の參考に供することとする。

二十二年（中略）秋七月、丹波國餘社郡（與謝郡）筒川ノ人、水江浦島ノ子、船ニ乘リテ釣ス。遂ニ大龜ヲ得タリ。スナハチ化シテ（乙）女トナル。是ニ於イテ、浦島感リテ以テ婦ト爲シ、相逐ヒテ海ニ入リヌ。蓬萊山（常世國）ニ到リテ、仙衆ヲ歴觀ス。語ハ別卷ニアリ。

これは宇佐八幡宮が若狭國後瀨山の麓に勸請遷祀されて居り、火遠理命と豐玉姫との御靈が遠敷神社として同國遠敷郡遠敷村に奉祀されて居り、保食神の御靈が、豐受姫神として丹波國與謝郡魚井原に奉祀されて居るのと同じく、火遠理命と豐玉姫との御結婚に關する兩豐の神話が形を變へて水江浦島の子と常世國の乙姫との戀愛物語となり、丹波の筒川村に殘つたものと解釋してもよいが、若狭灣をめぐる、半月形廻廊には、神代の昔からこの頃までも南支地方（常世國）との交通が絶えず、海上でかの國から來た船商と邂逅し、相率ゐてかの國に赴き、相當の歳月を經

て歸つて來たものの物語が、尾鰭をつけて語り傳へられ、それが朝廷の史官の耳に入つたものと解釋してもよい。現に唐・宋・の頃、日本に向け南支那を發した商船の若狭灣に入津したもののあることは、かの國の文獻にも歴として殘つて居る。それはいづれにしても、高千穗・日高見の廻廊としての兩豐地方と、大和・日高見の廻廊としての但・丹・高志・地方との關係が、如何に密接であつたかが、この浦島太郎の傳說に徵しても十分に察知せられるわけだ。

奈良二月堂の水とり行事と近江高島郡の安曇族

古來、奈良の二月堂で早春に執行はれて今日に及んで居る水とり行事は、苟もこの舊都に關心を持つほどのものの間に知れわたつて居る著聞のまつりであるが、古來、二月堂の井戸は、若狭の遠敷郡にある遠敷川の川上と相通じ、二月堂で水とりの行はれる時は若狭の方が渴水するといひ傳へられて居る。奈良の水が、若狭に通じて居るといふ傳說も、若狭灣廻廊地帶が、天孫民種の前衞であつた大わだつみ族の占據して、朝鮮及び南支那地方との外交に衝つたところで、兩地の間に古來最も密接な關係のあつたことを示唆するものではなからうか。

若狭灣地方の大わだつみ族は、今の小濱町の近くで海に注いで居る北川を遡つて杉山もしくは百里丘の分水嶺を越え、石田川・安曇川（あどがは）・に沿つて、近江の高島郡に蕃衍して居た。いはゆる安曇族がこれである。

大わだつみ族が安曇族と呼ばれたこと、またその全國各地に於ける分布に關しては、本書の第六章第四節、湖沼・日高見論の條に詳しく述べて置いたこと故、こゝに再びそれを繰返すことはせぬが、その湖沼民族と呼ばれたところから推して、青海・西藏・の湖沼地帶を發祥地とし雲南の滇池、大理の洱海・を中心に北は四川、南は廣西・安南、西はタイ、東は貴州に蕃衍して居た玀々族らしい形跡が著しい。玀々族（タイ族）は海岸に近い臺地を、鎧型（雛壇式）の水田に仕立て、水車など利用して巧に河水を引入れそこに米を作ることになれて來た民族である。兩豐地方に行つて見ても、若狭灣廻廊地帶を旅して見ても、鎧型の水田の巧に耕されて居るのを見ると、直に雲南・四川・ビルマ・タイ・方面に蕃衍して居る玀々族のことが想出される。

越前・加賀・三河・遠江・から出土した銅鐸について

銅鐸は天智天皇の御卽位七年正月、近江國志賀郡崇福寺の建立に際して發掘されたそも〳〵の初めから、その製作地・傳來・及び用途に關して、何人もこれを判定するに惱んで來た出土品中の

歴史的怪物だ。

近年に及びそれが銅劍或は細線多紐鏡とともに發見されたところから、ほゞ金石併用時代から古墳時代の前期にかゝる遺物と推定され、その用途及び傳來の系統についても、南支那の苗族の使用する銅鼓と比較し、南方からわが國に渡來した民種の遺物と判定されるに至つたのはよいところを指したものであつた。その後、朝鮮慶州附近なる入室里の古墳から銅劍・銅鐸・馬鐸・細線鏡・とともに、銅鐸型の青銅製品が發掘せられ、大體に於いてその源流が、漢代の青銅製品にあると推定さるるに至つたのも、前説すなはち南方渡來説を打消すものではない。元來漢民族と羅族とが同じ崑崙系民種として黄河と金沙江との水源地域でその發祥地を接して居たことから考へても、兩説は決して、相尅する性質のものでない。

しかるにその後、銅鐸が越前・加賀・地方からも發見せられるに及び、正しい方向を指して進んで居た考古學界に少からず動搖の色があり、國内鑄造説さへ起つて居るのは前來述べ來つた海流の關係による大わだつみ族（安曇族）蕃衍の事實にくらい一部考古學者の無知を表はしたものであつて、まことに笑止千萬なことだ。われ〳〵からいへば越前・加賀・地方なればこそ銅鐸が出土したのである。又三河・遠江・地方についても同じことがいはれる。三河の渥美郡・渥美灣・は、やがて安曇郡であり、安曇灣である。渥美半島に近く豐橋（註の二）のあるのも決して偶然でない。著者を以ていはするならば三河・遠江・であればこそ銅鐸は出たのである。

又、銅鐸の面に鑄出されて居る文様の中、家屋の構造並にその屋根に、材木を組合せてしのび返しのやうなものを作つて居るところなども、雲南から金沙江を渡り、會理・寧遠・を經て、四川の成都に達する山間に見られる羅々の屋制にそつくりそのまゝだ。（本書第三二九ページ挿畫參照）

この若狭灣廻廊地帶から近江・越前・加賀・能登・と流れて居る大わだつみ族（安曇族）の間から、安倍比羅夫將軍の如き、坂上田村麿將軍の如き、偉丈夫の現はれて居ること、その相貌骨骼の羅羅族に似て堂々たるもののあつたことは、前にくはしく述べて置いたからこゝには省略する（本書第二一九―三三六ページ參照）

（註の一）若狭小濱町には後瀬山八幡宮の外に、宗像三女神を祀つた社もある。又後瀬山社務所では、比賣大神を宗像三女神（田心姫・湍津姫・市杵島姫）と決めて疑はず、それを社頭に掲示して居る。

（註の二）豐橋は近き世の改名で、吉田が元の名であるには相違ないが、豐は『大わだつみ族』『橋』は天の橋立の橋で半島の古語である。豐橋を渥美半島とすれば、その由來はむしろ吉田より古いわけだ。

第五章　おほやまづみ族

第一節　隼人族

おほやまづみ族の名稱について

前に幾度もおことはりして置いたやうに隼人族と熊襲族とをおほやまづみと稱へられた國津神の中に包括して取扱つてよいか、否かにつき、今この著者はひどく惑つて居る。初期の研究では隼人と熊襲とは同じ民種の異名だくらゐに考へて居た。段々研究して居る中に、熊襲は隼人よりも何ほどか文化の程度の高い民種であつたことが考へられるやうになつて來た。しかも最近の研究では、熊襲はおほやまづみ族の一派として取扱ふよりも、むしろおほわだつみ族の一派として取扱ふ方がよいのではないかといふ疑問に到達して居る。

先づおほやまづみ族の名稱について考へて見ることとしよう。

フイリツピン群島の沖合から、沖縄列島の東方洋上をまつしぐらに、九州の南端目ざして吹きつけて居る日本海流に乘つて、この國土に渡つて來た南方諸種族の舟は、現に沖縄や、臺灣や、フィリッピンや、マレイや、遠くはアフリカ大陸の諸蕃の間に用ひられて居る刳舟であつたと考へられる。この刳舟は多く南方の樟材等で作られたものに相違なく、日本では古くこれを天磐櫲樟舟と呼んで居た。この刳舟に乘つて茫々たる太平洋の波濤を征服したこととといひ、また氣流と海流との關係をよく知つて、島から島へ飛魚のやうに移り飛んで來たこととといひ、この大洋族に『おほやまづみ』といふ名前をつけたのは少し異樣に感ぜられるが、『隼人族』は海洋を征服して島から島へ移住して歩く點では非常に大膽敢爲であつたとはいへ、その據點は『おほわだつみ族』の如く必ず海岸に近い臺地を選ばず、もつと深入りして山嶽地帶に居を構へたらしく、そこに『おほやまづみ族』の名稱が起つたことと考へられる。この關係を現實に當嵌めて見ると、例へば今回の支那事變で日本軍が軍事的に占據した海南島の事情に見てもその通りである。海南島には支那人及びインド支那人の主要構成分子の一である苗族も居り、また『黎』と稱へる苗族よりも遙に獰猛精悍な種族も住んで居る。いづれも海洋に深い關係を持ち、波濤を枕にして刳舟の中に眠ること、母の胸に抱かれる如きものがあつたに違ひない。それにも拘らず苗族は海岸に近い臺

地を選び、黎族は中央の山嶽部を好むといつた習俗の相異があり、それが自然の分布を成して居る。總括して『おほわだつみ族』と呼ばれた倭族及び豐族は廣い意味でいふアジア大陸南種で、これはいづれも海岸に近い臺地をその據點としたのに、日向・大隅・薩摩・の一部に占據した『隼人族』は深く山嶽地帶に入つて居を占めるか、海岸から直に隆起して居る山嶽の中腹もしくは斷崖に居を占めるかした。そこに『おほやまづみ族』の名が起つたのではないかと思ふ。

海岸に廣い空地を殘し好んで山嶽地帶に住む
ニユウギニアの蠻民

海洋と深い關係のある民種で海岸に住みよい廣い空地があるにも拘らず、そこに住まうとはせず、わざ〳〵深く內地に入つて山嶽地帶に居を占める蠻族はこゝに例示した海南島の『黎』だの、臺灣の『客家』だのに限らない。蘭領インドネシアの中、土地が廣いのに人口が稀薄なので有名な、ニユウギニア（パプア）のカヤカヤ族・ボルネオのダヤツク族・の如きそれである。最近、愛國新聞社から出版された『蘭領印度叢書』の中に收められて居る元『爪哇日報』主筆・松原晩香氏の『蘭印土民の文化風俗』中に次の記述がある。

に出もとこるれらび用の牛次に作耕のるあで面畑が種伐の度三に年一はでメこの鬱蒸の（田水式焼畑）田畑やし焼されも根に殺りバ
・開次をれとはに蔵酒・でのもたしも麓を火工でれらせ側に勢の地土るす住居の中・が族民倉米は作耕田畑のこ・こたり通るあでス諸
のだ方〳〵巻を式人蔵酒にりまあ・とふやらか族民倉米れわれわ・がるあも者得る〳〵巻でら國に廻回と化変・石巨

地を選び、黎族は中央の山嶽部を好むといつた習俗の相異があり、それが自然の分布を成して居る。總括して『おほわだつみ族』と呼ばれた倭族及び豐族は廣い意味でいふアジア大陸南種で、これはいづれも海岸に近い臺地をその據點としたのに、日向・大隅・薩摩・の一部に古據した『隼人族』は深く山嶽地帶に入つて居を占めるか、海岸から直に隆起して居る山嶽の中腹もしくは斷崖に居を占めるかした。そこに『おほやまづみ族』の名が起つたのではないかと思ふ。

海岸に廣い空地を殘し好んで山嶽地帶に住む ニユウギニアの蠻民

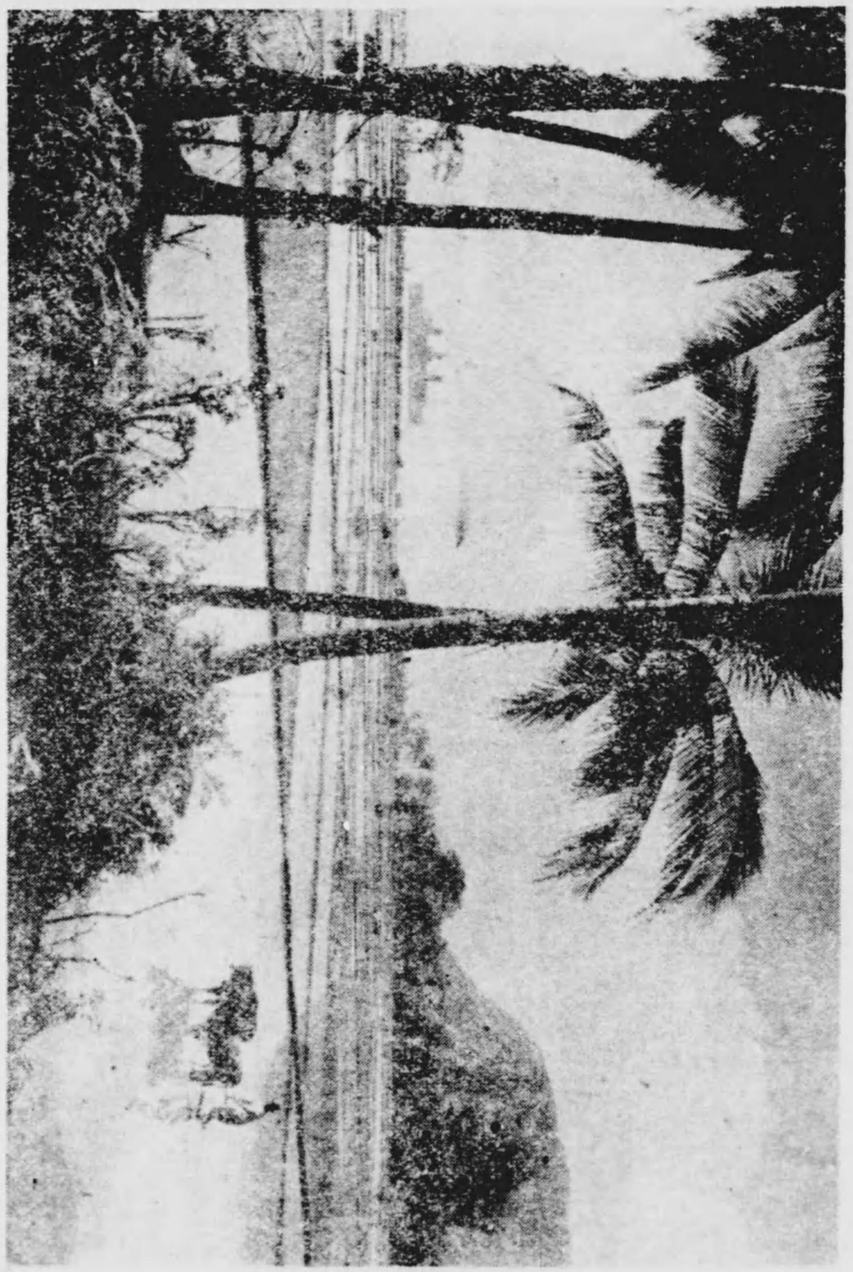
海洋と深い關係のある民種で海岸に住みよい廣い空地があるにも拘らず、そこに住きうとはせず、わざ〳〵深く內地に入つて山嶽地帶に居を占める蠻族はたゝに例示した海南島の『黎』だの、臺灣の『客家』だのに限らない。蘭領インドネシアの中、土地が廣いのに人口が稀薄なので有名な、ニユウギニア（パプア）のカヤカヤ族・ボルネオのダヤヅグ族・の如きそれである。最近、愛國新聞社から出版された『蘭領印度叢書』の中に收められて居る元『爪哇日報』主筆・松原晚香氏の『蘭印土民の文化風俗』中に次の記述がある。

[illegible]

（圖上）海南島の中央部に住む黎族の弓勢。徒立で恐ろしい強弓を持つ。婦人たちは黥面の風俗を保つ。（圖下）貴州省を重安附近の山間に住む黒弓勢は恐らくこの系統のものであらう。女の苗。（鳥居龍藏博士撮影）

田水ゐゑ見く高の樺でし越を林樹子樹
（圖一の作米るけ於に島リパ）

（上圖）海南島の中央部に住む黎族の弓勢。非常に恐るべしい強弓を持ち鐵を射ぬくと云ふ八たしと鐵持を弓勢は恐らくこの系統のものであらう。（下圖）貴州省を流れる清水河の山間に住む黎族の女。（鳥居龍藏博士撮影）



田水をさえ見へる間の伊豆の稲子島
（面一の作米をはけ米に取り入）

バリ島土人の舞踊

日本の歌舞伎（所作事）を思はせるバリ島少女の舞踊。優婉溫柔な肉線のうねり、銅鑼と太鼓の魅惑、隼人が俳優の伎を以て、永く仕へまつらうと誓つたのはすなはちこれであらう。

次に最も邊僻な位置にあるニユウギニアの方を見ると、殺伐な食人種が今尙ほ殘つて居る。一體ニユウギニアといふ島は、昔からパプアといつて居るが、人種はカヤカヤ族と呼ばれて居る。このカヤカヤ族の中でも、海洋地帶に居住するものは、近代的に順化るし、溫和になつて居るけれども、奥地に蟠居するものは今尙ほ蕃風から脫して居ない。例へば食物にしても、蜥蜴にしろ、犬にしろ、何でもたべるが只鰐だけは食べない。鰐を非常に恐れて居る。また人間の死する觀念は誰かに恨まれたか、或は誰かの呪ひがあつたか、祟りにより死に至らしめたるものだといふ風に考へて居る爲に、自分の親戚の中で誰かゞ死ぬと必ずその復讐をする。これがつまり性來鬪爭を好む習性がある爲に、いはゆる首狩といふ方法が盛に行はれるのである。現在では和蘭政府あたりが禁止して、あまりそれをさせないのであるが、蕃族間では鬪爭生活を一つの名譽とし、人間の頭を取つて來るといふことが自分の名譽心を滿たし、近隣のものに誇り得る行爲といふことになつて居り、さういふ氣持からそれが盛に行はれたのである。（中略）

ニユウギニア民族が、蘭領に於ける一番原始的な民族ではないかと思ふ。殆ど文化の餘慶をうけることなく、原始そのまゝの生活をして居り、次第に滅亡してゆく民族のやうに思はれ

パリ島土人の舞踊

日本の歌舞伎（所作事）を思はせるパリ島少女の舞踊。優婉温柔な肉線のうねり、銅鑼と太鼓の魅惑、隼人が俳優の伎を以て、永く仕へまつらうと誓つたのはすたはちこれであらう。

次に最も邊僻な位置にあるニユウギニアの方を見ると、殺伐な食人種が今尙ほ殘つて居る一體ニユウギニアといふ島は、昔からパプアといつて居るが、人種はカヤカヤ族と呼ばれて居る。このカヤカヤ族の中でも、海洋地帶に居住するのは、近代的に順化らし、溫和になつて居るけれども、奥地に蟠居するものは今尙ほ蕃風から脱して居ない。例へば食物にしても、蜥蜴にしろ、犬にしろ、何でもたべるが只鰐だけは食べない。鰐を非常に恐れて居る。また人間の死する觀念は誰かに恨まれたか、或は誰かの呪ひがあつたか、祟りにより死に至らしめたものだといふ風に考へて居る爲に、自分の親戚の中で誰かゞ死ぬと必ずその復讐をする。これがつまり性來鬪爭を好む習性がある爲に、いはゆる首狩といふ方法が盛に行はれるのである。現在では和蘭政府あたりが禁止して、あまりそれをさせないのであるが、蕃族間では鬪爭生活を一つの名譽とし、人間の頭を取つて來るといふことが自分の名譽心を滿たし、近隣のものに誇り得る行爲といふことになつて居り、さういふ氣持からそれが盛に行はれたのである。（中略）

ニユウギニア民族が、蘭領に於ける一番原始的な民族ではないかと思ふ。殆ど文化の餘慶をうけることなく、原始そのまゝの生活をして居り、次第に滅亡してゆく民族のやうに思はれ

る。

これと同様にダヤック族といふものが、ボルネオの中央一帶にかけて居住して居る。これも遊牧民族であるが、極く原始的な生活を營み、殆ど宗教觀念なく、迷信に生き、迷信に亡びゆく民族ではないかと思はれる。主に狩獵を以て生活するため、山の方面に發展して居る。海の方に發達した民族は一般的に非常に少いのである。海岸が相當に廣くありながら、どうして海に出なかつたといふと、つまり農産物が非常に豐富である爲に、一つは危險を冒してまでも海に出るといふことを嫌惡したのではないかと思はれる。

インドネシアといふ稱呼

今日われ〳〵が大東亞共榮圏と稱へる中には、アジアの南方大陸と、インドネシア及び太平洋諸島とがある。アジアの南方大陸といへば、インドも、ペルシアも、アラビアも、これを包括することもちろんであるが、今しばらくこの方面を措き、エウロッパ人のいはゆる後インド、すなはちマレイ・ビルマ・タイ・安南・トンキン・ラオス・カンボヂア・及び揚子江以南の支那大陸を指すものとする。

インドネシア諸島と呼ばれるのはこのアジア南方大陸の前面、太平洋上に横はる大・小・無數の群島に對する稱呼であつて、舊く、蘭領インドと呼ばれ、またマレイ諸島と呼ばれたこともあつた。マレイといへば、今日では英領海峽植民地を含むビルマとの國境クラ地峽以南の半島を指すことになつて居るが、もとはフイリツピン・ボルネオ・セレベス・等今のいはゆるインドネシア諸島を總稱してマレイ諸島と呼ばれたものだ。その後、英・佛・米・獨・等エウロッパの北方諸民族が、一齊にこの地方に進出し來るに及び、蘭領東インド、もしくはマレイ諸島の名稱が漸く消え去つて、インドネシアの名がこれに代るに至つた。しかるインドネシアの稱呼の行はれるやうになつたのは極めて最近のことであつて、凡そ半世紀以來のこととされて居る。それにはこの半世紀以來、インドネシア諸島における原住諸民族の間に、著しく民族自主運動の昂揚して來たことの與かるところも多い。著者は、今から十數年以前にその初版を世に送つた『民族日本歴史』に於いて、すでに蘭領東インド諸島の名稱に代ふるに、インドネシアの名稱を以てして居る。

インドネシア人を大別してマレイ・ポリネシア及びネグリイトとする。マレイポリネシアとネグリイトとは、インドネシア方面から、日本海流(黑潮本流)に乘つてこの國に渡來した日本民族の一構成分子といふ點で一致して居るだけで、その血統的にも、文化的にも根本的の相違がある。

だからネグリイトのことは、別に章を設けて論ずるのが適當だ。

日本に於けるマレイ-ポリネシアの蕃衍

マレイ-ポリネシア、すなはち隼人である。熊襲の名で呼ばれた襲人の民種的系統及びその日本に渡來した徑路のまだ研究中に屬することは前に繰返しおことはりして置いた通りであるが、隼人はマレイポリネシアに違ひない。さうしてその日本に渡來した徑路は、フィリッピンの沖合から、北赤道海流に乘つて、まつしぐらに九州の南端に漂着し、その一派は豐後水道を經て瀨戸內海に出で、そこに布置せられて居る大小無數の島嶼の上に『筑紫の海北』から進入して來たおほわだつみ族と頗る複雜な勢力圏を劃定し、更にその中の一派が、今の岡山・廣島・の海岸から上陸して、吉井川・旭川・河邊川・蘆田川・沼田川・太田川・の線に沿つて船通山のある雲・伯・日高見に進入し、そこで日本海方面から江ノ川・神戸川・斐伊川・日野川・に沿つて南進し、夙に雲・伯・日高見に住んで居たシベリア-ツングウスの一派、オロチ族・オロチョン族・等と境を接し、激しい存立競爭を演ずるに至つたものに相違あるまい。八岐(やまた)の大蛇(おろち)は、ソ・滿・國境から押寄て來たオロチ族であつて、これは雲・伯・日高見の諸河川に淘汰されて居る砂鐵を採取して、利劍を鍛造する術を心得て居た。岡山・廣島・方面から、同じ日高見に進入したおほやまづみ族は、『奇稻田姫』の名に具現されるインドネシア流の米作法に於いて、オロチ族・オロチョン族・などの北種の到底企て及ばぬ農業文化を持つて居た。

さうしてこのシベリア-ツングウス系の一派と、インドネシア系の一派とが境を接し、鎬を削つて爭つて居るところへ、割込んで來られたのが、高天原系統の素盞嗚尊であつた。

かくして瀨戸內海に複雜な勢力圏を劃して居たおほやまづみ族とおほわだつみ族とは、並押しに進んで紀・淡・海峽を出で、紀伊國潮ノ岬から太平洋の沿岸を傳つて飛々にそれ〴〵の勢力圏を劃して行くのであつた。例へば伊勢灣の東部水域には大わだつみ族（安曇族）が占據して後世に渥美半島・渥美灣・の地名をのこし、伊豆の南端には大やまづみ族が蕃衍して、木花咲耶姫と磐長姫との神話に著しい『妻浦(めら)』の地名をとゞめ、富士山の秀麗に因む幾多の傳統をのこして居る。

暖・熱・帶植物と常世民種との分布

上來述べて來た日本海流と對馬海流とがこの國土をめぐつて、その海岸地帶に種付(うゑ)けて居るものは、人間の血統ばかりではない。天然物、殊に植物の分布が何よりも正直にそれを裏書して居

る。今日本の植物が海流につれて分布されてゐるあとを見ると、それはやがてそのまゝ人間の分布されたあとを示唆するものだ。日本は九州・四國・中國・地方と、東北地方とで、氣候に著しい差違はあるが、これを總じて溫帶といふことが出來るだらう。しかし、北赤道海流が、日本海流となつて直接吹きつけて居る九州・四國・山陽・東海・の沿岸には氣候帶の如何に拘らず、主として熱帶植物、もしくは亞熱帶植物が分布されて居る。九州・四國・山陽・南海・東海・には櫧と椎とが著しく多く、海岸には見事な黑松が白砂と相反映して美しい風致をなして居る。

又、山地や神社の境內には樟の老木が頗る多く、柏槇がそれに交つて居る。これらは亞熱帶樹として最も著しいものであるが、肉桂・もつこく・とべらもつこく・やまもゝ・姥目櫧・天台烏藥・檍・もちのき・などはすべて亞熱帶樹で、銚子港と敦賀港との間に一線を引いて本州を斜に中斷し、それから以北には殆ど見られぬ樹木である。

又、この地方の海岸には、ところ〴〵に純然たる熱帶植物が繁茂して居る。日向の靑島・紀伊の田邊灣に點在する神島・畠島・などは全島悉く熱帶植物で蔽はれて居るので有名だ。どういふわけで或る島にだけ熱帶植物が繁茂して居るかといふと、著者はその理由をかやうに考へて居る。それは初め、遠い南洋の方から押して來る海流に乘つて、幾種もの熱帶植物の種子が、日本の南の離れ小島に流れよつた。それ等熱帶植物の種子は、南洋で、例へば珊瑚礁のやうな、殆ど土のない岩礁の割目に根をおろして、そこに適應して來たものであつた。それが日本に流れて來て日夕怒濤に洗はれてゐる、少しも土のない岩礁の割目に這入つて芽生え、追々に蕃殖して島全體にひろがつていつた。もちろんその種子は島ばかりでなく、土の十分にある近くの海岸にも漂着したものに相違あるまい。

しかしそれ等の種子は土の十分にあるところには蕃殖しなかつた。何故かといへば、さういふところにはその國の氣候・風土・に適した植物が繁茂し、その勢力に押されて、いつのまにか滅ぼされてしまふからであつた。

イギリスのアイルランドには、アラン島といつて土のない離れ小島がある。この島には殆ど草木と名のつくものはない。しかし、そこにも人間は生活して居る。アラン島を洗ふ山のやうな怒濤は、先刻お話をして置いたメキシコ灣海流が、大西洋を斜めにきつてまともに吹きつけて居るのだ。日本にも九州・四國・紀州・などの絕端には、太古、このアラン島に似た土のない島が幾つもあつたに相違ない。それは海流の强さから推してみても十分に考へられることだ。そして、或る島にだけは熱帶植物が蕃殖する。さうして長い間にはそれが腐る。或は根がはびこつて段々に岩

礁を腐蝕させてゆく。もちろん、さうした熱帶植物の叢は、離れ小島に限らず陸地の方にもあつたものであらう。けれども、それは野火とか人間の濫伐とかいふことで、一旦滅ぼされたり夷げられたりしてしまふと、その跡には待つてゐましたと許り、日本の氣候・風土・に適した植物が繁茂するのだ。これを淘汰といふ。植物の淘汰の上で、野火ほど恐しいものはないとされて居る。

日本で氣候帶本然の植物は、前に述べて置いた通り銚子港と敦賀港との間に劃される斜線から、北の部分に多くみられる。九州・四國・山陽・南海・東海・を、植物分布學上『楠・樟・帶』と呼ぶのに對し、それから北の方を『ぶな帶』といふ。

前掲斜線以北の主要植物はぶなを主として、おほなら・みずなら・とち・さはら・びは・杉・等、その種類が極めて多く、概して朝鮮・滿洲・の林相とよく似て居る。それから北海道に渡ると、その北東部から樺太・千島・の方にかけて、もう、ぶなや、ならや、とちの森林は見られない。そこは白檜・椴松・蝦夷松・等の針葉樹一色で塗りつぶされてゐる。尤も、或る部分には溫帶林、すなはち、ぶな帶に屬する白樺・たけかば・みやま榛・山榛・いたやかへで・なゝかまど・深山櫻・等も見られるが、それはちやうど日向の靑島や紀伊の神島に熱帶植物が繁茂してゐるのと同じ道理であつて、ひとたび山火事にあふとか、伐採されるとかすると、もう、繁殖力は失はれてしまふ。さうしてその跡には寒帶本然の白檜とか、椴松とか、蝦夷松とかいふものがはびこつて行くのだ。

かの寒帶林、すなはち『白檜・椴松・帶』と對照的な熱帶樹林は、沖繩列島の中部以南から臺灣にかけて見られるのであるが、日本の國土の特色はその本來が溫帶であり、溫帶樹林であつてしかるべきところに、熱帶・亞熱帶・の植物が繁茂して居ることにある。すなはち、九州・四國・山陽・南海・東海・にかけてみられる熱帶もしくは亞熱帶植物は、確かにこの國土の特色である。他はあるべきところにあるべきものがあるといふだけのことである。たゞ、あるべからざるところに、あるべからざるもののあるのは、全く赤道直下から來る暖かい海流のお蔭だ。

太平洋沿岸地帶に於ける樟の老木

これらの暖・熱・帶植物の中で、おほやまづみ系國津神のみやしろと、最も深い關係があるらしく考へられるものに樟の老木がある。おほやまづみ系國津神が、インドネシア方面から日本海流（黑潮本流）に乘つて、この國土に漂着した時に乘つて來たのは、必ず樟の大木を刳りぬいて造つた獨木舟であつたに相違ない。

瀨戸內海・九十九洋・はもちろん、紀州潮ノ岬から東へ、太平洋の沿岸地帶を飛々に、仙臺附近

まで布置されて居る。大やまづみ系國津神達のみやしろには、必ず神木として、樟・柏・槇・槙・等の老大木が鬱蒼として天空を摩して居る。これら亞熱帶樹の材幹・樹皮・もしくは樹脂等はすべてインドネシア方面から渡來したおほやまづみ系國津神が船材として用ひたものに相違ない。

太平洋の沿岸地帶に樟の老木の分布されて居る有様は、ちやうど、大山祇神と素盞嗚尊との間に横はる或る深い關係を物語るものもあるかのやうに打見られる。すでに述べたやうに、素盞嗚尊のやしろが大山祇神及び木花咲耶姫のやしろを追つかけて、その間に割込んで居るとすれば、樟の老木も、素盞嗚尊の跡を慕つて、熊野の本宮を起點に、東海道の沿岸、殊に駿河灣をめぐる駿・遠・豆・の三州に多く分布されて居る。これはなぜであらうか。たゞ紀州なり、駿・遠・豆・三州なりが、亞熱帶的に溫暖で、樟の成長に適する爲だけであらうか。

幕末、土佐藩では、後藤象二郎がいはゆるお手先商法なるものを始め、半紙・材木・樟腦・鯨・鰹節・等、土佐の主要な物産を擧げて藩廳の管理に移し、それを大阪と長崎とで一手に賣捌いて眉に火のつくやうな藩の財政を燮理しようとかゝつた。就中、樟腦は外國人がよろこんでこれを買つたので、樟を禁木として一切の民有を停止し、片端から伐採して、これを樟腦に製造した。人も知る如く、土佐は暖國で、有名な樟材の産地であつたが、その爲に見る〳〵伐りつくされてしまつて、終には根株まで掘返して樟腦の原料にしなければならなくなつた。

そんな次第で明治の初めまでには、さしも土佐藩の名物であつた樟の老木も全く伐りつくされてしまつて、他國にまでも手を伸さなければならなくなつて居た。土佐藩の士で、後に三菱會社の幹部となつて働いた吉永亮吉などいふものが紀州に出張して、さかんに那智・熊野・あたりの老木を伐倒した。この資本主義の魔手は、當然、直接若しくは間接に、多分靜岡縣三州にも及んだ。

著者は遠州濱名湖の北岸で、氣賀町と呼ばれる脇街道のさゝやかな町で生れたものであるが、こゝの鄕社は細江神社といひ、境内には今でもすばらしい樟の老木が、幾株か鬱蒼として茂つて居る。境内には別にこれといつて見るほどのものはないが、この數多い樟の老木だけは見て置いてよい。なぜかといへば、この種の樟の老木が、明治の初めまでは、遠州を始めとして、駿州にも豆州にも頗る多かつたことが、想像されるからだ。惜しいことはこれらの老木が、明治の初め殆ど盡くといつてよいほど樟腦の材として伐倒されてしまつた。

この樟の老木はその樹齡からいつても、生えて居る場所からいつても、たしかに南方民種の分布と關係がある。渥美灣の安曇族が湖畔を慕ひ、本坂峠を踰えて引佐細江のほとりまで衍びて居たとも考へられる。氣賀町の近傍からは銅鐸も出土する。現に氣賀町にある樟の老木は、素盞嗚

尊を祀つた細江神社の境内に植ゑられたものだ。口碑によると、このやしろの神體は、いつのことか知らぬが、細江湖の岸に流れついたみてくらであつたとのことである。

しかもその樟の大木はその大山祇神によつて代表された隼人すなはちマレイ・ポリネシアが最も多く刳船の材として用ひたものだ。

文獻歷史に現はれて居る樟船建造の事實

仲哀天皇が、皇后・息長足姫と筍飯の行宮におはして熊襲謀叛の報に接し、いよ〳〵三韓征伐の御決心を固めさせた時、皇后を筍飯の行宮に止め、親ら輕裝して二・三・の卿大夫と、數百の供奉とを從へ、紀之川の河口なる德勒津宮に急行あらせて、こゝに軍議を凝らされた。軍議といつてもこれは戰艦の艤裝に關係があつたものに相違なく、その主材は紀州の名木・樟を以てされたことが容易に想像される。

なほこの樟は降つて豐太閤の朝鮮征伐にも非常に關係が深かつたやうに考へられる。それは近頃山內家から出た文書で、朝鮮征伐の時、山內家が命をうけ、大井川の河口で軍艦を建造した事實がはつきりとして來た。人も知る如く、山內家はもと遠州掛川の城主であつたものを、關ヶ原の戰役後、封を土佐に移されたもので、大井川の右岸、榛原・小笠・の地はすべて山內家の領分であつた。豐太閤が山內一豐を掛川に置いたのは、大井川が海道筋で、箱根・新居・にもまさる要害の地であることを見ぬき、萬一の場合は、掛川と高天神とで關東の德川勢を喰止めようとしたのだ。ところがこの山內氏の領內には、前にも氣賀町のことを一例としていつて置いたやうに、樟の老木が非常に多かつたものと見える。今、著者は證據なしにこれをいふのではない。『日本書紀』仁德天皇六十二年のくだりに次の記述がある。

夏五月、遠江國司表を上つて言ふ。大樹あり、大井河より流れて河曲に停まる。其大さ十圍、本一にして末兩つなり。時に倭直吾子を遣はして船を造らしむ。而して南海より運びて難波津に將き來る。以て御船に充つ。（今樣譯文）

尙ほ榛原郡に『船木』と呼ぶ地名のあつたことが『和名抄』に見え、『神名式』には同郡の大楠神社を擧げて居る。ところが、この船木といふ地名も、大楠神社といふやしろもともに、現に榛原郡初倉村に殘つて居るから、千年ぐらゐの歷史は短いものだ。

この種の樟のほろぼされてしまつたのは、つひ明治初年のことだ。古老にきけばその頃の樟腦熱がどんなものであつたか、まだよく記憶に殘つて居ることだらう。誰にもあれ、遠州氣賀町の

細江神社に行つて、境内にある幾株かの見事な樟の老木を見れば、太閤が何故に山内一豐に命じて大井川の河口に近いところで、征韓の軍船を建造させたかゞ分る。

發掘された天磐櫟樟船

マレイ・ポリネシア（隼人）が、インドネシア方面から、樟の刳船に乘つてこの聯島に徙遷して來たことは、世の進むにつれて、インドネシアの漂着したと思はれる、常世の波のしき波寄する太平洋沿岸の國々から、續々記・紀・にいはゆる『天磐櫟樟船』の發掘されて居ることによつて確められて居る。『天磐櫟樟船』は德川時代の末期に尾張國諸桑村から發掘されたのを始めとして、明治十七・八・年頃には難波の馳川から、更に大正の初め頃には同じく大阪の今福から發掘せられて居る。

ところが昭和七年七月五日には、その第四のものとして、これまでに發掘されて居る天磐櫟樟船の中では最も大型に屬するものが發見された。ところは大阪市西淀川區大仁本町一丁目なる鷺洲第二小學校の敷地で、同校舍の改修工事中發見されたものだ。當時は工事の關係上、全部を發掘することが出來ず、わづかにその一部分（七尺五寸）を切斷して大阪城公園に保管されて居た。

しかるに、たま〳〵前記小學校が、昭和九年九月の大暴風雨で大破損を來した爲に、再度の改修工事が施されることとなり、前に發掘された刳船の殘部が完全に發掘されて、その全貌を現はしたのは、著者が『民族日本歷史—建國編』執筆中の昭和十年四月四日のことであつた。

高天原系統の神々の中で、素盞嗚尊御一人が、大わだつみ系國津神達からも、大やまづみ系國津神達からも、とりわけ敬ひ懷しまれておはしたことは、天孫御降臨までの神話の節々ではつきりと讀まれる。

先づ素盞嗚尊の御身に具させたもの、又は携へて高天原に昇らせたものは、すべて大わだつみ系國津神もしくは大やまづみ系國津神から授けられたものであつて、高天原傳來のものではなかつた。素盞嗚尊が引具して昇天遊ばされたと解せられる小馬すなはちポニイは、記・紀・の記述から推し考へて、インドネシアの原產であつたに相違なく、當時の高天原民種はまだ馬匹を使用することを知つて居なかつた。

素盞嗚尊と南方の資源

ウラル・アルタイ系五族の中、馬匹の使用を知つて居たるものは、蒙古族とトルコ族とであつた、

他の三種族の中、ツングウス族とサモエード族とは、全く馬匹の飼養及びその利用に關して知るところがなかつた。第四間氷河時代、アジア大陸とアメリカ大陸とは、アリユウシヤン列島のところで陸續きであつたが、この地峽を傳つてアジア大陸から、アメリカ大陸に徙遷した古代アジア族、すなはち現在のアメリカ・インデアンも馬を見たことのなかつたこと、クワツケンボスの米國史で普く人の知るところだ。尊が大やまづみ系國津神から授けられたと考へられる若干の馬匹を引具して昇天したことは、いたく高天原の神々を驚かし奉り、その爲に折角成立した和平もあたら決裂を見るに至つた。

天安河原なる眞名井のほとりで、素盞嗚尊と御姉君・天照大御神との間に、和平條約の成立を見るくだりで、命の佩びさせた御劍から田心姫・湍津姫・市杵島姫・三柱の女神があれましたといふのも、尊がこの時すでに豐之國宗像なる三女神をその勢力圏の中に收めて居られたことを意味するもので、御姉神の支配下にあつた五柱の男神との交換によつて、和平の基礎である太平洋沿岸地帶と、日本海沿岸地帶との交換條約が成立したものと見るべきではないか。

天照大御神をめぐる八百萬の神達の合議で、千座置戸の刑を課せられた上、手足の爪・頭髮・鬚・髯・を拔き、高天原を追はれた素盞嗚尊は、御子・五十猛神とともに新羅國に天降らせ、その地の豪族・曾尸茂梨を賴んで、直に國造りに著手遊ばされた。その經營のさまを紀の一書は次の如く記して居る。

素盞嗚尊ののたまはく、韓國の島はこれ、金・銀・あり。さはいへ吾兒のしらする國に浮寶（船舶）あらずばよろしからじとのたまひ、すなはち鬚髯を拔きてこれを散ち給へば、すなはち杉となる。又、胸毛を拔きて散ち給へば檜となる。尻毛はこれ披となり、眉の毛はこれ櫲樟となる。已にしてその用ふべきを定む。すなはちことあげしてのたまはく、杉及び櫲樟、この兩樹は以て浮寶とすべし。檜は以て瑞宮を造る時の材とすべし。披は以てうつしき蒼生の奥津棄戸に將ち臥さん具へとなすべし。（今樣飜文）

これで本來高天原系統のあらたかなる神におはした素盞嗚尊の御身に具されたもの、もしくは携帶遊ばされたものが、すべて南方系統のものであつたことがよく分る。以て尊と大わだつみ系國津神・大やまづみ系國津神との間に、如何に親密な關係があつたかを推すべきである。

海幸・山幸・の爭議及びその意義

天孫・瓊々杵尊が日向國高千穗宮（西臼杵郡高千穗）にあもりまして、その高天原時代から鴻

圖翼賛者である兩豐の大わだつみ族を外廓に、著々經略を南方に向つて進め、日向・大隅・の境から、薩摩國の極南界なる吾田（阿多）の長屋の笠狭の碕にまでも到りまして、大やまづみ族と婚を通じ、隼人を招撫遊ばされてからは、九州の情勢が全く一變し、兩豐の大わだつみ族と、日向・大隅・薩摩・の大やまづみ族とが、天孫を中心にはげしくその寵を爭ふことが必至の勢となつて來た。これを天孫民種の立場に立つていへば、舊の如く兩豐の大わだつみ族を主要勢力と頼んで葦原中國統一の目的を達成すべきか、それとも新附の大やまづみ族を主要勢力と頼んで天業を完遂すべきかが、國策上の大問題となつて來た。天孫の納れました木花咲耶姫の御胎からあれました御兄の皇子・火闌降命と、御弟の皇子・火遠理命との爭議がそれである。

火闌降命と火遠理命との爭議は、これまで一般にこの御兄弟が、文字通り、山海の利を爭はれたことから起つたものとのみ解せられ、しかも事の起りは兄の命の專横がもとであつたとして、專ら童話的に取扱はれて來て居るが、著者は前來述べて來た學問的討究の結果、この事件が天孫民種を巡る大わだつみ族と大やまづみ族との三角爭議であつたことを強く主張したいのだ。

御兄弟の爭議に於ける『山幸』は、すなはち大やまづみの神と提携してこの國土を開發して行かうとする一つの主要な政策であつた。それに對して、『海幸』はいふまでもなく、大わだつみの神と聯盟してこの國土を開發してゆかうとする他の一つの重要な政策であつたのだ。

兄の命が最後にその弟の命に對し、その領する山の利と、海の利とを取かへようと提言された時、弟の命に同情してこれを無目勝間小船に乘せ、海神國に送り屆けた鹽椎神はいふまでもなく大わだつみ族に屬する一長老であつた。この時から海神國すなはち常世族は全力をあげて弟の命を支援することゝなり、その結果、兄が敗れて、弟の命が天津日嗣をつがせることゝなつた。この御兄弟の大詰の戰爭は、明かに隼人と豐族とのいはゆる天下分目の大戰爭であつたと見てよい。

隼人族の降伏と武士階級の起源

當時南方の熊襲族が全力を擧げて火闌降命を支援したことは、その降伏のくだりに次の記述があるので殆ど疑を容れるの餘地がない。

こゝに兄の命、弟の命に奇しき御徳の具りますことを知りて、遂にその弟の命に從ひまつりき。こゝを以て火闌降命の苗裔、諸々の隼人等、今に至るまで天皇の宮墻の傍を離れず、吠狗に代りて事へまつるなり。世の人、失ひたる針を償らざるは、その緣なり。（紀の一書）

これを要するに隼人族、すなはち熊襲が完全に王威に服したのはこの時で、朝廷が俄にその兵

威を加へたのは、まさしくこの事あつての後である。隼人族の勇猛精悍と、その直情徑行とは、實にわが武士道の根元であるといつてよい。

隼人は元來吠狗に代つて　天皇の宮墻を守護し奉つたものだ。この武士の血統的階級制度は王朝の末頃まで儼然として存在し、苟もこれを紊るを許されなかつた。それは王朝時代を通じて、殿上人と地下人との身分が絶對のものであり、地下人は如何なる場合にも昇殿を許されなかつたことによつても知られる。なほその頃、禁衛の主力をなしたものが、この隼人族であつたことは、『隼人司式』に、

凡そ元日、即位、及び蕃客入朝等の儀に官人三人、史生二人、大衣二人、番上の隼人二十人、今來の隼人二十人、白丁の隼人一百三十二人を率ゐ、應天門外の左右に分陣す。

とあるのでよく分る。又前掲紀の一書に、『吠狗に代りて』云々とあるところから、後にそれが一種の儀式化したことは、次の規定によつて知られる。

一　踐祚の日、大嘗の日、應天門內の左右に分陣す。其群官初めて入る時吠を發す。云々。凡そ駕に從つて行くには、官人二人、史生二人が、大衣一人、番上の隼人四人及び今來の隼人十人を率ゐて供奉す。その駕、國の界及び山川道路の曲を經れば吠を爲す。云々。

凡そ今來の隼人には、大衣をして吠を習はしむ。左、本聲を發し、右、末聲を發す。總て大聲十遍、小聲一遍、訖りて一人更に細聲を發すること二遍。云々。

公卿階級の猿樂、武士階級の田樂

尙ほこの際、降伏の條件として隼人が火遠理命の御前に誓ひ奉つたことばの中に永らく俳優（わざをぎ）となりて仕へまつらうといふ一條がある。隼人の勇猛精悍な性（さが）からいふと、吠犬となつて永く御墻を守り奉るといふことは、有り得べきことであるが、それと俳優となつて仕へまつるといふことは、如何にも兩立せぬことのやうに一應は考へられる。

ところが、隼人の故郷と推定されるインドネシア諸島に於ける蕃族の間に、後世わが國に發達した歌舞伎の所作事にも似た一種の優婉嫋美な舞踊のあることは、大東亞戰爭の進局につれて近頃漸く明かになつて來た。

近東諸國、すなはち今のチエコ-スラヴアキア・フンガリア・ルウマニア・あたりから、中央アジアを經、沙漠を越えて東方に傳來したジプシイの演伎は大體これを三部に分つことが出來るやうだ。その第一が輕業、第二が手品、第三が人形芝居である。支那で『散樂』と呼ばれ、わが國に

『猿樂』として傳はつたのは恐らくこのジプシイの演伎であらう。『猿樂の能』といはれ、後にこれから歌舞伎の發達して居るのは、猿樂に幾つもの部曲のあつたことを物語るものでないか。

それはいづれにしても、ジプシイの人形芝居（もしくは人形角力）は奈良朝の頃『傀儡子』としてすでに行はれ、宇佐八幡の放生會などで、隼人の俘虜に見物させて非常に喜ばれた。平安朝に入ると俄に盛大となり、攝津國西宮あたりに聚落して居たものが、最も豪勢であつたことは、普く人の知るところである。

隼人に傀儡子のひどく喜ばれたのは、ジプシイの足跡が初めインドネシア方面にまで行渡つて居なかつたからであらう。そこで隼人本來の藝能は、『田樂』であり、公卿階級（天孫民種）が『猿樂』を喜んだのと對照して頗る意味が深い。これを要するに『猿樂』は北方から來た公卿階級のものであり、『田樂』は南方から來た隼人のものであるらしい。

歴史以後に於けるインドネシア人の漂着

歴史の始まる以前、この聯島に漂着した南方民種を、黒潮本流によるものと、黒潮支流によつたものと二種に分つこの著者の見解に、大きい誤謬がないとするならば、その事實は當然、歴史以後にも引續き起つて居なければならぬ筈だ。

ところが、事實はむしろ穿ち過ぎるほど正確に、裏日本と表日本との兩面に起つて居る。すなはち表日本に起つたのが、吐火羅人、舍衛人及び覩貨羅人の漂着であり、裏日本に起つたのが、渤海人、刀夷人の漂着若しくは入寇である。

『日本書紀』孝德天皇、白雉三年のくだりに次の記述がある。

秋七月丁亥朔己丑、覩貨羅國男二人、女四人、筑紫に漂泊して言す。臣等初め海見島に漂泊すと。乃ち驛を以て召さる。

又、同五年のくだりに、次の記述がある。

春正月己卯朔丁亥、吐火羅人、妻舍衛の婦人とともに來る。

越えて四月にも吐火羅國の男女四人、舍衛の女一人が漂著して居る。

夏四月、吐火羅國の男二人、女二人、舍衛の女一人、風を被り、流れて日向に來る。

この吐火羅人・覩貨羅人・及び舍衛人とあるのが、何種族であつたかについては、古來種々の說があつて一定しなかつた。『唐書』の西域傳を根據として吐火羅を今のトルキスタンとするものがあり、『扶南傳』により、舍衛を天竺の一國とするものがあり、或る時代まではそれが定說となつ

て來た。

しかるに近年に至り、太平洋渡來の諸民種に關する研究が勃然として興つてからは、もうさういふ說を信ずるものは殆どなくなつてしまつた。吐火羅・覩貨羅・舍衞・とるにこれをフィリッピンから渡來したマレイ人の一種であるとしたのは、三宅米吉氏あたりがその元祖であらう。次に三宅米吉氏の說を紹介する。

此の吐火羅、又、覩貨羅、及び、舍衞の男女は、フィリッピン島人なるべし。昔より往々此の吐火羅を、トラと讀みて、トラ島となしゝは、『書紀』の註に或本云墮羅人とあるにより、又、トカラと云ふ國の近きに無きが故ならん。而るに、又、外務省編纂『外交志稿』には『日本書紀通證』等を因襲し、『唐書』西域傳に據りて、吐火羅を今の土耳其斯坦の內なりし一國とし、『扶南傳』により、舍衞を天竺の一國とせり。西域に吐火羅國あり、天竺に舍衞國ありしは、西域傳及び佛書によりて明かなれども、書紀になる吐火羅・舍衞・はこれらの遠國にはあらざるべし。蓋『書紀』の編者が、これら國名を藉り、又は、それと推量して附會したるものならん。

抑々、中央亞細亞なる土耳其斯坦あたりの人、殊に女子が、如何にして海に漂流することあらん。縱令之ありとするも、こは麻剌加以西のことなるべければ、遠く我が國に來ることの爭であるべき、それだに、いと疑はしきに、まして、其の土耳其斯坦人が、いつも天竺の女との同船にて來ることのあるべきや、さて思ふに吐火羅、又、覩貨羅はタガロにて舍衞はビサヤのサヤなるべし。されば、吐火羅は今のタガラ人の先祖たりしタガロ人にて、南部のビサヤ人と伴ひて海に漂ひたるなるべし。實にヒリッピン島は、海國なり、而して其の近海より我が國へは、颶風潮流の助けありて漂流し來ること、甚容易なり。是を以つて、余輩は孝德紀の吐火羅、舍衞は、ヒリッピン島人なることを信ず。

なほ『日本書紀』の記述でわれ〳〵の注意して置くべきことは、吐火羅人・覩貨羅人・舍衞人・の漂著した地點である。

前に擧示した如く、白雉三年の秋九月には一旦海見島に漂著したものが、轉じて筑紫に來たと明記されて居る。越えて白雉五年の夏四月に來たものも難風に吹流されて、日向國に漂著したと明記されて居る。これで見ても、フィリッピンから黑潮の本流に乘出したものは、特別の事情のない限り、判で押したやうに、薩摩・大隅・日向・若しくは土佐の一部分に漂著したものだ。

タガラ・ビサヤ・兩族の民種性並に衣・食・住

フィリッピンは、わが臺灣の紅頭嶼とパアシイ海峽を距てゝ相對峙するインドネシア極北の群島で、ルソンを最大とし、ミンダナオ・ミンドロ・カラマン・パラガ・サマル・パイネーレート・セブ・ネグロス・ボホル・等の諸島から成り、その原住人はマレイ人とネグリイト人との二種に大別せられる。

孝德天皇の時に日本に漂著したタガラ族も、ビサヤ族も、共にマレイ人で、ネグリイト人ではない。

タガラ族はフィリッピン群島の中、ルソンとミンドロとを原住地として來たマレイ人の一種で、身長は通常、膚は赤黑く、毛髮は漆黑で硬直、顏は短く、額は狹い。顏は圓い方で、鬚髯なく、眼はあんず狀で、瞳は黑い。顴骨が高く秀で、鼻の一般に低いところ、唇の厚いところなど日本人の中の或る型に頗るよく似てゐる。

タガラ族も今日では全く他の種族と混血して、純粹の型を見出すことは、困難なくらゐであるが、その民族性は概して聰明な方で、模倣性に富み、勇猛精悍、著しく好戰的である。

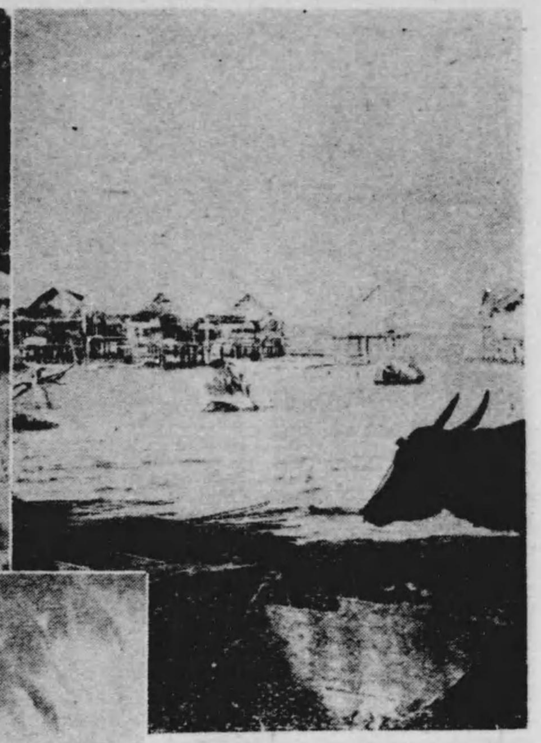
タガラ族の家屋は、耐震、耐風及び防濕の三つの目的を兼ね、中央に親柱を掘立て、地から四・五・尺の高さに床を張る。床には竹を用ひ、壁は板・竹・又は椰子の葉でつくる。屋根も多く椰子の葉で葺く。

富める者の家居には、壁板に彩色の裝飾畫を施したものもある。豪家は三・四・室以上から成り、陋屋はわづかに一室を存するのみである。家の周圍には必ず竹垣を結び、垣の中にはは多少の菜園あるを普通とする。

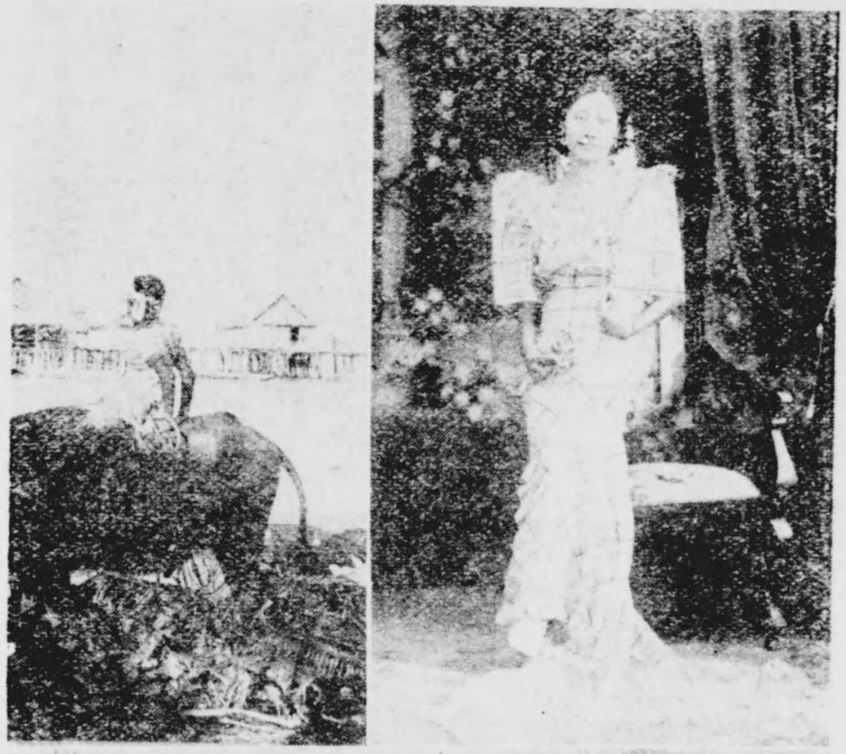
男子の衣服は裳と上衣とから成る。熱帶人としては頗る體裁のとゝのつたものだ。裳は日本の股引のやうなもので、帶でこれを腰にまとひ、その上にシャツのやうな上衣を著ける。上衣は胸部を寬げ、裾は膝の二寸ばかり下まで垂れる。

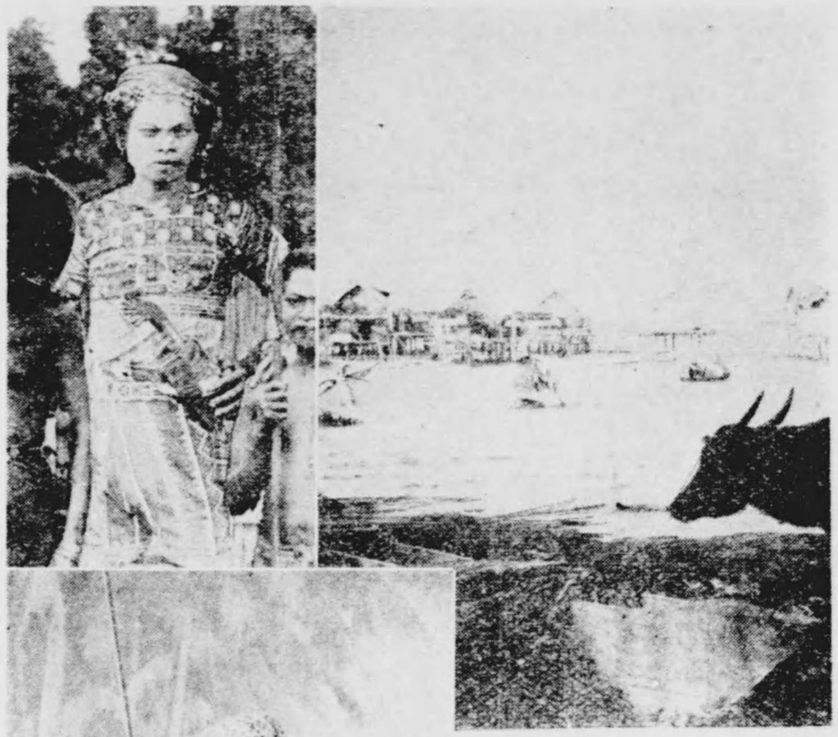
頭には竹若しくは籐で作つたエウロッパ風の帽子、若しくは日本の陣笠樣のものを戴く。雨天には藁でこしらへた簑があり、特殊の笠もある。髮は短く斬り、後部を半圓形に剃る。上流には結髮する風もある。一般に一尺ばかりの短劍を佩びて外出する。

女子の服裝は幾分優美である。上には薄い綿布の筒袖を著し、腰から下にはサヤと呼ぶ色染めの綿布をまきつける。富家の子女には首にハンカチーフを纏ふものがある。又縫箔を施した小さ

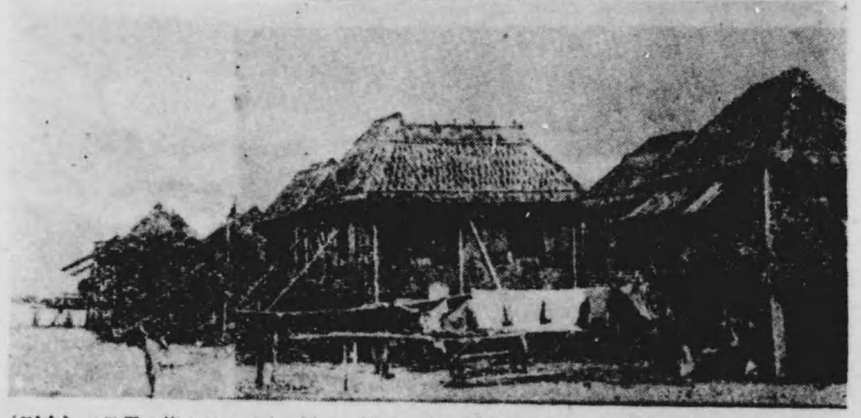


（右上）盛裝したビサヤ族の美人。（右下）ルソン島の山間に棲むネグリイトーイゴロット族の男子。（左上）ミンダナオの裔人中、良々優等を以て稱せられるバゴボ族の女子。（左下）隼人（日本武士）の武藝を思はせるバゴボ族の男子。（中央）騎牛のモロ族及びその水上家屋。

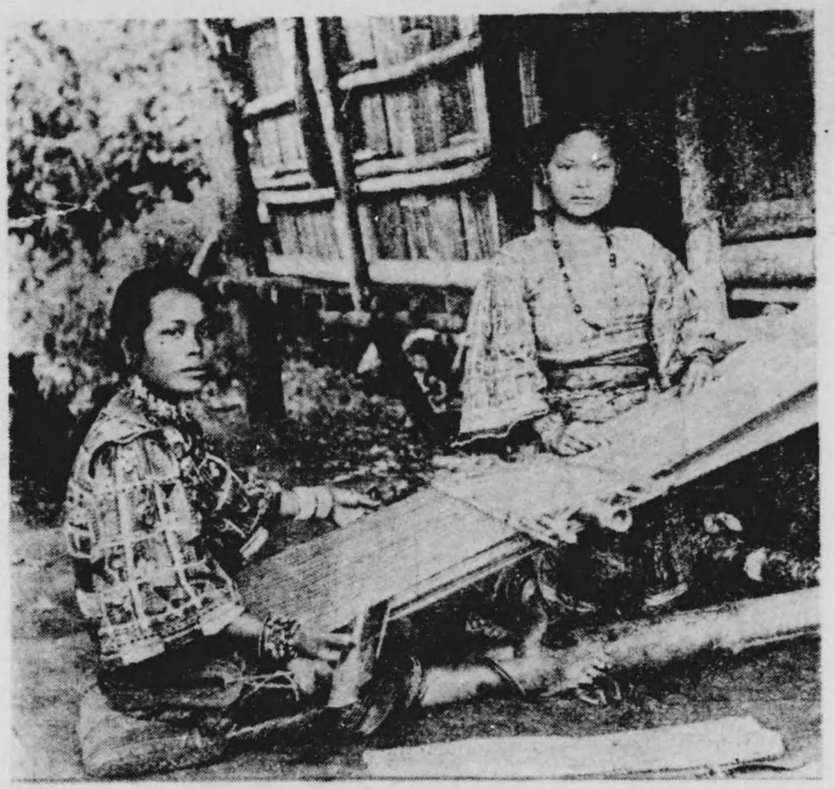




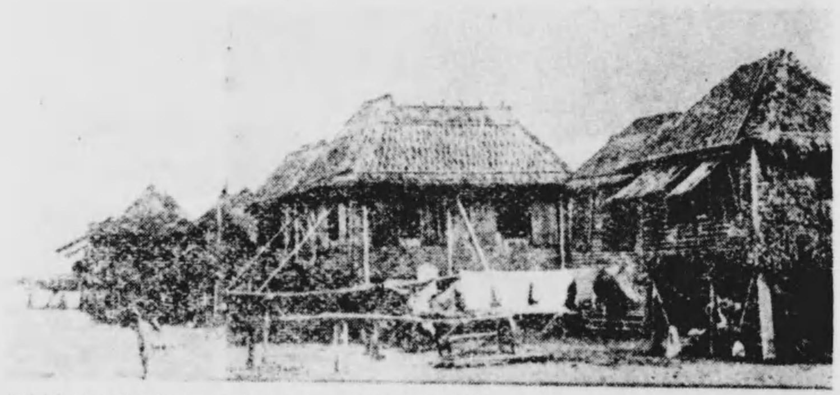
（右上）裝飾したビサヤ族の美人で（右下）ルソン島の山間に棲むネグリイトーイゴロット族の男子で（左上）ミンダナオの裸人中、良々優等を以て稱せられるバゴボ族の女子で（左下）隼人（日本武士）の武裝を思はせるバゴボ族の男子で（中央）騎牛のモロ族及びその水上家屋。



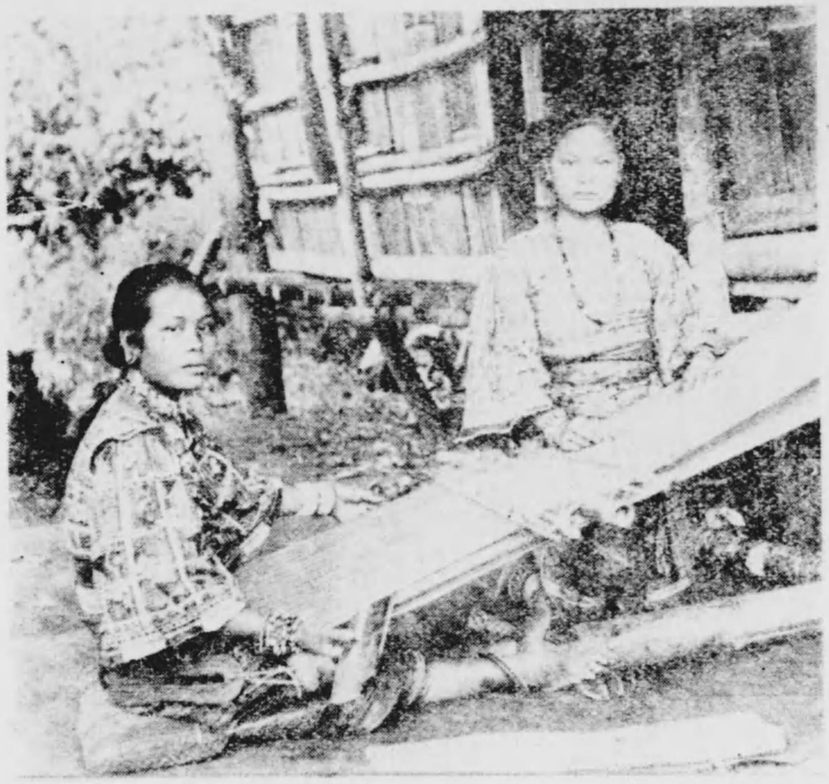
（上右）ルソン島の北部・バンゲツト山脈の中に散在してゐる部落○（下右）男子の族トツロゴイ居織機居る女子族ボゴバ



（上左）ミンダナオ島の山地・特にダバオ附近に散在してゐるアイタニマ族の人○漁家



（下右）○子男の族トツロゴイゐ居てし衍蕃に中の脈山トッゲンペ・部北の島ンソル（上右）
居機機の子女族ボゴバゐ



てし衍蕃に近附オバダに特・麓山の島オチダンミ（上左）○家邊の人ンピツリイフゐをラニマ

い上杏を穿くものがある。又、首に金銀珠玉を飾るものがある。髪は黒く長く直よかで、或は背に垂らし、或は頂上に結び、それに金銀の簪を挿む。

タガラ族の主要食は米で、魚肉・獸肉・鶏肉・蔬菜類・を副とする。食事は大抵日に三度である。米は陸田と水田とに依り、水田の法はわが國と全く同じである。

ビサヤ族は多くフィリッピン群島中の中央諸島に居住し、南宋の頃まではその尖端が臺灣の西部にまで及んで居た。その文化の程度は、前篇中に高天原民族の製鐵及び鍛鐵の技に關するくだりでその一斑を述べて置いた。（本書一四五―一六五ページ參照）

第二節　襲人

熊は剛力ではあるが鈍重な動物だ

最後に『熊襲』の稱呼及びその民種的血統並に文化について考へたい。

日向國霧島山の麓に當るところに襲國（そのくに）があつた。現に大隅國囎唹郡（そのこほり）と呼ばれて居るのは、多分その一部分であらう。『日本書紀』には『日向の襲』とある。この地名から推して考へても、熊襲の熊は、襲人の形容であつて、民種本來の名ではない。

それなら、なぜ襲人を熊襲と呼んだかといふに、それは襲人が勇猛精悍であつて熊のやうであつたからといふことに、國學者の說は皆一致して居る。

古典の權威・本居宣長でさへ、『彼の梟帥（たける）どもの甚だ健かりし故に、熊襲とはいふなり、熊鰐、熊鷲、熊鷹など、皆猛きといふ稱なり』といつて居る。

ところが著者にいはせると、その素質の勇猛慓悍を形容する場合には多く犀・狼・といひ、虎・狼・といひ、熊は引合に出ぬ。熊はその素質上、むしろ形容の大きく堂々たるを表する場合に用

ひられることが多く、少くとも隼人と呼ばれたほどに矯捷な襲人を形容することばとしては當らぬやうである。實際に見ても熊はその素質が餘りに獰猛なものでなく、又その動作の餘りに敏捷なものではない。鈍重で寧ろ親みやすいものだ。近頃はやつて居るスローモーションといふことばが最もよく熊にあたるやうだ。

又、人の勇猛精悍を形容する語としてはその頃一般に『醜男』『醜大丈夫』『大惡』『建』などいふことばが行はれて居り、襲人にのみ特に『熊』といふ形容詞を附けたとは思はれぬ。熊襲が大やまずみ族であるか、大わだつみ族であるかは疑問であるとし、どちらにしても色は白い方でなかつた。大やまづみ族、すなはちインドネシアであれば色が黑く、偉容の堂々たるものありし故に呼んだともいへぬでない。が、さうなると高天原から使節として保食神の許に遣された天熊大人、同じく大國主神の許に遣された大背飯熊大人も熊のやうに色が黑かつたかといふことになる。

『熊』を『米』の古語とする飯田武郷の説

『熊』が獸のくまでなくして『稔』すなはち『米』の古語であるといふことは、次に擧げる飯田武郷の説が殆どあらゆる異論（若しあつたとしても）に止めを刺して居る。

熊は借字にして、神に奉る稻を云へる古語にや有らむ。『倭姫命世紀』に、垂仁天皇二十七年の處に皇太神御前に『懸久眞爾懸奉始支云々』とあり。懸久眞は懸稻にて神嘗祭祠に懸稅と見えたる是なり。『和名抄』鄕名に石見國邑智郡神稻（久萬之呂）あり、淡路國三原郡神稻（久萬之呂）あり、神稻は義を以て云へるにて、言は稻實なり。然るに肥前國高木郡神代（加無之呂）も、元は神稻と同じ訓なりけむを、字に依りて加無とは訓じ誤れりしものなるべし。『和名抄』祭祀具に、『精米和名久萬之禰、精米所以享神也』とあるにても其義知られたり。（名義は中山信名說に、久麻は米の古言なりと云ふ。）さらば天熊大人は天稻大人と云ふ意なるべし。此神稻實を持上りて上りしより、さる名を負ひたまへるなるべし。

これは飯田武郷が天熊大人の名につけていつて居ることであるが、大背飯熊大人の名は更に武郷の說を補證するものだ。大背飯熊大人の『飯熊』はすなはち『飯稻』であり、『飯米』である。かの考證に、この飯熊の名を合せて考へれば、もう何人も熊が米の古語であつたことを疑ひ得る人はあるまい。

殊に保食神の國も、大國主神の國も、ともにその頃、高天原で『葦原中國』と呼ばれた地域の中にあり、米のよくみのるので、原日本人の憧憬の的となつて居た。その米のみのる國へ重要な

使命をもたらして派遣せられたものが、天熊大人（あまのくまのうし）であり、大背飯熊大人であつたといへば、この兩人が一種の通譯官で、葦原中國の言語・風俗・習慣・によく通じて居たといふことが、容易に察せられる。熊はいよ〳〵獸のくまではなくして米のくまである。

『熊襲』『熊大人』『大背飯熊大人』等の名に用ひられて居る『熊』が、獸のくまでなくして、米のくまであるといふ著者の說を證據立てる今一つの有力な事實は、九州の西半部すなはち襲人と倭人とが境を接して國をなして居た筑前・筑後・肥前・肥後・大隅・薩摩・地方に『熊』字、若しくは『神』字を當用したくまと呼ぶ地名、並に人名の夥しいことである。

西部九州の六大河川と『熊』字を冠する地名

なかんづくくまと呼ぶ地名・人名・の最も多いのは筑後・肥後・及び薩摩・等、西部九州の諸國である。人名は姑く措き、地名で、日の隈・月の隈・星の隈・隈部（隈府）・熊本・球磨郡・球磨川・隈之城などはその代表的のものである。殊に面白く思はれるのは、くまを冠した地名が、西部九州に於ける六大河川の中腹にあたるところ必ず一箇所づゝあり、しかもそれが、それ〴〵の河流によつて灌漑される平野の中心にありて最も豐饒な米作地となつて居ることである。

（一）日の隈・月の隈・星の隈・（筑後川の上流―日田盆地）

詩人・廣瀨淡窓で有名なる豐前國日田郡日田町は、筑後川の上流にある風光明媚の盆地で、龍門川（水源―日田玖珠郡）と三隈川（水源―肥後國阿蘇郡）との合流點にあたつて居る。この盆地を迂餘する筑後川のほとりには、日の隈・月の隈・星の隈・と呼ぶ三地點があり、三隈の名がこれから起つて居るかとも思はれる。菊池氏の勤王と賴山陽の詩とで名高い筑後川も、日田盆地まで溯るとやはり『くまかは』と呼ばれて居るのだ。

（二）隈　部（菊池川平野）

隈部は現今隈府（くまがぶ）町と呼ばれて居る。肥後四大川の一である菊池川の右岸に位する菊池氏累代の城府である。その後も菊池郡の首邑をなして來た。菊池川は、源を隈府の東五里、鞍嶽・深葉山・に發し、隈府の南を流れ、迫間（せこま）・城野（きの）・合志（かはし）・鍋田（なべた）・の諸川を合し、高瀨の南方で海に注いで居る。その流域が白川の流域と共に有名な肥後米の主要產地であることはいふまでもない。

（三）熊　本（白川平野）

菊池川平野の中心に隈部があるが如く、白川平野の中心に熊本がある。熊本は、『久萬（くま）』『隈（くま）』『熊（くま）』『苦麻（くま）』『球磨（くま）』等の文字によつて現はされて居る米產地の最も古く且つ本源的のもので、

『米の本國』ともいふほどの意味であらう。肥後米は今日一般にその質を以て稱せられて居るが、著者の專門家によつて確めたところによると、肥後米は必ずしも、その質に於いて優るのでなく寧ろ產額に於いて知られて居るとのことである。これに著者の說を加味していへば、肥後米は必ずしも質に於いて優るものでなく、その日本に於ける米の原產地である關係と、その產額とに於いて人口に膾炙するに至つたものである。熊本市を貫流し、小島・中原・の間で海に注ぐ白川は、その源を阿蘇山に發し、菊池・綠・球磨・川內・の四川の流域と並んで、日本に於ける米の原產地と推定さるべき幾多の祕密を包藏して居る。その最も著しいものは春秋三期に執行はれる田作・田植・及び收穫に因む阿蘇神宮の神事である。

（四）隈　庄（綠川平野）

菊池川の平野に隈部があり、白川の平野に熊本があるやうに、綠川の平野にも隈庄がある。綠川は阿蘇郡と上益城郡との境・川之口に源を發し、津留・御舟・加勢・濱戸・の諸川を合し、隈庄を經て、宇土の近海に注ぐ肥後四大川の一である。その流域の米作に適することはいふまでもなく、從つて『隈庄』が『米の庄』であることといふまでもない。

（五）熊　縣（球磨川平野）

肥後國球磨郡は古史に所謂熊縣である。『熊襲』の根據地と推定されて居る。『熊襲』は一般に『勇猛精悍なる襲人』の意に解されて居るが、その理由なきこと前述の通りである。一說に『熊襲』は古の熊縣と嘶唹縣との合稱であるとする。この說は著者のくまはこめの古語でありとする說に裏書するものである。如何となれば、『熊』が若し勇猛精悍の意でありとすれば、それが縣の形容詞となることが全く無意義であるからだ。熊縣は、隈部・熊本・隈之庄・と同じく『米の縣』であらう。球磨川は肥後四大川の一で、源を江代・片尾・の諸溪に發し、人吉町の東方約一里半の地點で、八代郡五箇庄の諸溪に發する河邊川を合せ、西流して告村に至り、北流して八代郡に入り、八代町の近海に注ぐ。この球磨川の平野すなはち人吉町の二十餘箇村が、古のいはゆる熊縣であらうか。

（六）隈之城（川內川平野）

肥後の四大川が、それ〴〵その抱擁する平野の中心にくまの名を冠する都邑を持つやうに、薩摩の川內川もまた、その抱擁する平野の中心に隈之城を持つて居る。川內川は源を日向の西諸縣郡狗留孫山に發し、西流して羽月川を合せ、薩摩郡に入つて隈之城の平野を流れ、網津・高江・の間で海に注いで居る。（以上六項、本書第一七九ページ挿入地圖參照）

獸に因む地名と鳥に因む地名との比較

次に獸の熊に因んで、熊字を冠した地名も有り得るといふ反對の立場から研究して行つて、この論斷を動きのとれぬところまで押しつめて見ることゝしよう。

獸に限らず、動物の名に關した地名はこの國にその例が乏しくない。殊に鳥類の名を冠したものが著しく多い。例へば次に擧げるやうなのは、どこの國にも二つや三つはある地名である。

鴻の巣・鳶の巣・鷹の巣・鶚の巣・鷲山・鷲津・鳥山・鳥川・鳥森・鶴川・鶴田・鵠沼・鴻池・鷺沼・等、

若し種目を標準としていふならば、獸の名を冠した地名は鳥の名を冠した地名ほど多くない。しかし、鳥獸ともその種目の多少に拘らず、箇々の土地を以てその數を競ふとしたならば、獸の名を冠した地名が斷然、鳥の名を冠した地名を押へてしまふ。これはなぜであるか。獸の名を冠した地名には『熊』の字を冠した地名が非常に多いからである。殊に熊野とか、熊田とか、熊川とかいふ地名になると、一つで、十箇所も二十箇所も兼ねて居る。これでは鳥の方がいくら力んで見ても及ぶわけがない。

ところが、鳥にしても、獸にしても、箇々の土地によらず、種目の多少を標準としてその數を競ふとしたならば、獸の旗色は忽ちにして惡くなり、斷然鳥の爲に押へられてしまふ。若し獸から熊一つを除くとしたならば、それは殆ど角力にも何にもならなくなる。

これは少しいぶかしいことだ。若し、獸の名を冠する地名が、大部分その獸に因んで起つたものとしたならば、種目がなぜもつと廣汎にわたらぬのであらうか。現に鳥の方を見ると、その種目が廣汎にわたり、しかも平均して居る。しかるに獸の方になるとその大部分が熊であり、しかも熊野とか、熊田とか、熊川とかいふ名が、一つで十箇所も二十箇所も兼ねて居るのは何ともいぶかしい。日本人がスウイス國民のやうに、熊といふ獸に對して何か特別のあこがれを持つて居るとか、若しくは日本が熊に對して、何か特別の歴史的・地理的・因緣を持つて居るとかいふならばともかくもである。さういふことの絶對に考へられぬ日本に、どうして熊の字を冠した地名がそんなに多いのであらうか。

それから、熊といふ字を冠した地名が、九州に著しく多いといふことも、いぶかしいことの一つだ。若しそれが獸の熊に因む地名であるならば、裏日本から東北・北海道・方面にかけて特に多く有りさうなものだ。しかるにその方面にはかへつて少い。亞熱帶ではないが一年を通じて、雪の積るといふやうなことが殆ど絶對にないといつてもよい九州の地に、著しく多いといふは何と

しても考へられぬことではないか。

又、熊山とか、熊坂とかいへば、いかにも獸に因む土地の名とも考へられる。熊といふ字を冠する地名の中にはほんとに獸に因むのもあるであらう。それを絶對にないといふのではない。しかし、熊田とか、熊川とかいふのになると、獸の熊とは大分緣が遠くなり、熊縣・熊本・熊代・などになると全く考へられなくなつてしまふ。

『熊』字を冠する全國各地名の檢討

ところが、熊を稻、すなはち米として考へると、一切の疑問が釋然としてとける。試みに日本全國に亙り、『久萬』『熊』『隈』『神』『久麻』等の文字によつて現はされて居る『くまた』『くまの』『くまかは』『くまがひ』『くまたに』『くままち』『くまのたひら』等の地名が、獸の熊と解しては全く無意義であるが、稻若しくは米と解して初めて有意義となることを述べて見よう。

(一) 熊田

熊田と呼ぶ土地は日向に在り、下野に在り、尙ほその他にも多からう。日向の熊田は延岡町の北方約四里、北川の流域にあつて田村が開けて居る。下野の熊田は現に下江川村に屬し、烏山の北方約三里の地點に在り、江川の流域で、荒川との間に田村が開けて居る。いづれも獸の熊とは緣が遠く、米作地として河川に關係がある。

(二) 熊野

熊野は紀伊を最も有名とし、近江にあり、丹波にあり、但馬にあり、出雲にあり、安藝にあり、日向にあり、大隅にあり、能登にあり、越中にあり、甲斐にあり、何れも『米の野』と解して初めて地形と緣があり、『熊の棲む野』と解しては、地形と緣が遠くなる。日本全國からいへば、特にいふに足るほどの米作地ではないが、その國又はその近鄕の地形からいつて、纔かに米を作り得る土地であるといふので名づけられたかとは思れるやうなのもある。

(三) 熊川

熊川は肥後にあり、武藏にあり、磐城にあり、若狹にあり、その他にも多からう。一體熊田とか、熊町とか、熊川とかいふ名稱は、熊縣と同じく、それ自體が『熊』の『米』と解すべきを立證するもので、『熊』を當字のまゝ獸と解しては、全く意味をなさぬことになる。熊山・熊坂・等に至つて初めてその名稱の起りに疑問を生ずる位のものである。

(四) 熊谷

熊谷はその文字の上では、『熊の棲む谷』と解釋されさうで、實際の地形を見て、獣の熊と絶對に關係のないことは、武藏の熊谷で見てもよく分る。殊におもしろく感ずるのは、西洋でバレーが『河盂』すなはち『平野』を意味し、渓谷を意味せぬのと、熊谷の場合に於ける『谷』の使用とが全く一致して居ることである。武藏では熊谷をくまがひと呼んで居るが、備中・出雲・日向・ではくまたにと訓じて居る。備中の熊谷は新見の東北、熊谷川に沿うた山村である。出雲の熊谷は飯石郡に在り、今の飯石村と三刀屋村とに屬して居る。飯石郡は出雲の中でも山又山の地方であるが、熊谷は斐伊川に沿ひ、郡中での米作地である。備中の熊谷も出雲の熊谷も周圍の山又山に對して縱に米が出來るので、特にその名があつたものではないか。

（五）熊町

熊町は磐城にある。往昔『久萬』とか『苦麻』とか、又は『熊』とか書かれた土地が開けて町となれば、熊町と呼ばれるわけである。『久萬』は伊豫にあり、土佐にあり、熊は肥後にあり。遠江にある。前に述べた肥後の隈府・隈庄・なども熊町と呼ばれてよかつたわけである。

（六）熊之平

碓氷峠の熊之平なども、山中僅に米を生ずるので特にその名があつたものであらう。

『米の本國』であつた熊本平野と阿蘇神宮との關係

熊を米の古語であるとするこの著者の說を最後的に決定するものは『熊本』の地名と、『熊本』の地名に關係が深さうに考へられる阿蘇神宮の神事とである。

前述の如く、熊の字を冠する地名は、日本全國にわたり、枚擧に遑ないほどあり、しかも一つの地名で十箇所も、二十箇所も兼ねるやうなものもある。しかるに『熊本』は全國にたゞ一箇所あるだけである。これは考へてよいことだ。なぜ『熊本』といふ名が起つたか。九州の西海岸筑後・肥後・薩摩・の三箇國にわたり、米作に適する河流が六つあつて、それがいづれも同じ方向に流れて海に注いで居る。その中で、阿蘇山に源を發する白川の流域が最も米作に適し、肥後米と稱して、九州に於ける米作の中心地となつて居る。

『熊本』はすなはち『米の本國』である。若し、『熊本』といふ地名が、熊野・熊谷・熊田・熊川・熊村・熊町・の如く他に多くあれば、肥後が米の原產地であり、葦原中國の中核地點であらうといふ著者の說は土臺から崩れるのである。しかるに、熊野・熊谷・熊田・熊川・熊村・熊町・はさらにあるが、熊本は一箇所しかない。

官幣大社・阿蘇神宮は、神武天皇の御孫で、神八井耳命の御子なる建磐龍命を主祭神とするものである。命は當時倭人と襲人とが、境を接して蓄衍した西九州鎭撫の命を受けて西下し、肥後の阿蘇津媛と婚して今の宮地の地に宮居された。倭國にも、熊襲國にも、まだ女性支配の國が多かつたから、阿蘇も恐らく女性支配であつたに相違ない。景行天皇筑紫巡狩の時、建磐龍命の子・速瓶玉命が更めて阿蘇國造に任ぜられ、命の子、惟人に命じて神宮を宮地に造營せさせられた。これが阿蘇神宮の起りで阿蘇（大宮司）氏の始まりである。

凡そ日本の神社で例祭の外に五穀の豐穰をいのる祈年祭と、新穀を捧げて感謝を捧げる新嘗祭とを執り行はぬものはないといつてよからう。たゞ官幣大社・阿蘇神宮の例祭は、毎年七月二十八日の田植祭を中にして、陰曆二月初旬の田作祭、陰曆八月十五日の田實祭ともすべて米作に關する神事であり、その外に例祭といふものはないのだ。しかも、阿蘇山こそは、『米の本國』である熊本平野に、灌漑の利便を供する白川の水源地であるのだ。われ〳〵はこの阿蘇神宮の三大神事を決してなべての神社の祈年祭・新嘗祭・と同列に扱つてはならぬ。

豐族の米田法と襲族の米田法

豐族も米を作つた。隼人も米を作つた。襲人も米を作つた。しかし、この三者の米作法には何ほどかの差異があつたやうだ。この差異こそ、やがてかれらの故郷を物語るものでなかつたか。

豐族は海岸に近い臺地を克念に鎧田に仕立て、水車などを利用して、巧に稻を作つた。それは豐前に行つて見ても、豐後に行つて見ても、又、若狹灣廻廊地帶を旅して見ても、直にうなづかれることだ。總じて大わだつみ族（安曇族）の據點といはれるところには、巧に耕作された鎧型（雛壇式）の水田がひらけて居る。名月で名高い信州更科の鎧田はその最も顯著な一例だ。鎧田の分布に關しては、西歐の學者の中に、太陽・巨石・文化と同列に置いて說をなすものもあるやうであるが要するに環境の生んだ產業形態で、そんなにむづかしくいふ必要もあるまいと思ふ。慶應義塾大學教授・松本信廣氏も『佛印の民族と文化』の中で、タイ人の據點及びその水田法に對して次のやうな注意を拂つて居る。

インド支那の特色は、地形とともに、居住人種が一變することでタイ人は日本でいへば、『山口』といふやうな溪谷の入口を占領し、棚狀の水田を開き、水車などを使用して灌漑し、水田耕作を行つて居る。

これにくらべると襲人の水田法は全くちがつて居た。それは前揭六大河川の中腹に見出される

『熊』もしくは『隈』を現した地名に徴しても知られることだ。前に大倭・日高見のくだりにも述べて置いたやうに、若し天孫民種が襲人と同じく、大河の中腹に開けた平野を據點として選ぶ習慣を持つたものであつたならば、神武天皇は浪速の國に御著船遊ばされ青雲の白肩の津から、生駒山の麓なる龍田の地に到らせる間の平野に、その都を御治定になつてよかつたわけだ。何を苦んで孔舍衞の坂の嶮を攀ぢ、長髓彥の毒矢を犯してまでも大倭國に入らうと遊ばされる必要があつたであらう。

襲人の故郷はどこであつたか。又、どういふ道筋をたどつて西部九州なる六大河川の灌漑地域にその據點を選んだものであつたかはまだ明かでない。たゞ襲人と隼人とが同族でなかつたこと、襲人は大やまづみ族よりも、むしろ大わだつみ族の方に近い民種であつたことだけは追々明かになりつゝある。

たゞ熊襲が、叛服常なく、しば〳〵大和朝廷を煩はし奉つたことが文獻歷史の上に明記されて居るのに、實際の御征旅を見ると大纛が必ず隼人の國のある方に向けられて居るのは異とすべきである。

第六章　ネグロ及びネグリイト

古代日本に於けるネグリイト

世界いづれの國の歷史を見ても、その先史時代には、必ず色が眞黑で、體軀の矮小な民種が全面的に蕃衍して居たことが、傳說として或は神話として殘つて居る。たとへばわが日本の古代史に見ても『土蜘蛛』と呼ばれる矮小・黝暗・な民種が到るところに穴居して居たことが、內外諸多の文獻に現はれて居る。この色の黑い矮小な民種こそは、現に世界の人類學者によつて『ネグリイト』もしくは『ピグミイ』と呼ばれて居る人種の部類に屬するものであらう。古代わが國の南部九州地方ところ〴〵に聚落して居たネグリイトが『魏志』に『侏儒國』として現はれて居ることは、今日では相當廣く知られて居ることであり、德川時代の末期に及び、最上德內あたりの探檢で、蝦夷地及び樺太方面に純粹の血統と生活樣式とを保持して、內地人と隔絕した生活を營んで居たアイヌ人の事情がはつきりして來るとアイヌ人が幾千年の昔、內地に廣く蕃衍して居た際、

この民種と密接な關係があり、『クロボク-グル』と呼んで居たことが明かとなつて來た。すなはち記・紀・の上で土蜘蛛と呼ばれて居る先住民族は、曾てアイヌ人からはクロボク-グルと稱へられ、『魏志』の上には侏儒國として現はれて居るのだ。

このネグリイト族の相貌をその儘にして體軀を大きくしたものがネグロでありネグロとネグリイトとは、幾萬千年を隔てゝ、更に優秀な人類が大アジア洲の陸屋根から、ウラル-アルタイ系インド-ゲルマン系及び崑崙系の三大種族に分れて押出す以前、すでに東半球の有らゆる部面に亙つて布置されて居たことが想像せられる。わが國に蕃衍して居たネグロ及びネグリイトは、もちろん支那にも、インド支那にもビルマにも、マレーにも、インドにも、イランにも、イラクにも、アフリカ大陸にも、エウロッパ大陸にも蕃衍して居たことが明かである。支那に先史時代廣く苗族が蕃衍して居り、それが黄河を傳つていはゆる中原に押出して來た漢民族と激しい存立競爭を演じた後、追々に湖南省方面から貴州・廣西・兩省方面の山地に追込まれて行つたことは、かの國の歴史に著しい事實であるが、それ以前、支那大陸に廣くネグリイトの布置せられて居たといふことは耳新しい説であるが、近頃西歐人の古代支那を研究した二・三・の書物には、そのことが記述されて居る。最近荒畑寒村氏によつて譯述されたグロヴア-クラアク氏の『長城は崩壞する』の如きその一である。

錦縣で見た四天王の民種的相貌

それについて著者の強く感じたことは先年、滿洲國錦縣なる有名な大廣濟寺境内の關帝廟で見た四天王の立像である。この極彩色の立像は一軀々々その相貌を異にし、四つの民種を表徴して居るものであることがはつきりと看取られた。

これまで日本の内地でも、四天王の像はしば〳〵これを見て居たのであるが、いづれも著色のない木彫であつて、かやうな極彩色のものは曾て見たことがなく、ここで初めてその一軀々々に異民種の相貌のはつきりと表現せられて居るのを觀察したのであつた。もちろん、この四天王の像はこゝ獨特のものであつて、他にその例はないのかも知れぬが、その中の一軀は確かにネグロの相貌であつた。尤も皮膚の色は、さほど黑くは塗られて居なかつたが、その鼻の扁平さから鼻翼の持つ特徴、眼の下の筋肉の何ともいへない一種のたるみが、紛ふ方もないネグロのそれであつた。殊にその厚い唇の表現に至つては、もうそれがネグロを紛本としたものであることを疑つて見る餘地はなかつた。

著者はこの四天王の像を見た瞬間にふと前に讀んだ西歐人の書物に、支那にも先史時代には、ネグロ及びネグリイトが廣く布置せられて居たといふ說のあつたことを想起したのであつた。

このネグロ及びネグリイトが現在最も濃厚に布置せられて居るところは、いふまでもなくアフリカ大陸であり、アフリカ大陸及びマダカスカルから東方に向つてインド太平洋及び南・北・兩太平洋の上に、例へば節分の炒豆を撒き散らした如く點在する大小無數の島々にも萬遍なくこの人種の血統は行渡つて居る。

インド・マレイ・ビルマ・タイ・佛領インド支那・等のアジア南方大陸にも、この人種の痕跡は頗る濃厚であるが、インド方面は、後にパミイル高原からアフガニスタンを經、ヒンヅウクシ山脈を越えて半島に進入して來たインド・アリアン（ヒンヅウ族）及び釋迦族（塞族、トルコの一種）の爲に壓迫せられてセイロン島附近もしくはマレイ半島方面から逐次海洋方面に追立てられて行つたものらしい。

ネグロ及びネグリイトの故郷はどこか

現在に於けるネグロ及びネグリイトの配置からいへば、この人種は、アフリカ大陸の中心、ベルヂウム領コンゴーあたりがその故郷と想定されてよささうなものであるが、曾ては東半球の南北有らゆる方面にこの人種が蕃衍して居つたことが各國の神話・傳說・によつて明かである以上、現在の布置から推してその故郷を斷定することは許されない。ネグロ及びネグリイトも、ウラル・アルタイ系・インド・ゲルマン系・及び崑崙系の三大種族と同じく、大アジア洲の陸屋根がその發祥地であつたことは、漸くこれを認める學者が多きを加へつゝあるのであるが、それと前揭三大人種との關係に至つては、まだ如何なる學者によつてもはつきりと說明されて居ない。すなはち或る學者は、人類をウラル・アルタイ系・インド・ゲルマン系・及びネグロ・ネグリイト系の三大系統に分ち、それが殆ど時を同じうして大アジアの陸屋根に發祥し、河流を傳つて四方に押出して行つたもののやうに想像するのであるが、この說には同意することが出來ぬ。

何分、第四間氷河時代に於ける世界の事情を想定すべき材料が乏しく、どんな學者もまだこの疑問にはつきりと說明を加へることは出來ぬのであるが、著者の想像を大膽率直にいはせて貰ふならば、ネグロ及びネグリイトの分布・蕃衍・と、ウラル・アルタイ系・インド・ゲルマン系・及び崑崙系三大民種の世界各方面に於ける分布・蕃衍・との間には、相當悠久な時間の隔りがあり、そこでわれ〳〵の世界が、全くその相貌を變へて居るのではないかと想像される。

エデンの花園とアジアの大日高見

西歐では、人類の發生及び發達に關する最初の想像が舊約に盛られて居り、それが軈て人類學の發達を促す偉大な力となつて居ることを否定することは出來ぬ。輓近、地質的研究が進み、それと關聯して逐次發掘されて行く原人の骸骨に關する研究も歩を進めて來ては居るものゝ、さうした科學的方法の推進めらるゝ軌道は、大體舊約の初めに設定した線路に沿つて走つて居るやうにも思はれる。

舊約では先づ『エデンの花園』といふものを想定し、そこに人類の祖先であるアダムとイヴとが神とともに住んだといつて居る。この『エデンの花園』は前にも舊約を引いて述べて置いた通り四つの大きい河流の水源地であり、隨つてわが國のいはゆる『日高見』すなはち美しい盆地であつたことが明記されて居る。すなはち、人類は初め海岸もしくは氷雪の中に埋れて居るツンドラ地帶などに發生したものでなく、大陸の中心で、幾つもの大河川がそこに源を發し、四方に向つて流れ下る高い美しい盆地に發生したものだといふエデンの花園の想像は、今日から推考へて見ても、動かすことが出來ぬやうだ。但しそれがチグリス・ユウフラテス・二大河川の水源地帶であつたといふことは西歐人の考へ方でしかない。世界にはこのエデンの花園の規模をもつと雄大に、もつと莊嚴にした大日高見が少くないのであるが、その中でもゴビ・タリム・パミイル・と連互して居る世界の大陸屋根は東半球に擴がる一切の大陸を全て半島として鳥瞰する絶對至高の大日高見である。

更に飜つて舊約の記述を見るに、アダム・イヴ・を祖先とする最初の人類の上に神の責罰が下り、大洪水が前の世界に於ける一切の罪と穢とを洗つて、その樣相を一變したと說かれて居る。すなはち、前の世界に發生・蕃衍・した人類が、地殼の或る大變動によつて滅び、世界が全くその面目を一新したといふ考へ方は、地質學竝に人類學の非常な進歩の上に立つ今日の人間の想像力を以てしても、土臺からこれを覆へすことは出來ぬやうだ。すなはち、地球の太陽をめぐる軌道の伸縮及び歲差等の關係から、幾萬年といふ悠久な歲月を期間として交互に繰返される亙寒時代と暖熱時代との推移で、われらの世界は幾度かその樣相を變へ、相貌を新たにして來て居る。さうして、その最後の變化に該當する數萬年の期間に跨がつて人類が發生・蕃衍・して居ることは、今日の進歩した科學の說くところも、舊約の說く洪水說とさしたる相異はないのだ。たゞ何としても舊約を病ましめて居るものは、白人歐洲を中心とする視角であり、キリスト教の教義を中心とす

る説明である。

大洪水説と第四間氷河時代

ネグロ及びネグリイトは、現在の世界に於いてこそ最も劣等な人種でもあらうが、この人種が世界の有らゆる方面に押出して盛に蕃衍して居た前の世界にあつては、蓋し最も優秀なものであつたかとも想像せられる。かれらは火を焚いて暖を取り、禽獸魚介の肉を焙つて喰ひ、更に冱寒の來り逼るに及んでは、穴中に逃避し、纔にその種を保つの叡智を持つて居た。當時の世界には、その叡智をさへ持合さぬ猿猴に近い人類の『屬』もしくは『種』も何程か殘つて居たことであらう。

かやうにして最後にわれらの世界を襲つた第四間氷河時代の様相が如何なるものであつたかは、誰もこれをはつきりといひ得るものはない。ノアの方船（はこぶね）が生きとし生けるものの有らゆる種を乘せてアララテの山に止まつたとあるやうに、人類は、世界の生きとし生けるものを絶滅する爲に逼つて來た冱寒の爲に追はれてノアの方船の漂著したアララテの山にもひとしい高地に追詰められ、そこに纔にその種を存したといふやうなことも想像されぬでない。世界人類の持つ種々さまざまな文化の中、その生理條件と關聯して最も根本的なものの一つである世界の三大語系が、三つの扇のかなめを集めたやうに、大アジアの陸屋根にその源を發し、末廣型に擴がつて、アジアに、エウロッパに、アフリカに、イラン・イラク・に、支那・インド・マレイ・にその脈を引いて居ることも、大アジアの陸屋根がアララテの山に當るところでなかつたかを想はせるに十分な證徴といへぬでない。現在の世界に於いてこそ、世界的陸屋根は大部分沙漠として死の世界の如く横はつて居るものの、前の世界に於いては氣候も溫暖で、草木もよく繁り、果實・穀芻・の最も豐富なエデンの花園であつたのかも知れぬのだ。

人類を分布蕃衍させた大日高見の諸河川

いま、前世界の或る時期に、その頃、最も優秀な人種であつたネグロ及びネグリイトがこの大日高見から河流を傳つて四方に押出したと假定するに、バイカル湖の周圍から北に向つて進んだものは、黑龍江・オビ河・イエニセイ河・レナ河の流を傳つて東亞とシベリアとに向つて押出して行つたことであらう。またイリ河・シル河・アム河・三大河川に沿つて天山・パミイル・の間を下つたものは、中央アジアから、コーカサス・ウクライナ・方面にかけて押出して行つたことであらう。

またパミイル高原からヒンヅウクシ山脈を越え、ヘルマンド河の流に沿つて西南に下つて行つたものは、ペルシア・アラビア・地方に蕃衍し、更に西進してアフリカ大陸に乘込んで行つたであらう。アフガニスタンから分れて路を東南にとりインドのパンヂャツプ地方に行つたものは、インダス河とガンヂス河とに沿つて擴がつて行つたであらう。更に東方・青海省・西康省・方面の高地から北に向ひ黃河を傳つて下つたものは北支那地方に蕃衍し、金沙江・メーコン河（瀾滄江）・に沿つて下つたものは南支から佛領インド支那方面にかけて蕃衍して行つたことであらう。更にイラワヂ・サルウイン・二大河川に沿つて下つたものは、タイ・ビルマ・マレイ・方面に蔓つて行つたことであらう。

この大アジア洲の陸屋根の南側を緣づけるヒマラヤ山脈こそは『パラマウント』そのものであり、如何なる自然の力も、如何なる人間の力もこの天然の大障壁を穿つてインドに下ることは出來なかつた。金沙・メーコン・イラワヂ・サルウイン・の五大河川が束ねられた材木のやうになつて青海・西康・兩省に片寄せられて居るのを見ても、ヒマラヤの偉大なる威力を知るべきだ。天山・アルタイ・サヤン・ヤブロノイ・興安・の五大山塊が幾つもの閘門を備へ、シベリアの大平原に向つて、黑龍・オビ・イエニセイ・レナ・の四大河川を放流して居るのと較べると格段の差だ。この偉大なヒマラヤの北方高地、すなはちツランス・ヒマラヤにその源を發するブラマトフ河に沿つて下つたものは、大迂廻をしてインドのカルカツタ方面に下り、そこでガンヂス河を下つて來た一派と相會したことであらう。

かやうにしてネグロ及びネグリイトが東半球の有らゆる方面に蕃衍した後、更に前世界の終末期から現世界の黎明期にかけ、この大陸屋根に集まつて新しい文化の花を開いたウラル・アルタイ系・インド・ゲルマン系・及び崑崙系の三大民種が、幾萬千年を隔てゝ、ネグロ及びネグリイトと同じ路を傳ひ、東半球の有らゆる方面に押出して行つたものと假定すれば、現に世界人類學者の間に大きい疑問としてのこされて居るネグロ及びネグリイトと前揭三大民種との關係も、どうやら說明がつくわけである。

ネグロ及びネグリイトが世界の國津神となつた理由

すなはち、ウラル・アルタイ方面から北エウロツパ方面にかけて蕃衍した溫・寒・帶並に極帶地域のネグロ及びネグリイトは、襲つて來た亟寒の爲に、特に叡智の優れたものを除いて、殆どその種を滅されてしまつたが、纔に殘つた優秀な種族も、溫暖とともに押出して來た新しい種族の

爲に追立てられて、アジア・エウロッパ・の北部には、殆どその種を見出されなくなつたものと考へることは、箸にも棒にもかゝらぬ荒誕な臆說として斥けられるであらうか。

これに反して、佛領インド支那・タイ・ビルマ・インド・ペルシア・アラビア・アフリカ大陸方面に押出して行つたネグロ及ネグリイトは、その氣候に適應して盛に蕃殖し、後に押出して來た崑崙種・インド-アリアン種（ヒンヅウ族）・イラン-アリアン種（セム族）との間に激しい存立競爭が行はれたにも拘らず、暖・熱・帶的風土の威力の支持を得て、よくその征服に勝へ、今日に至るまで盛にその種を蕃衍させて來たものではなかつたか。だから有史以前、さかんにわが國に蕃衍して居たネグリイトすなはちピグミイ（侏儒族）とて、必ずしも南方太平洋上から、刳船を操つて漂著したものとばかりは限るまい。アジア大陸から、海峽を越えて徙遷して來たものも多かつたであらう。

さうして有史以前廣くこの國土に蕃衍して居た侏儒族（土蜘蛛）は、アイヌ人にも追立てられたであらうし、その後續々徙遷して來た大わだつみ系國津神・大やまづみ系國津神・にも追立てられたであらう。さうして一旦太平洋上に驅逐されたものが、マレイ-ポリネシア人あたりの奴隷として再びこの國土に將來されたといふ複雜な事情もあり得たであらう。

さうして大わだつみ族もしくは大やまづみ族の爲に征服されたネグリイトは、それらの國津神達の聚落した地點から、若干里程を距てた村はづれの野や山に、奴隷として集團的穴居を許されて居たこともあらう。何にしても太古に於けるネグリイトの蕃衍は、世界どこの國でも歷史の疑問とされて居る。

太平洋大陸陷沒說について

すなはちネグリイトの人種的系統とその蕃衍の徑路があまりにも不可思議であるところからこに一つの奇拔な說が行はれることになつた。われ〳〵は一概に南・北・兩太平洋と呼び、地圖を披いては、こゝがハワイ、こゝがマリアナ、こゝがグアム、こゝがマアシャル、こゝがカロラインと何の苦もなく指呼するが、實際この渺茫たる太平洋を航海して見ると、アフリカの東海岸やインドの尖端から矮小・黝暗・なネグロ及びネグリイト、それは世界の最古の人類と想定されて居るネグロ及びネグリイトが、獨木舟に乘つてインド洋を橫斷し、インドネシアを經て、豆のやうな孤島の上にまでも萬遍なく布置されたものとはどうしても考へられない。

そこで實際問題として、このネグロ及びネグリイトの故鄕に關する一つの臆說が現はれた。そ

れは、人類の發祥地を曾て東半球と西半球との中程に横はつて居た大陸に想定する説である。すなはち、その説を主張する人々によると、曾て東半球と西半球との間に横はる太平洋の中程には、今のオーストラリア洲の數倍にあたる大陸が横はつて居た。その大陸こそ最初の人類の故郷であつて、この民種はそこを中心として四方に押出して行つたものだ。その證據としては、この彫茫たる大平洋諸群島の上に殆どまんべんなく、暖・熱・帶の線を周つて、東半球と西半球とを繫ぐ巨石文化が行渡つて居る。さうしてその巨石文化は珊瑚礁を土臺として成る島々の上にも發見される。凡そこれらの巨石はどこから何人によつて如何なる方法で持運ばれたものであるか。これは持運ばれたものとは何としても考へられぬ。前の世界に存在した大陸の名殘であるといふのが、この派の人々の主張だ。

しかるに、世界最古の人類の故郷と想定される件の大陸は、その後に起つた地殼の大變化により、影も形もなく海底に陷沒してしまつて、その後には、節分の炒豆を撒き散らしたやうな無數の小島のみが殘されることとなつたといふのが、その臆説の大體である。かやうな臆説の生ずるのも、太平洋の廣さと、その無數の孤島の上に萬遍なく布置されて居るネグロ及びネグリイト族の奇蹟的な存在とからいふと無理もない思ひつきではあるが、著者はそれを信じたくない。

第四篇　伊勢大神宮の構成に具現される國體の神髄

第一章　內宮・外宮・併祀の由來及びその意義

豐受姫神は天照大神の御系譜には見出されぬ

伊勢の國山田なる天照大御神の御廟、すなはち內宮と押並め、外宮として齋き祀られて居る豐受姫神が、保食神であるか、大宣都姫神であるか、それとも全くの別神であるかに關しては、昔から古典學者若しくは、神官達の間に論爭の絕えなかつたところだ。たゞそれが血統上、われらの日本民族の嫡祖・天照大御神の次位に齋き祀らるべき高天原系統の神にて在さぬことだけは、國史上何人も異議のないところであらう。內宮・外宮・の並立つ關係から推して考へても、日本民族の血統的構成分子が頗る複雜なものであるといふことだけはよく分る。想ふに豐受姫神は高天原民種と對等若しくはそれに近い條件でその地位を認められた他の種族の代表者で、米作と養蠶とは高天原民種がこの女神によつて代表される民族から傳へられたものではないか。さやうに考へて來ると、內宮・外宮・の並祀の意義は日本國家の構成上、いよ〳〵重大を加へて來ることにな

る。

先づ外宮の祭神に關する從來の諸說から吟味してかゝることゝする。

從來の國學者殊に外宮の神官達は、外宮の祭神・豐受姫神を何とかして天照大御神の直統に見出さうとして努力した。しかしその努力は全く無駄であつた。そこでかれらは『かくある』事實を抹殺して『かくあつてほしい』願念と置きかへようとかゝつた。これこそ一部の頑迷固陋な學者達によつて行はれる歷史の常習的歪曲であり、しかもその結果は常に日本民族の偉大な特質を抹殺し、日本文化の燦然たる光輝を遮蔽する結果を贏ち得たに過ぎなかつたものだ。

かれらは先づ舊記の中から國常立神を天御中主神の化身とする說を捉へ來つて、外宮の祭神をこれに擬へようとした。しかし、さうすることになると、元神である國常立神を外宮に祀り、この後裔にあたる天照大御神を內宮に齋き奉つた理由が分らなくなる。その中に天照大御神は日の神であるが故に、內宮に奉祀された、國常立神は月の神であるが故に、外宮に齋きまつられたといふ說も起つて來た。すると、それにつれて國常立神を月神とする根據がどこにあるか、月神であれば天照大御神の御弟・月夜見尊でなければならぬ。いつそ月夜見尊にしようではないかとの妥協說も起つて來た。

すると、國常立說を主張する神官は次のやうに力說して、飽くまでも外宮を內宮の祖神たる地位に置かうとした。

此事深秘の其一なれども、祀官互に其神の德をあらそひ、世人もまたまよふことなれば、仔細をいふべし。尊神御出生の次第をいへば、外宮は先にして國常立尊、內宮は後にして天照大神なり。又、御鎭座をいへば、內宮は先にして、外宮は內宮の御告によりて後に御鎭座なり。對する時は內宮を日神と號稱し、外宮を月神とも號す。月神と申（し）奉るとて、月讀尊の御事にてはなし。國常立尊は、一水の德の神にてましますゆへに、內宮火德の日神にたいして、外宮水德の月神と習ふ事也。月讀尊、內・外・宮ともに別宮にましませば、まどふべき事にあらず。然（る）に、內外二宮を偏頗して思ひ奉る族もあり、天照者二宮之通稱、大神は太廟の本號とも侍れば、偏頗すべからず。（陽復記の心）

これが世にいふ『度會神道』なるものである。この說明によつて見ても德川時代に入り、外宮の祭神に關して神官の間にどんなに激しい論爭が行はれて居たか、又、世人がそれに對して、どんなに深い疑惑を持つて居たかゞよく分る。

外宮は内宮より約五百年おくれて丹波から伊勢に遷祀された

そも〳〵豐受姫神が、伊勢の國度會郡沼木郷なる山田の原にいつきまつられたのは、人皇二十二代雄略天皇の二十二年で、内宮の御鎮座を去ること、四百八十四年の後とある。それまで豐受姫神は丹波國與佐郡魚井原（現今の丹後國與謝郡――丹後五郡が丹波から分れたのは和銅六年のことである）に祀られて居たとある。その由來に關して、諸書の記すところは、次の如きものである。

昔、豐鋤入姫命、天照大神を載せて丹波與佐宮に到ります。時にこの神天より降りて同じく一所に坐します。四年を經て天照大神獨り大和に還る。しかもこの神丹波に留まり、道主命これを祭り奉る。古時御膳をこの宮に調へ、毎日内宮に送り奉る。神龜年中、御膳殿を外宮に建て、又同じく内宮に獻ず。これを以て御膳神といふの說有りと雖も、神食・御氣・の二義有りて、食と氣と和訓相近く、陰陽元初の御氣にして又、天狹霧國、狹霧の名あり。すなはち宜しく前說を以て正しと爲すべし。天孫尙ほ相殿に在せば、何ぞ御膳神といふを得ん哉

（神社考――今樣譯文）

泊瀨朝倉宮-大泊瀨稚武天皇の即位二十一年、丁巳冬十月、倭姫命夢に敎へ覺し給はく皇太神吾一所に在さずば、御饌も安く聞しめされず。丹波與佐の小見比沼の魚井原に坐す道主の子-八乎止女の齋きまつる御饌津神-止由氣太神を、わが坐す國に欲りすと、誨へ覺し給ひき。爾る時、大若子命を朝廷に差し使はし、參上せしめて御夢の狀を申さしめ給ひき。すなはち天皇汝大若子に勅して罷り往かしめて、布理奉り宣ひき。故手置帆負・彦狹知・の二神の裔を率ゐ、齋斧・齋鉏・等を以て、始めて山材を採り、寶殿を構立す。明年戊午秋、七月七日、大佐佐命を以て、丹波國餘佐郡眞井原よりして、止由氣大神を度遇山田の原に迎へ奉る。（倭姫世記――今樣譯文）

『倭大國魂神』は豐受姫神の御異稱

それぱかりではない。前揭『神社考』の說明の中には、もつと由々しい、根元的の誤解が含まれて居る。それは天照大御神の御靈が崇神天皇の御宇、齋宮-豐鍬入姫命に侍かれて宮中を出で、永久に鎭もりますべき聖地を求めて二度目に丹波國吉佐宮に到りました時、豐受姫神の御靈が天

から御降りになつて同一所に坐しましたとする説明がそれである。もちろんこれは『神社考』の筆者に限つたことではなく、この著者が出でて、崇神天皇の御宇、天照大御神の御靈とともに宮中を出でまされた倭大國魂神が、從來説明せられて來た、大和國の地元の神ではなく、豐受姫神の御異名であつたとする説を發表するまでは、何人も『神社考』あたりの説明に任せて敢て疑を起さうとも、又研究を遂げようともしなかつたのだ。これは國民をしてわが國體の根元を知らしめる上に甚だ遺憾なことであつた。そこでこの著者は、こゝに初めて倭大國魂神を豐受姫神の御異名でありとする説を世に問ひたいのだ。

著者の見るところによると、現に伊勢大神宮の構成となつて居る內宮・外宮・の兩廟は崇神天皇の御宇まで、代々宮中に並祀されて居たものだ。すなはち伊勢大神宮の構成は、建國以來宮中に奉齋されて居た賢所の構成をそつくりそのまゝ伊勢に奉遷したものであるのだ。

今その由來を物語らう。

大わだつみ族が最初から高天原に歸順し、或はその航海操船の特殊技能を以て、或は米作養蠶の產業文化を以て、誠心誠意、天照大御神に奉仕し、延いて神祖御三代の天業を翼贊し奉つたことは、すでに本書の第三篇第二章及び第三章（第三〇四——三六七ページ參照）に詳しく述べて置いた通りであるが、殊にその特殊の產業文化を以て奉仕したことは、日本建國の上に最も偉大な功績をのこしたものであつた。

內宮・外宮・はもと宮中に奉齋されて居たものだ

初め天照大御神は、この豐受姫神と異名同體と考へられて居る保食神（うけもちのかみ）から、五穀の苗を請受けて、高天原に試作し、初めて八束穗垂穗稻を御收穫遊ばされ、いよ〳〵天孫を大八洲へ御差遣遊ばされる御決心をお固めになつたのであつた。されば豐受姫神、すなはち保食神と天照大御神との御關係はその頃からのことであつて、神武天皇以後代々の天皇は、その直系の大御親である天照大御神の御靈と豐受姫神の御靈とを竝べて宮中に奉齋し、殿を同じくし、床を共にして朝夕崇め敬はれて來たのであつた。そも〳〵倭大國魂神は豐受姫神の御異稱である。記・紀・の上で九州の『倭』と本州の『大倭』とは嚴重に區別すべきで、この神を大和國の地元の神と考へて來たのは大きい誤りである。『倭』は筑・豐・の總稱、後に轉じて『九州』のこととなつた。『大倭』は九州の『倭』に對して命名された第二の日高見である。しかるに崇神天皇の御宇に至り、疫病の流行その他から漸く畏敬の念（宗教心）が加はり、現人と殿を同じくし、床を共にして奉祀するは畏多

いとの觀念から、天照大御神の御靈には皇女・豐鍬入姫命が齋宮（御杖代）となり、豐受姫神には淳名城入姫命が齋宮となつて宮中を出でさせ、天照大御神の御靈は大和の笠縫に、倭大國魂神は大和の市磯に、それぞれ神籬を立て、聖域を定めて一旦その假宮に鎭まらせた後、兩柱ともに大和を出でて、丹波國吉佐宮に遷御あり、こゝには相當永い間並び駐らせたるものゝやうに考へられる。しかるにその後、天照大御神の御靈には、大和國に還御あり、同國伊豆の加志本宮に鎭座遊ばされたが、こゝも御意に召さずとあつて、それから、しきりと齋宮に御託宣があり、次の二十五箇所（四より二十八に至る）を轉々御遷幸遊ばされたのであつた。

（一）大和笠縫邑（磯城郡三輪附近）
（二）丹波吉佐宮（丹波國與謝郡吉津村、一說には同郡府中村）
（三）大和伊豆加志本宮（磯城郡初瀨村）
（四）紀伊奈久佐濱宮（名草郡紀三井寺村毛見浦）
（五）吉備名方濱宮（備前國御津郡濱野村）
（六）大和彌和乃御室嶺上宮（官幣大社大神神社所在の山上）

以上は豐鍬入姫命の供奉し奉れる所

（七）大和宇多秋宮（宇陀郡宇陀町の東方秋山、一說には同郡榛原町）
（八）大和宇多佐々波宮（宇陀郡篠幡庄御杖村、一說には同郡榛原町）
（九）伊賀隱市守宮（名張郡下比奈知村）
（一〇）伊賀穴穗宮（伊賀郡上神戸村）
（一一）伊賀敢都美惠宮（阿拜郡上拓植村）
（一二）近江甲可日雲宮（甲賀郡信樂鄕多羅尾村、一說に同郡三雲村）
（一三）近江坂田宮（坂田郡法性寺村宇賀野）
（一四）美濃伊久良河宮（大野郡井倉村）
（一五）尾張中島宮（中島郡神戸村大字本神戸）
（一六）三河渥美宮（三河國渥美郡）
（一七）遠江濱名宮（遠江國濱名郡）
（一八）伊勢野代宮（桑名郡野代村）
（一九）伊勢忍山宮（鈴鹿郡神戸鄕龜山の內野村）
（二〇）伊勢阿佐加藤方片樋宮（一志郡大阿坂村）

（二一）伊勢飯野高宮（飯野郡神山村大字山添、一説には飯高郡神戸郷下村）
（二二）伊勢佐々牟江宮（多氣郡大淀村）
（二三）伊勢伊蘇宮（度會郡磯村）
（二四）伊勢瀧原宮（度會郡瀧原村大字野後）
（二五）志摩多古志宮（多古志宮は志摩とあれど、後に伊勢國度會郡の域内となる）
（二六）志摩宇久良宮（後に度會郡の地）
（二七）伊勢宇治家田田上宮（度會郡五十鈴川の下流、楠部村の西にあり）
（二八）伊勢奈尾之根宮（今の内宮の正北十數町中村の東、俗稱皇女ケ森）
（二九）伊勢五十鈴川上宮（内宮）

かくて皇祖の御靈には、最後に御遷幸あらせた伊勢五十鈴川上宮が、いたく御意にかなひ、こに永く御鎭座遊ばされることゝなつた。その時の御託宣その他は、前に惟神道の根元に關して述べたくだりにくはしく擧げて置いた。（本書第六七―七一ページ參照）初めて宮中を出で、一旦大和國笠縫宮に駐まらせてから八十九箇年間に十二箇國二十九回の御遷座である。しかるに、豐受姫神の御魂は丹波國吉佐宮に鎭座ましましたまま、遷御の御事なく、雄略天皇の御宇に至り、時の齋宮倭姫命に神がかりがあつて、伊勢國に召されるまで、凡そ五百年の久しき吉佐宮に駐まらせた。豐受姫神の御魂が、かくも永く吉佐宮に駐まらせたのは、この國が古代豐之國の植民地で、神武天皇の御東遷以後は、曾て豐之國が高千穗宮の廻廊地帶であつたと同じやうに大和國の廻廊地帶を成して居たからに相違ない。但し、吉佐宮が今のどこの地に當るかについては、例によつて地元の丹波地方にその本家爭ひが絶えない。すなはち、古史にいはゆる『吉佐宮』が與謝郡吉津村文珠の地であるか、それとも府中村籠神社の地であるか、それとも丹波國と丹後國との國境なる川森の地であるかについては、まだ決定を見るに至つて居ないのであるが、兎に角、現に伊勢の外宮として齋祀されて居る外宮が、崇神天皇の御宇から雄略天皇の御宇に至る約五百年の久しき、丹波國に駐まり在したことは疑ひもなき事實である。

式内社三千百三十二座の整然たる序列

日本全國津々浦々に奉齋されて居る大・小・の神社は、醍醐天皇の延長五年（西紀九二七年）を以て撰修された『延喜式』卷九及び卷十の兩卷を以て式内・式外・の二つの社格に分たれた。この延喜式による神社の序列は、明治の盛世に及び新しい神社の追齋と、社格の昇敍とにより、大に

その面目を改めて居るのであるが、日本建國の論功行賞そのものである全國各社の序列は、先づ延喜式で定まつたといつてよい。今、延喜式による全國各社の序列を見るに式內社の中に數へられるものが宮中・京中・五畿內・東海・(以上神名帳上)東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海・(以上神名帳下)を通じて二千八百六十一社(三千百三十二座)の多きに上つて居る。式內社といふのは、毎年の祈年祭に、官府(神祇官)から官幣、國府(國司)から國幣の奠に預る社格をいふのである。その際、官幣を座別に案上に置きて祀られるものを大社といひ、同じく官幣を案下に置きて祀られるものを小社と稱へる。すなはち大社四百九十二座、小社二千六百四十座を數へる。大社四百九十二座のうち、三百四座は祈年祭(毎年二月四日)月次祭(毎年六月十一日・十二月十一日・兩度)新嘗祭(毎年十一月中卯)に際し、官幣を案上に置きて祀られ、そのうち七十一座は相嘗祭(毎年十一月上卯)の奉幣にも預ることになつて居る。大社のうち、殘る百八十八座は祈年祭の國幣に預るものである。又、小社二千六百四十座のうち、四百三十三座は祈年祭に際し、案下の官幣に預るものであり、二千二百七座は祈年祭の國幣に預るものである。

(註記)祈年祭が毎年二月四日と定められたのは天武天皇の四年二月十日、それ以前は『仲春』の行事であつた。相嘗祭とは、毎年十一月上卯の日、新稻を以て釀した酒を奉る式、この奠に預るもの畿內にて六十七座、紀伊國日ノ御前の神四座、合計七十一座を數へる。新嘗祭とは毎年十一月の卯の日新稻を奉る式である。

かやうに全國津々浦々の神社が、その座別にそれ〴〵の格式を定められて居ることは誰でもよく知つて居ることではあるが、さて何故に各社に式內・式外・の別が生じ、式內各社に大社・小社・の別が生じたかといふことについては、たゞ『延喜式』すなはち『神名帳』を勉强したゞけではよく分らぬ。この神社の格式と、それに伴ふ排列とは、全く日本肇國の歷史に基くことであつて、敬神・崇祖・といふことがやかましくいはれる今日でも、畢竟、肇國の歷史が明かでないと全國の各社・各座・に對して國民をして心からなる崇敬の情と感謝の念とを捧げしめることは出來難いと考へる。一億國民が傳統的に持つ敬神崇祖の念をして、いよ〴〵出でて、いよ〴〵盛んならしめようとすれば、何よりも先づ肇國の歷史すなはち國體の由つて來る事實について知らしめることが、肝要である。

全國の式內社二千八百六十一社のうち、日本肇國の歷史と最も關係の深いものを三つ擧げることが出來る。その二つは、伊勢國度會郡五十鈴川のほとりに齋き祀られて居る內宮・外宮・の兩大廟である。他の一つは、出雲國簸川郡杵築鄉に齋き祀られて居る出雲大社である。この三つの大

社を根本として、二千八百六十一社（三千百三十二座）の神々が、日本肇國の皇謨を翼賛し奉つた功績に準じ、秩序整然と排列せられ、それが國民崇敬の的となつて搖ぎなき國體の基礎を形造つて居るのである。伊勢に齋き祀られて居る兩大廟のうち、內宮は申すまでもなくわれら日本民族の中核をなす天孫民種の太祖・天照大御神を祀り奉つたものである。

文化は北方に、資源は南方に

わが伊勢大廟の構成は、國體の由つて來る建國の歷史を如實に物語るものであると同時に、われわれ一億國民に對して、國家の進むべき針路を永劫の未來に向つて宣揚遊ばされるものと申し奉るべきである。すなはち、日本民族の構成はアジアの北種である天孫民種の血統とその溫・寒・帶文化とを中核とし、これに南方アジア大陸の諸民種竝びに太平洋上大小無數の島々を故鄉とする大洋系諸民種の血統と文化とを外殼として渾成した神代以來の全體國家であつて、醍醐天皇の延長五年、『延喜式』を以て定められた伊勢兩大廟竝びに出雲大社を中心とする全國三千三百有餘の大小式內社の序列は、建國の大業に參與した神々に對する昭々たる論功行賞の大典と拜し奉つてよろしいのである。まことに畏れ多きことであるが、わが皇室に於かせられては、崇神天皇の御宇・皇女を以て齋宮とし、神人仲媒の聖職を典掌せさせることに御治定相成つてから、上御一人は絕えて兩大廟に御親拜の御ことなく、明治の聖代に及んだのであるが、明治天皇の御宇に及び、更めて齋宮群行の御儀が止むと同時に、御親拜の大典が起り、その御親拜の御儀がある每に、必ず外宮先拜の畏しとも畏き大御心を拜し奉るのである。

かやうな天空海濶、何ものをも包容感孚せずには置かぬ御仁慈の程を拜し奉るにつけても、われわれ一億國民が今日に處して、いはゆる東亞共益圈の步を南方大陸と南方洋上とに向つて進むるに當り、何を以てその理念とし、何を以てその規範とすべきかは、神宮奉齋の大典の上に、炳乎として明かに宣示されて居るのである。われ〳〵は、われ〳〵の國家が北方アジア大陸を故鄉とする溫・寒・帶人の血統と文化と資源とを中核とし、これに南方アジア大陸及び太平洋諸島から吸收された凡ゆる血統と文化とを外殼として成立した渾一民族であり、太初以來の全體國家であるといふことを一日も忘れてはならぬ。われ〳〵の精神を涵養し、計畫を立てる根據は、飽くまでもこれを北方溫・寒・帶地域に確保しなければならぬ。たゞわれ〳〵は、われ〳〵の享有する精神的竝びに物質的天惠を南方幾億民人の上に均霑せしめんとする東亞大共益圈建設の聖業に當り、伊勢兩大廟の構成と、その大典との上に現はれて居る信賞必罰の理法と、禮讓綏遠の德とを

以て、自肅自戒の範とし、以て世界幾十億人類の瞻仰をこの渾一民族の上に集中せしむるの努力を怠つてはならぬ。

第二章　漢民族の集團的包容並にその主要産業の攝取

世界を市場とした支那の古代絹織物工業

次に天照大御神の御靈が、伊勢國五十鈴の川上に鎭もりましてから約五百年の後、時は雄略天皇の御卽位二十二年といふに、何故豐受姫神の御靈が、皇祖大御神の神誥により、丹波國與謝郡魚井原から、御側近く召寄せられ、外宮として並び齋かれるに至つたかについて考へて見る必要がある。

こゝに雄略天皇と申上げ奉るはそも〳〵如何なるみかどにて在したか。又、雄略天皇の御宇二十三年間は、わが國史上そも〳〵如何なる時代であつたか。

神功皇后の御雄圖により、三韓がわが國に服屬してからは、支那の文化が半嶋を通じて滔々とわが國民生活の上に影響を始めた。衣・食・住・を始め百般の生活樣式はもちろんであるが、その最も著大であつたものは、支那の文教の渡來、インドの佛教の傳播等であつた。しかしそれよりも

大きかつたのは、古代支那を世界第一の强國として、又開明國として發展させた絹織物工業が、日本に輸入され始めたことであつた。

何人も知る如く支那はその中原最初の統一者であつた黄帝の時代から、周室の時代にかけ、世界のどこの國にも見られない立派な文明の光華を發揚して居た。古代支那がどうして世界に率先してそんなに早く開けたかといへば、そこに世界の他の部分に比し、天然條件の惠まれたものの多かつたことはいふまでもないが、當時世界の驚異そのものであつた精巧な絹織物工業の發達がたしかにその最も大きい原因の一つであつたことは、最近に至り、漸く一般の認めるところとなつて來た。支那の繭絲業は周代すでに相當の域に達して居たのであるが、後漢の頃に至ると、すでにあや入りの驚くべき精巧なものが織出されて居た。支那の絹織物商人はこの絹を携へて、駱駝に乘り、甘肅省の邊から世界の屋根といはれるゴビの沙漠に出で、天山南路を經て、パミイル高原・トルキスタン・アフガニスタン・と行き、裏海を横斷して、その頃黑海の東海岸に開かれた大市場に於いてこれをアラビアに賣り、エヂプトに賣り、ローマに賣つたのであつた。古代インドを驚かせた支那の絹布は、前記の隊商がアフガニスタンを通過する時、そこに待ちうけたインド商人の手に賣渡されたものだ。さてこの絹といふものが、何から出來るかといふことは、ちやうど群盲が象を評するやうに、當時エウロツパの學者達が額を集め、智慧袋をしぼつて考へても分らなかつたものだ。

古代支那が非常な勢で發展したのは、たしかにこの絹織物工業による繁榮の結果であつた。しかるに日本は何の仕合せか、支那から世界の有らゆる國土、有らゆる民族の驚異となつて居た絹織物工業の祕密を取入れることが出來たのであつた。世界で最も古く養蠶製絲の事を知つて居たのが、支那の中原に占據した先住民族の一である苗族であつたことは、前に述べて置いた通りだ。この苗族が、羅々・モンクメール・サカイ・等の南方諸種族に打交つて天孫御降臨以前、すでにわが國に渡來蕃衍し、總括して大わだつみ族とか、常世國人とか呼ばれて居たことは、前に述べて置いた通りだ。この苗族こそ、わが國に於ける養蠶製絲業の祖であつたが、支那に於いても同樣漢族に養蠶製絲の業を傳へたのはこの苗族であつた。しかし、それはまだ繭を口の中に含んで、絲を引出すといつたやうな、極めて幼稚な紡績法であつて、絹織物といふところまでは行つて居なかつたやうに考へられる。しかるに仁德天皇の頃から、雄略天皇の頃にかけて、日本は漢民族をその國民の新しい構成分子として迎へ、こゝに始めて周代以降、舊世界のあらゆる民族を驚嘆させ、且つ、羨望させて來た、精巧な絹織物の製法を、日本の主要産業として取入れることが出來

たのであつた。

五胡の亂が支那の古代文化に及ぼした影響

現にわが日本は紡績を主要産業として立つて居るものであるが、この紡績工業が日本に興つた爲に、わが日本の國運が驚くべき長足の進歩を遂げたことは、苟も明治・大正・昭和・三代の産業史に何ほどかの興味を持つた人であれば、恐らく異議のないところであらう。周代以降、支那には精巧な絹織物の熟練工を澤山に抱へて居る大豪族があつたやうに考へられる。この制度がどういふものであつたかに就いては、まだ日本にこれを研究した人がないやうだ。或はフランスのゴブラン織――タペストリイ工業に似たやうな、大家族組織のものであつたであらうか、著者はまだ何等徵すべき文獻のあるのを知らぬのであるが、いづれにしても古代支那はこの精巧なる絹織物工業によつて駸々たる發展を遂げ、秦朝の頃までは、めき〳〵とその進歩の跡が顯ひ知られるのだ。産業はまことに民族の興隆する元氣の根源である。かやうな基礎的な産業が支那にある間は支那の文化は不斷に成長し、發展して止まなかつた。それが漢・楚・戰以來、あまり內輪喧嘩にばかり墮して、三國の攻伐となり、魏・晉・の下尅上騷動となり、果ては五胡の亂となつて、世道人心が全く地を拂つて了つた。『竹林の七賢』のやうな學者は山林にかくれて淸談に耽り、文人墨客も『文選』の詩文に盛られて居るやうな現世に對する絕望と悲痛の情とを舒べて纔にその鬱懷をやるといふ有樣で、曾て孔子によつて唱道されたやうな、經國濟世のいはゆる實學は全く滅びてしまつたのであつた。晉末の詩人陶淵明が『武陵桃原』のユウトピアを描き、破壞と殺戮と簒奪と亂倫との外には何もない世相にあいそをつかしきつて居ることは誰でもよく知つて居ることだ。國土が野蠻人の爲に蹂躙される段となつて、最も甚しく殘賊されるものは、その國の美術・工藝・及び主要産業である。支那の絹織物工業といふものは、この五胡の亂に及んでめちや〳〵になつてしまつたのだ。著者の手許にさういふ確かな文獻があつていふわけではないが、それは支那に於ける各種工藝人の大集團が續々海を渡つて朝鮮に逃げて來たことによつても知られるし、日本からしかるべきものが迎へに行けば、かれらが喜んで日本に歸化して來たことによつても察せられる。かくいへばとて、著者は魏の末から五胡の亂あたりにかけて、支那の絹織物工業が完全に滅びてしまつたといひ切るわけではない。絹織物工業はその後も支那にあつた。しかし、西洋の船が東洋に姿を現はすやうになると、日本が絹の國として傳へられ、東洋の事情に暗い西洋人は、現在でも日本に行けば、どんな貧乏人までが、お蠶ぐるみで暮して居るやうな誤解を抱いて

居ることは、ちやうどイギリスが、東洋人の間にビイフステーキの國として傳へられ、ロンドンに行けば、どんなルンペンまでも、ビイフステーキをたべて居るやうに誤解されて居るのとよく似て居る。

『シナ』の語源は秦か絹か

『支那』といふ國名の起りについては、現に、わが國でも種々の說が行はれて居る。著者としては、後漢の末、すでにインドネシア方面から廣東・泉州・方面に進出して、そこに有力な植民地を建設して居たイラン人（セム人）が秦の噂をきいてその地方を呼んだのに始まるとする說にくみしたい。成るほど『シン』の語尾が變化をして『シナ』となることは、支那と同じ時代に榮えたパレスチンがパレスチナとなり、グリイークがギリシアとなり、アラブがアラビアとなる等のことから推して、一應も二應も肯かれる。しかし、絹織物は支那が世界の本家で、東西どの國の語をもつて來て考へても、『絹』はサ・シ・ス・セ・ソ・の音以外には出ぬ。現に本家の支那でも絹製品は總てサ・シ・ス・セ・ソ・の音で表現せられて居る。紗・絲・素・絁・繒・がそれである。さすれば『シナ』を『シイナ』すなはち『絹の國』から來たとする或る一部の人々の說も相當の席を與へられてよい有力な解釋の一つであるには相違ない。『秦』か『絹』か、その語源はいづれにあるにしても、秦・漢・時代の支那が『絹の國』として、世界殊に西洋諸國に喧傳せられて居たことは確かだ。しかるにそれが、十五世紀以降、ガレオン船が喜望峰をめぐつて東洋に帆影を現はすやうになつてからは、當の西洋人でさへ、支那を『絹の國』とはいはず、かへつて日本が、『絹の國』として西洋に喧傳せられるやうになつた。

それなら日本が支那のお株を奪つて『絹の國』を代表するやうになつた起りは、いつ頃からかといへば、それは明かに雄略天皇の頃からである。魏の末から五胡の亂あたりにかけて、支那の絹工業がどんなに大きい打擊をうけたかといふことは、この一事に徵してもよく分ると思ふ。

それから今一つ支那の絹織物の最も精巧を以て稱せられ、世界に需要の颶風を捲起したのが、五胡の亂以前であつたことは、日本に唐物とか、宋學とか、明錢とかいふことばがあつて、可なり弘通して居るのに、ひとり絹織物だけを吳服といつて居るのに徵しても知られる。吳は三國時代、孫堅竝にその子孫・權の據つたところで、今の江蘇・浙江・から西へ、揚子江に沿ひ、南京（建業）・漢口（夏口）・荊州（江陵）・等南北兩岸の要地を包括した廣汎の地域を占めて居た。今の蘇州は春秋以來吳の都したところで、前來述べて來た支那の絹織物工業はこの邊が中心地であつたらし

い。應神天皇の即位三十七年、歸化人・阿知使主父子が勅命を奉じて、絹織物の熟練工を得る爲に、高句麗王の助力を得て吳國に赴いたとあるのは、蘇州地方がその目的地であつたに相違あるまい。

秦の融通王の子孫、秦氏となる

漢民族の血液が、日本民族の主要な構成分子の一として滔々と流込んで來たのは、應神天皇の御宇以降のことである。されば日本民族の間には、漢民族包容と同時に、周代以降舊世界の驚異であつた支那の絹織物工業が、非常な勢で發達して居る。初めに百濟を介して日本に歸化を申込んで來たのが、秦の孝武王の裔と稱する融通王（日本書紀には弓月君に作る）であつた。時は應神天皇の御即位十四年、この融通王なるものが、その自ら造るところの絹布並に寶物數種を朝廷に獻じ、百二十縣の民を率ゐて日本に歸化すべきを奏請に及んだ。朝廷に於いては直にこれを御嘉納あらせ、新羅王の支吾を排する爲、相當有力な軍隊をかの地に發遣して融通王及びその率ゆる百二十縣の民を日本に收容し、大和の朝津間の腋上の地に置いて、先づ支那の工藝を傳へさせたとある。

仁德天皇の御宇に至ると、前に歸化した支那人を全國諸郡に配布して、養蠶・織布・の業を御勸奬遊ばされることとなつたので、支那式の絹織物工業は幾くもなく全國に興起し、各地から上納するところの絹織物が、やがて官庫に充滿して、朝廷はこゝに前代未聞の殷富を致された。天皇叡感斜ならず、融通王の子孫に『波多公』といふ姓を賜つて、その功績を表彰遊ばされた。波多は『肌』で、絹布の肌ざはりのよいことを仰出されたものであつた。しかも、融通王が秦の孝武王の後裔とあるところから、世人が『秦』字を『はだ』と訓ずることになり、ここに日本に秦姓が起つたのであつた。

太秦姓の起源

降つて雄略天皇の御宇に至ると、朝廷から豫て全國各郡に御配置になつた絹織物の熟練歸化工の子孫が、追々地方豪族の爲に横領せられ、その戸口は初めの十分の一にも足らぬものとなつてしまつた。この事情を秦の酒公が朝廷に訴へて出たので、天皇も始めて地方の事情を審かにせられ、大隅から究竟の隼人（阿多氏）を召集せさせ、これを將軍に附して各道に派遣し、豪族の私民を點檢させたのであつた。この大英斷によつて再び朝廷の御料として設定された秦氏の部民が、九十二部・一萬八千六百七十人とある。すなはち天皇にはこれらの部民の管理を擧げて酒公に

御委任になり、專ら養蠶・織布・の業にいそしませることと遊ばされたのであつた。

かくて朝廷は幾もなく、絹織物工業の盛大を恢宏遊ばされ、やがてこれらの部民によつて造出される織布が、殿前に堆積して山の如きをみそなはせ、『うづまさ』といふ寵名を酒公に賜はつた。太秦は『うづまさ』に漢字を充用しただけのもので、意味は絹布のうづ高く積上げられた形をいつたものである。

漢人・阿知使主の子孫、漢氏となる

さてしからば上來述べた如くにして、日本に歸化した漢人（主として絹織物の熟練工）は融通王の率ゆる一團だけであつたかといふに、決してさうではなかつた。秦末の兵亂から五胡の騷動にかけ、易姓革命の起るたびに戰禍を避けて、朝鮮に於ける漢民族の植民地であつた帶方郡や樂浪郡に遁避して來た支那人は、日本の國風・人情・を聞き、聖主の德を慕つて續々集團的に日本に歸化し、日本民族の血統に漢民族の血を交へたのである。例へば應神天皇の二十年には、後漢の靈帝の後と稱する阿知使主がその子・都加使主とともに十七縣の部民を率ゐて日本に歸化して居る。この阿知使主の子孫は雄略天皇の時に至り『倭漢直』といふ姓を賜つた。『あや』は日本の語で色と模樣、すなはち『文彩』を意味し、この一派が絹織物に文彩を織出す術を傳へたことが察せられる。『漢』は『秦』氏と區別する爲の充用で『漢』字に『あや』の意味があるわけではない。この文彩があまり美事であつたからであらう。應神天皇の三十七年には、この阿知使主父子を吳國に派して更に、縫工の技に秀でた女人を日本に召寄せさせた。阿知使主父子は、高句麗の助力を得て吳國に赴き、天皇の四十一年二月、兄媛・弟媛・吳織・穴織・四人のすぐれた女工を得て日本に歸化した。これは正史の記すところであるが、應神天皇の御宇は、日本が支那の絹織物工業を取容れてまだ間もない時代であるから、刺繍・文飾・の熟練工を迎へるといふことは少し早過ぎるやうに思はれる。恐らく雄略天皇の御宇、身狹村主・青等を吳國に遣はされたことと事實が混淆して居るのでないか。この疑問はいづれにしても、この頃から日本に文彩を現はした精巧な絹織物の技術が大に興ることとなつた。それは明治の末期から昭和の今日にかけて、ちやうどわが日本がイギリスの紡績工業をとつたやうに、應神天皇から仁德天皇を經て、雄略天皇に至る間に、日本は舊世界の驚嘆そのものであつた古代支那の絹織物工業をとつてしまつたのであつた。

漢民族包容の宏遠な御規模

中にも雄略天皇の御規模の大きさといふものは、非常なもので、應神天皇以來、歴代の聖主が日本民族の構成分子として包容遊ばされた漢民族を同化悦服させる爲には、度量の狹い器宇の小さいことはいつて居られない。高天原で保食神と呼ばれて居た豐之國の支配者と密接の關係のある豐受姫神の御靈が、丹波國與謝郡魚井原に祀られて居たのを遷座して、伊勢國なる皇太神宮と竝びいつかせるといふ大英斷に出でさせた。それは垂仁天皇の御宇に天照大御神の御社が、伊勢國五十鈴川のほとりに定まつて、五百年を經過した後のことである。雄略天皇は丹波國與謝郡魚井原から絹の神様、米の神様、これを漢民族招撫の必要上、外宮として、皇太神宮の脇に御遷しになつたのである。

こゝらがわが日本精神のよいところで、雄略天皇の御規模といふものは、實に、わが日本精神――大和魂の光華そのものであると申し奉るべきだ。雄略天皇の御靈は、われら昭和の國民にこの支那事變の結末をどうつけるべきであるか、四億の漢民族を如何に教へ導いて行くべきであるかを、內宮・外宮・併祀の素晴らしい御規模によつてちやんと御垂示遊ばされて在すのだ。

これより先、垂仁天皇の二十五年十二月、天皇が諸臣に御諮議遊ばされ、天照大御神の御靈を豐鍬入姫命の御手から召され、更めてこれを倭姫命の御手に託し、伊勢國山田なる五十鈴川のほとりを相して齋宮を起させたことは、やがてわれ〳〵が當年支那の變亂に隨伴して全アジア大陸に瀰漫して居た不安と動搖とに對する國策の一端を拜察し奉るに十分なるものがあるのだ。

常世の波のしき波寄する國

倭姫命は天皇の御女で、御母は狹穗姫の死後皇后に立つた丹波道主の女・日葉酢媛である。倭姫命は大御神鎭座の地を求めて近江（莵田の笹幡）に入り、美濃を巡り、伊勢に入つて神託を受けた。曰く『是の神風の伊勢の國は、卽ち常世の浪の重浪よする國なり、傍國の可怜國なり。是の國に居らんと欲す』と。すなはち神託に隨ひ、祠を伊勢に立て、齊宮を五十鈴川のほとりに興し、大鹿島命を以て祭主とされた。これが伊勢神宮の起りである。神託に『常世の浪のしき浪よする國』とあるは、日本民種と外國との關係を暗示したもので、深く考ふべきである。

崇神天皇の末年から、垂仁天皇の初年にかけては、支那の形勢の變化につれて、朝鮮にも政治地圖の上に著しい變動が生じ、三韓の分立を見るに至つて居る。又、垂仁天皇の中頃に至るといよ〳〵前漢が亡びて後漢が起り、後漢の勢の强盛につれ、三韓を擧げて支那の屬國となつた形があつた。從つて天孫・瓊々杵尊から、神武天皇に至る四代の御苦心によつて、あらまし皇化に服

した南方の隼人、北方の倭人間にも著しい動搖の色があり、國家は内憂外患一時に到る、いはゆる超非常時色を濃厚にして來て居た。崇神天皇の末年から、垂仁天皇の御代にかけての歴史は、すべてを『非常時』といふ眼で見直さなければならぬのだ。

今、こゝに思ひをひそめて前記神託の啓示するところを察するに『常世の波』とあるのは、本書の第二篇、大わだつみ族のくだりではくはしく述べて置いた南支那から、アンナン・トンキン・ビルマ・カムボヂア・にわたる一帶の地、すなはち常春の國・常夏の國・から打ちよする波タイ・の意味で、今日のことばを以て現はせば、南方から押よせて來る黒潮に洗はれる國といふことにあたる。又、傍國の可怜國といふのは、海に沿つて片寄り、海の内外の形勢を視るに便宜のよい國といふ意味だ。これで大和朝廷が如何に南方民族の綏撫統一に御苦心遊ばされておはしたかがよく分る。著者のこの言が、決して著者一人の勝手な解釋でないことは、歴代の朝廷が、毎年の祀年祭に際し、大神の御前に奉るのりとによつてこれを證することが出來る。

辭別けて、伊勢にます、天照大御神の大前に曰さく、皇太御神の見霽します四方つ國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜坐向伏限り、青海原は、棹柁干さず、舟の艫の至り留る極み、大海の原に、舟滿ちつゞけて、陸より往く道は荷の緒結ひ堅めて、磐根・木根・履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立ちつゞけて、狹國は廣く峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打ち掛けて引き寄することの如く、皇太御神の寄し奉らば、云々。

これでわが皇室の民族統一の爲に致された努力のどんなに深甚なるものであり、その規模計畫のどんなに宏遠なるものであつたかを察知し奉るべきである。

第三章　日本民族必勝の史的妥當性

日本の歴史には歐洲のいはゆる『中世紀』なし

世界に國も多いが、建國以來未だ曾て一度も外國の侵犯を受けたことのない國といつては、日本を措いて他にその例がない。

日本は建國以來未だ曾て一度も外國の侵犯を受けたことがないばかりでなく、大陸的經濟ブロックの中に捲込まれたことさへないのだ。エウロツパに於いても、アジアに於いても、各國家はすべて『中世紀』と稱へる暗い冷めたい夜陰の時代を經て、近世の初めに至り、自主經濟・自主外交・に基調する自由な輝かしい國家生活の黎明を東の空に仰いで居る。われ〳〵が歴史の上で『中世紀』と呼ぶ時代は、アジアに於いても、エウロツパに於いても、封建制度に基調する一個の大陸的經濟ブロックであつたことに變りはない。その大陸的經濟ブロックに中樞勢力となつたものが、エウロツパに於いてはローマ法王であり、アジアに於いては黄河・揚子江・の流域に治を置いたいはゆる中華政權であつた。

エウロツパに於けるローマ法王廳といひ、アジアに於ける中華政府といひ、それ〳〵の大陸的國家ブロックの上に、經濟的にも、政治的にも、壓倒的の威力を以て臨んだものであつて、日本の如く政治的にも、外交的にも、その大陸的封建ブロックの外に超然として自主國家の體面と實質とを維持し得て、近代の初めに至つた國は世界に全くその例がなかつたこと確實だ。たとへばこれをエウロツパ大陸に見るに、イギリスは、そのドバア海峽を隔てゝエウロツパ大陸と相對する地政學的關係に於いて日本が朝鮮海峽を隔てゝアジア大陸と相對する地政學的關係と全くその揆を一にして居るのであるが、イギリスは、日本が長き中世紀の夜を通じ、中華政權に對して政治的にも、經濟的にも、自主國家としての體面と實質とを保ち得たやうに、ローマ法王廳に對して自主國家としての體面と實質とを保つことが出來なかつた。すなはち、中世紀エウロツパに於けるローマ法王を中樞勢力とする大陸的封建ブロックの威力は、海峽を越えてイギリスの上にまでも伸び、完全にこれを政治的・經濟的・ブロックの中に包括して居たわけであつた。すなはち、わが日本にも歴史上、『中世紀』と呼ばるべき時代はあり、中華政權はその經濟的支配の手を差伸べて、日本をその大陸的封建ブロックの中に包括するに垂んとして居た事實はあるのであるが、

日本の場合に於いては、斷じて兵力による中華政權の征服を受けた事實がなく、隨つてその經濟的支配といつても、彼・我・の國交もしくは貿易關係の上に於ける自然の成行に過ぎぬのであつて、その關係は極めて緩慢且つ自由なものであつた。切言すれば、日本の歷史に限つて歐洲及びアジアの他の國家が『中世紀』と呼んで居るやうな時代を經由しなかつたのであつた。これは、どんな自由主義學徒がどんなあまのじやくを使ひて著者の史觀を歪曲しようとしても、事實はこれをどうすることも出來ぬ筈だ。中世紀エウロツパの諸國家には、ローマ法王廳から派遣された監督官が各王室の中に近侍としてすごい眼を光らせて居り、スパイの役目もすれば、第五陣列の役割も果して居たものだ。中世紀エウロツパの歷史はスパイの歷史であつたといふことが決して過言でない。イギリスの驕兵を擊退して、フランスを累卵の危殆から救つたジャンヌ・ダアクを焙殺したものは、ローマ法王の第五陣列ともいふべきカトリツクの坊さん達であつた。女王・エリザベスの側臣中にも、常にローマ法王のスパイが附纏つて居て、イギリスの機密を、イスパニア王・フリプ二世に牒知して居た。日本にはかうした意味での中世紀といふものはなかつた筈だ。

日本は生え抜きの全體主義國家だ

上述の如く、日本の歷史の上に嚴密な意味で『中世紀』と呼ばるべき時代がなかつたといふことは、わが國體を正解する上に最も重要な事實の一端である。それにも拘らず、帝國大學で經濟史といふと、必ず德川時代以降に限ることとして取扱つて居るといふことを聞くのは、何といふ意氣地のない、又、不見識のことか。南方で唐・宋・支那との經濟關係、北方で渤海國との通商關係を除いて、日本の中世史に何が殘るのであらうか。日本が長き中世紀の夜を通じて、曾て完全に中華政權の封建的支配を受けなかつたといふことは、やがてこの國が生れながらの全體主義國家であつたといふことを物語る所以のものである。全體主義國家といふことを、近頃人々の多くは、ヒツトラアやムツソリーニが、英・米・佛・の自由主義的國家理念に對抗して打建てた新理論のやうに思惟して居るやうだが、これは途方もない考違ひだ。自由主義國家といひ、また全體主義國家といふのは、一にその國家の成立ちと發展とに基くことであつて、理論もしくは理念でなく、事實もしくは歷史であるのだ。英・米・佛・三大先進國家が生え抜きの自由主義國家であれば、日本は生え抜きの全體主義國家だ。現にわが同盟國家であるドイツにしても、イタリアにしても、英・米・佛・三大先進國家に較べると、何程か日本の國體に近似したものがないとはいへぬ。だが、その生え抜きの全體主義國家である點で、斷然日本と同じものとはいへぬ。これを歷史に徵して

も、ドイツ・イタリア・共に都市國家の時代を經由し、その近代的統一國家としての結成を完了する前までは、いづれも聯邦國家であつたに相違ない。

もちろん、ドイツの聯邦國家制といひ、イタリアの都市國家制といひ、必ずしもドイツ民族・イタリア民族・そのものの本來の精神でないといふ議論は成立つかも知れぬ。だが問題は、それが本來の民族精神にあつたかなかつたかの點にあるのではなく、要はさうした本來の精神になかつたものを中心勢力から押冠せられたことの事實にあるのだ。これを世界各國の歴史の上に徴して、日本ほど建國の初めから全國民が皇室を中心として結束し、國家といふ觀念に基いて行動して來た國家は、他に類例を見出すことが出來ない。果して然らば、日本民族のこの國家的觀念、いひ換へれば尊王愛國の精神がどこから來て居るかといふことは、たゞこれをお國自慢として振廻すだけであつてはならぬ。この精神の由つて來たるところ、この信念の基調するところ、われ〳〵はこれをしつかりとした道理の上に把握し、牢乎不拔の主義として堅持しなければならぬのだ。

全體主義民族の『祖國愛』と自由主義民族の『社會愛』

全體主義國家といふものと相對峙するところのものに自由主義國家がある。全體主義國家とは、國家・民族・を構成する一切の分子が、中心のある絶對的な力に向つて吸付けられ、それによつてしめ括られて居る國家をいふのであつて、わが日本民族が、天皇と稱へ奉る絶對の御身分を中心として吸付けられ、それによつて固くしめ括られて居るのは、その最も顯著な且つ典型的な實例である。これに對して自由主義國家といふのは、國家を構成する分子個々が生きて活潑に働き、その切磋琢磨によつて生ずる熱、すなはち社會力が國家發展の原動力をなすものをいふのであつて、全體主義國家の場合に於いて日本がその最も顯著な、且つ典型的な國家である如く、自由主義國家の場合に於いては、イギリスがその最も顯著な、且つ典型的な國家である。すなはち、この關係を要約していへば、自由主義國家の場合に於ける國家の發展力は、その國體の基調を成す『社會愛』であり、日本の如き理想的な全體主義國家の場合に於ける國家の發展力は、その國體の基調をなす『尊王愛國の精神』である。

しからば、一方に日本のやうな理想的な全體主義國家が生れ、他の一方にイギリスのやうな典型的な自由主義國家すなはち社會國家が生れたのは何に基因するか。われ〳〵はまづこの根本原因から突止めてかゝることが必要である。

凡そ世界に大をなすほどの國家であれば、その國民の構成分子として、少きも數種、多きは十

數種にも上る民種・民族・の血統を攝取・包容・して成立つて居るのが普通であつて、單一・純粹・の血統からなる國家が成長・發展・して世界に大をなすといふことは、淘汰の上から考へてもあり得ないことのやうに思はれる。さうして國家が少くとも數種、多きは十數種を數ふる民種・民族・の血統を混へて成立する場合、そこに二つの道が分れると思ふ。その第一は、さうして攝取・包容・された數多の民種・民族・が、その血統に於いてほゞ相類似し、その文化に於いてほゞ相匹敵する場合である。その第二は、初めに國民の構成分子として攝取・包容・された民種・民族・の血統に著しい相違があり、隨つてその文化の上に大きい特徴のあつた場合である。

イギリス國民の構成分子とその社會階級制度

これを事實についていへば、イギリス國家の成立ちの如きが前者に屬し、日本國家の成立ちの如きが後者に屬する。イギリスもドバア海峽を隔てゝ大西洋上に孤立する島國であるから、深く詮議だてして行く日になれば、南大西洋方面からメキシコ灣海流に乘つてこの群島に徙遷して來た多くの異なる民種・民族・の血統とそれが持來した文化とを擧げることが出來るかも知れない。しかしながら、一般に知られて居るところによると、太初、この群島の上に蕃衍して居た民種はケルト人といふことになつて居る。ケルト人とすれば、これは正しく白人、すなはちインド・ゲルマンの一派であり、エウロッパ大陸でアルプス山脈とカルパチア山脈との間を、近東方面からフランスの平野、古へのいはゆるガリ地方にかけて蕃衍して居たアルプス種である。ついでイギリスの群島には、エウロッパの南種、すなはちラテン人・イベリア人・の一派が押寄せて來て、ケルト人を征服し、群島を支配した。だが、ラテン人の支配はイギリス群島の國津神であるケルト人の上に、殆どいふに足るほどの血統も文化も殘すことなしに、洪水の去る如く引揚げてしまつた。それが紀元四百十年前のことであつたとされて居る。

ラテン人についでイギリス群島に侵入したのはエウロッパの北種、すなはちチュウトン種（ゲルマン人）に屬するヂュウト人・サクソン人・アングル人・等であつた。これらチュウトン各派のイギリス群島移住は紀元四百四十九年頃から始まり、凡そ二百年がほどの歳月を經る間に七つの王國に分れてそれ〴〵の地方に占據し、激しい存立競爭を續けて居た。ところが、それら七つの王國も、七世紀の初め頃までには三つの王國に統一され、紀元八百二年に至ると、その三つの王國中ウェセックス王（西サクソン王）・エグバルトが三國を統一して、初めてイギリス王國の礎を開いたのであつた。

かやうにしてウェセックス王・エグバルトの覇業が漸く成らうとする頃から、イギリスには更に新しい民種が海峡を越えてこの群島に侵入を始めた。その侵入者の名は、デーン人であつた。エウロツパの北種、すなはちチユウトン人のうち、スカンヂナヴィア半島に居を占めて居たものは、その背が圖抜けて高く、皮膚の色が抜けるやうに白く、髪の毛が金色に波打ち、眼の玉が翡翠のやうに青い、俗に『ブロンド』と呼ばれる種族であつた。ブロンドはまたノースメン（北人）とも呼ばれ、もと今のドイツの北方低地に森林生活を營み、ついでデンマアク・スウエイデン・ノールウエイ・方面に移動してそこに割據して居たものだ。その北人が八世紀から十一世紀にかけてスカンヂナヴィア半島から續々南下し、その一團はドバア海峡を越えてイギリス群島に侵入し、他の一團はフランダア、すなはち現今のベルジュウム・オランダ・の地を經てエウロツパの中原に押出して行つたものだ。エウロツパの中原にはその頃、今のフランスに當るところに西フランク王國があり、今のドイツに當るところに東フランク王國があつた。北人のうち、海峡を越えてイギリスの方に押出して行つたのはデーン人であつた。デーン人のイギリス侵入は八世紀の終る頃で、前に述べたウェセックス王・エグバルトが三國統一の覇圖を完成するに垂んとして居た際として、外寇に對する海邊の防備は全く忘れられて居た。デーン人はその虚に乘じて易々とブリテン島に上陸し、散々にその海岸地方を荒すことが出來た。

ところが、ウェセックス王・エグバルトの孫にアルフレッドと呼ばれた英雄が居た。紀元八百七十一年、アルフレッド王がウェセックス王の位に就くと、今まで負け通しに負けて居つた戰が盛返して、サクソン人の勝目になつて來た。アルフレッドは戰に長けて居たばかりでなく、政治家としても非常に優れた手腕を持つて居た。民業を興し、紀綱を張り、大いに軍備を充實してデーン人に當つた。初めは負けてばかり居たが、アングロ・サクソンに特有の驚くべき粘り強さを發揮して、遂にデーン人に打勝ち、エトモールといふところで、光榮ある和平條約を結ぶことが出來た。

ところが、一方エウロツパの中原地方に押出して行つたノースメンの一團は、ブリテン島で他の一派が遭遇したやうなねばり強い民族の抵抗に遭ふことがなく、ダムを決潰した洪水の如き勢でパリの城下に押寄せ、思ひのまゝにこれを劫掠した。この時の西フランク王はカアル肥帝と呼ばれた暗愚の君であつたために、この由々しき國難に善處することが出來ず、パリが四度までノースメンの包圍を受くるに及んで諸侯が王の怯懦と無能とを憤つて服せず、王國はために四分五裂した。ノースメンはこの内亂に乘じ、セイヌ河の下流に占據してノルマンディ侯國を建設し、

西フランク王-カール三世の承認を得た。それが西紀九百十一年のことであつた。かくしてノルマン人によつて擁立されたノルマンデイ侯は、ユウゴウ-カペーなるものを援けて西フランクの王位に就かせ、實際には自らその政權を把握してエウロツパを支配するの地位に立つた。

エウロツパ大陸にかやうな變化が起りつゝあつた間にイギリスの國情はどうなつて居たかといふに、アルフレッド大王の歿後、ウェセックスにはもう大王の覇業を繼承し、これを發展させて行き得るだけの英主が現はれない。十世紀の末から十一世紀の初めにかけてウェセックス人は再びデーン人の侮りを受けることとなり、紀元千十七年に及ぶとデーンの王-カニュウトが完全にイギリスを征服して、王位に卽くといふ慘めな有樣となつて居た。そこでウェセックス王の嫡流にあたるエドワアドは難を避けて大陸に走り、ノルマンデイ侯によつて纔かにその身を全うすることが出來た。ところが天下廻り持ちとはよくいつたもので、今度はウェセックス王をエウロッパに逐つたデーン王-カニュウトの後に人傑が現はれない。西紀千四十二年に至るとデーンの王統も絶え、デーン人の勢力も自然に衰へてしまつた。さうしてその後にはアングロ-サクソン民族の精根とそのねばり强さとだけが殘ることとなつた。

そこでアングロ-サクソン人は、嘗て大陸に亡命してノルマンデイ侯に身を寄せたエドワアドを迎へて王位に就かせようとした。ところがエドワアドはノルマンデイを去るに臨み、うか〳〵とノルマンデイ侯-ウイリアムに途方もない誓約を與へてしまつた。それはどういふ誓約であつたかといふと、自分の死ん後は必ずノルマンデイ侯にイギリスの王位を讓るといふことであつた。ノルマンデイ侯-ウイリアムは夙に豐饒なイギリスの國土に涎を流して居たものだ。エドワアドから約束の一札を取上げてからはその殂落を今か〳〵と待ちうけて居た。

アングロ-サクソン人は固よりそんな約束のあることは夢にも知らなかつた。エドワアドが死んだので、その重臣-ゴドウインの子-ハロルドといふものを推して王位に卽かせようとしたが、この時遲く、精鋭類なきノルマンデイの軍隊は海峽を越えてイギリスに押寄せて居た。さうしてまた戰爭が始まつた。

血統も文化も殆ど相近似する諸民種の存立競爭から生れる社會國家

逆境に惠まれたものはまことにアングロ-サクソン人といふべきだ。かれらは新王-ハロルドを戴いてノルマンデイ軍と手痛く戰つたが、西紀千六十六年ヘスチングの一戰に敗れてからはもう

その軍を建直す餘力がなく、それから五箇年の後には全くノルマン人のために征服されてしまつた。ノルマンデイ侯-ウイリアムはその時からフランス國王とイギリス國王とを兼ねることとなつた。ウイリアム一世からヘンリイ三世に至る八代、凡そ百五十年が程のイギリスは全くフランスの屬國となつた形であり、國王はすべてフランスに人となり、フランスの教育を受け、フランス語がイギリスの國語として用ひられて居た。

征服者は慈悲も容赦もなく敵の軍卒を屠殺し、人民は老・若・男・女・の別なくその難に遭つた。驕兵の過ぐるところ、村にも里にも財物は一つも餘さず、婦女子は悉くその純潔を保ち得ぬのが通則であつた。アングロ-サクソン人はケルト人に對してそれをした。またアングロ-サクソン人はノルマン人から同じことを仕返された。いはゆるノルマン-コンクエストの後、アングロ-サクソン人は貴きとなく賤しきとなく全く奴隷の境涯に突落されてしまつた。イギリスの全國土はノルマンデイ侯-ウイリアムによつて悉くその諸將・功臣・に分配せられた。

ウイリアムは上述の如くイギリスを一呑みに呑んでしまつた王樣ほどあつて流石に偉いところがあつた。かれは後に及んで、自分を繞る貴族達が勢力を伸し、王の命令に服せぬやうな事態に立到つてはならぬと慮つたから、決して大諸侯をつくらなかつた。またアングロ-サクソン人の中から壯丁を簡び、これを以て國王の軍隊、すなはちナイトを編成した。いふまでもなく豫め諸侯の叛亂に備へるためであつた。

ウイリアム王のかやうな苦心にも拘らず、イギリスにはそれから百五十年ほど經過する間に國王と諸侯、もしくは國王と僧侶との間に由々しき勢力爭ひが生じて來た。さうして國王と諸侯、もしくは國王と僧侶との仲が悪くなつて來ると、一旦農奴の境涯に突落されたアングロ-サクソン人ではあつたが、それが双方から引張り凧にされるやうなことになつて來た。これはアングロ-サクソン人が一度喪失した權利を恢弘する上に絶好の機會であつたことはいふまでもない。アングロ-サクソン人は或は國王と諸侯との爭ひに乘じ、或は國王と僧侶との爭ひに乘じ、巧みに兩者を操つて、歩一歩その生命及び財産に關する權利を恢弘し、都市の商人として、或はナイトとして、徐々にその頭を擡げて來た。これがイギリスに於ける中産階級、すなはちアングロ-サクソン人擡頭の起源である。

以上が現に大英帝國の國民を構成して居る血統的分子の概略である。いまケルト人とラテン人（ローマ人）とを併せてこれを考へるにしても、インド-ゲルマン種と稱へる人類學上の大枝からいへばイギリスの民族的構成分子は、わが日本のそれに比較して、殆ど同日に語ることの出來ぬほ

ど單純なものといつてよい。更にローマ人がケルト人の血統と文化との上に殆んどいふに足るほどの痕跡を留めずして洪水の去る如く引揚げてしまつた事實を考へ、更に北方-スコットランドと西方-アイルランドとに追詰められたケルト人が、アングロ-サクソン人とノルマン人との大英帝國に對し、終始一貫反抗の鋒鋩を收めず、斷末魔の疼痛にのた打ち廻つて居るかれら英國民の悲鳴を空吹く風ときゝ流して居る現狀を考慮の中に入れて考へると、大英帝國の民族的構成分子といふものは、もつとその範圍が狹くなるわけである。すなはち、大英帝國の民族的構成分子は、インド-ゲルマン種といふ人類學上の大枝から分岐したチユウトン人もしくはゲルマン人と呼ばれる更に小さい枝となるわけである。この小さい枝の本質から考へて、或はデーン人といひ、或はアングル人といひ、或はサクソン人といひ、或はノルマン人といひ、血統の流れは種々あつても畢竟するにチユウトン種と呼ばれるエウロツパ北種の一卷に過ぎないこととなる。

以上述べたところによつても明らかである如く、イギリス民族の構成分子は、すでに叛き去つて獨立國を構成して居るアイルランド人（ケルト人）を外にして考へると、その血統に於いても、またその文化に於いても、大同小異のものである。この大同小異の數箇民種がほゞ相匹敵する實力を提げて幾十世紀の久しきに亙り火の出るやうな激しい存立競爭を續けて來たところに生れたものが、イギリス國家の基調をなす『社會愛』である。英・米・佛・三大先進國家の基調をなす自由主義的國家理念が何に由來するかといへば、畢竟するに、血統の相類似し文化の相匹敵する數多の民種・民族・が十數世紀の久しきに亙り、火の出るやうな存立競爭を續けて來たところに生じた『社會愛』以外の何物でもないといふことが出來るのだ。

日本建國の三大主柱神

日本民族が天孫民種をその中核體として攝取吸收した血統と文化との廣汎且つ多種であることは、イギリスと全く正反對である。イギリス民族の血統的構成分子は、前述の如くその範圍が極めて狹く文化の程度もほゞ相似寄つたものであるが、日本民族の血統的・文化的・構成分子は、その範圍頗る廣く、西は滿洲・蒙古・シベリア・及び朝鮮半島全面に亙るウラル-アルタイ系諸種族を包容し、東はアラスカから北米合衆國の西部海岸一帶に亙つて先住したアジア古族、南は赤道以南、南太平洋の上に炒豆を撒き散らしたやうに撒布されて居る大・小・無數の島嶼を故郷とする各種のネグロ及びネグリイト、西南はイラン・イラク・アフリカ大陸・から印度洋を經てアジアの南方大陸及び太平洋諸島の上にまで押出して來て居たセム系・ハム系・及びネグリイト諸種族、更に西

は南支那及び佛領インド支那方面に布置・蕃衍・して居た漢民族をはじめ、苗族・羅々・モン・クメール・マレイ・サカイ等の種族に及び、世界に有りと有る民種・民族・の血統と文化とを渾融同化して居ることが明かである。

すなはちわれら日本民族の血統的構成分子は、これを英・米・佛・三大先進國家のどれと比較しても、その攝取・包容・された血統の多種・多樣・にして、隨つてその將來された文化の複雜多方面なる、たうていこれを同日にして語ることの出來ぬほどのものがあるのだ。しかも、この多種多樣な血統と文化とを渾融同化して渾一民族を作り上げた天孫民種の包容力と消化力との偉大に想ひ到れば、今更の如く驚嘆・崇敬・の念を新たにせずには居られぬのだ。

しかも、この驚くべき包容力と消化力とを具有した天孫民種は、また一面に於いて、嘗て人類によつて具現された、最も美しい仁愛の心の持主であつた。その最も著名な事績として、われわれはこれを、前來述べて來た伊勢大神宮の構成、並に出雲大社の社格の上に具現してをるといふことが出來るのだ。

すなはち天照大御神の御靈を國礎第一の大廟とし、豐受姫神の御靈を國礎第二の大廟とし、押並めて齋きまつるのが、伊勢大神宮の構成である。外宮として齋かれる豐受姫神こそは、高天原時代から皇祖大御神に奉仕し、天孫の御降臨に際しては、宗像三女神を以て御船の水先案内を申上げ、且つ神祖御三代の鴻圖を翼賛し奉つた『おほわだつみ族』の代表神・豐受姫神の御靈が、崇神天皇の御宇まで倭大國魂神の御異名により、押並めて宮中に奉齋されて居たものだ。それが崇神天皇の御宇、豐受姫神の御靈が天照大御神の御靈と共に丹波國吉佐宮に遷御あり、更に約五百年を經て、雄略天皇の御宇に至り皇祖・天照大御神の神誥（しんこく）により、丹波から伊勢國山田原に迎へられ、現に外宮と稱へて皇大神宮と併祀されて居ることは前に詳しく述べて置いた通りだ。畢竟するに、現に伊勢の聖域に併祀されて在する內宮・外宮・の兩廟こそは、神武天皇の御建國以降、崇神天皇に至る御十代の間、長くも上御一人と殿を同くし、床を共にして宮中に奉齋されて居たものであるのだ。

この兩柱の御靈の宮中出御を機會とし、崇神天皇には、別に大物主神（大國主神）の後孫・大田田根子を索め、大和國城上郡なる神淺茅原に於いて、大物主神の爲に盛に奉齋の御儀を執り行はせられた。この際大物主神の御靈が伊勢に併祀されなかつた理由は、出雲讓國の御誓約に基き、すでにその靈廟が立派に出雲國に奉齋されて居り、更めてこれを伊勢に併祀することの必要を思立たせなかつたことがその理由と考へられる。

この赫々業々たる御治績に徴しても明かであるやうに、日本民族の中核體として在す皇室は建國の創業に當つて殊勳のあつた民種・民族・は、凡そその血統の如何に拘らず一視同仁の御慈みを以てこれを臠はせ、皇祖の靈廟と並び齋するまでに重き禮遇を賜つて居るのである。征服した民族を奴隷の境涯に追落し、その民族が驚くべき强靱な忍耐力と戰鬪力とを以て反抗を續け、漸くその實力を示し來るを待つて纔かにこれに自由の權利を賦與するといつたやうな態度と比べて、天地霄壤も啻ならぬ差異がある。この仁慈の大御心があつたればこそ、世界の有らゆる部面から集まつて來た十數種の民種・民族・は全くわれを忘れて皇室に忠勤をはげみ奉り、『海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍』と誓ひ奉つて君國を守護し奉つたものである。『おほやまづみ族』は神祖御二代・彦火火出見尊が天津日嗣を繼がする際、御兄・火闌降命に與し參らせ、神代に於ける天下分目の戰をたゝかつたことから、一旦吠犬となつて、皇室の御墻を護り奉る武士の階級に追落されはしたが、その後久しく、その特殊の文化である殉死・奉公・の精神と俳優の技能とを以て朝廷に仕へ奉り、平安朝以降、新興武士階級としてその地位を進め皇國屢次の國難に當つて、その壓倒的外敵を擊攘し、よく皇威を發揚し、國家を保護し、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る上に殊勳があつた。これ偏にわが皇室の宏大無邊なる仁慈の大御心によるものであつて、わが日本が生え拔きの全體主義國家であつた所以がこゝにあるのである。

日本が世界隨一の海軍國であり且つ陸軍國である道理

世界には强國を以て鳴るものが頗る多いが、わが日本帝國の如く、海軍に於いても世界に冠絶し、陸軍に於いても世界を壓倒するといふ國は絶對にその例を見ぬのである。現に、わが帝國の敵性國家たると締盟國家たるとに論なく、或る國は海軍に於いて著しく優秀であり、また他の國は陸軍に於いて世界無敵であるといはれて居る。しかるにわが帝國は海軍に於いても陸軍に於いても世界無敵であることは、凡そ世界に定評のあるところであるが、その優秀性と金剛力との由つて來たるところを索ぬるとすれば、有らゆる民種・民族・がこの國土に將來したそれ〴〵の文化的特徴を活かして働かせ、且つそれを無限に發展させる上に遺憾なからしめた皇室の深遠・宏大・な大御心に歸さねばならぬこと、われ〳〵の一日も忘れてならぬことではあるが、日本が建國以來二千幾百年、未だ曾てこの國土を一度も外敵の蹂躙に委ねたことなく、金甌無缺の國體を確保して今日に及んで居るのも、『おほわだつみ系』の傳統を傳ふる海軍に加へて、『おほやまづみ系』の傳統を紹ぐ陸軍があり、それに天孫民種固有の文化が加はつて、武器の進歩・充實、作戰の研究・

改善・の上におさ〳〵怠りがなかつたからである。それらの各論に關しては、なほいふべきことが頗る多く、論ずべきふしも少くないのであるが、それはいづれ卷を改め、題を新たにして讀者に見參することとしよう。

日本民族論　終

日本民族論

定價金二圓八十錢

昭和十七年六月十三日印刷
昭和十七年六月十七日發行

昭和十七年六月十七日初版八〇〇〇部

（認承協文出あ100245）

著者　東京市品川區大井鹿王子町四五〇三番地　白柳秀湖

發行者　東京市京橋區京橋三丁目一番地　千倉豐

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目二二番地　堀內文治郎

發行所　東京市京橋區京橋三丁目一番地第一相互館　千倉書房　振替東京九七八　電話京橋三六・九九二七　會員番號一一七五一一

配給元　東京市神田區淡路町一丁目九番地　日本出版配給株式會社

整版印刷　堀內印刷所

白柳秀湖著作年表

（「常の夏國」から「住友物語」初版に至るまでの年表には「新秋」を逸す。○偽版あり △割愛あり）

離愁小品集	明治四〇・一〇	
鐵火石	明治四一・六	論
黃昏火	明治四三・四	論
新秋小品集	明治四三・九	文
秀湖の天下	明治四三・一一	作
町人小品集	明治四三・一一	集
英雄篇（親分子分）史	明治四五・一三	論
俠客篇（親分子分）史	大正元・八	論
大日本閨門史△	大正二・二	論
浪人篇（親分子分）史	大正三・三	論
強者弱者。隨筆集	大正三・一〇	集
二千六百年史	大正五・五	歷
藤十郎と富藏	大正一〇・五	創
事實の叛逆	大正一四・一	作
社會講談選集	大正一四・六	集
常夏の國	大正一五・四	創
驛なきに聽く	大正一五・一	作
隨筆集	昭和四・二	集
財界太平記	昭和四・二	論
近世日本經濟發達史（民衆政治講座）	昭和四・二	史
坂本龍馬（大衆文學全集第二十一卷△）	昭和四・三	創作
西園寺公望傳	昭和四・六	傳
日本經濟革命史*	昭和四・二	論
改訂親分子分（英雄編）*	昭和四・三	史
改訂親分子分（俠客編）*	昭和五・二	論
暗殺騷擾實話（明治大正實話全集第十卷）	昭和五・三	實話
改訂親分子分（浪人編）*	昭和五・四	史
續財界太平記	昭和五・四	論
社會展開の動力*	昭和五・二	論
改版驛夫日記（新興文學全集第九卷日本篇）	昭和五・二	文集
食慾と愛慾*	昭和五・三	創作
住友物語*	昭和六・三	論文・隨筆・集
日本富豪發生學（下士階級革命の卷）*	昭和六・九	史
日本富豪發生學（貴族財閥爭奪の卷）*	昭和六・三	論
岩崎彌太郎（偉人傳全集第十二卷）*	昭和六・三	評
現代財閥罪惡史（續々財界太平記）*	昭和七・五	論
親分子分（玖黛編）*	昭和七・九	史
日本外交の血路*	昭和七・三	論
左傾兒とその父（日本富豪發生學土豪股皮の卷）*	昭和八・六	評
世界經濟鬪爭史*	昭和八・九	史
日本女性史話*	昭和九・一	論
維新革命前夜物語*	昭和九・四	史
山水と歷史*	昭和九・七	論
日本民族論*	昭和九・九	隨筆
自然と勞作	昭和九・二	作
民族日本歷史（建國編）*	昭和一〇・四	歷史
民族日本歷史（王朝編）*	昭和一〇・六	歷史
民族日本歷史（封建編）*	昭和一〇・八	歷史
民族日本歷史（戰國編）*	昭和一〇・一〇	歷史
民族日本歷史（近世編）*	昭和一〇・一三	歷史

（書名の下に＊印を附したるは千倉書房發行）

歷史と人間*	昭和一〇・一三	史論・隨筆・集
明治大正國民史（明治初編）*	昭和一一・六	歷史
明治大正國民史（明治決編）*	昭和一二・九	歷史
明治大正國民史（明治中編）*	昭和一三・二	歷史
明治大正國民史（明治終編）*	昭和一三・七	歷史
定版民族日本歷史（五編全部）*	昭和一三・二	歷史
明治大正國民史（大正概編）*	昭和一三・四	歷史
歷史と民族文化*	昭和一三・七	史論・隨筆・集
世界諸民族經濟戰夜話	昭和一三・二	史論
日本民族と天然*	昭和一三・一三	史論・隨筆・集
支交涉史話	昭和一四・一	史論
中上川彥次郎先生傳（初版限定非賣品）	昭和一四・一〇	評傳
定版維新革命前夜物語*	昭和一五・一	史論
定版世界經濟鬪爭史*	昭和一五・一	論
定版日本經濟革命史*	昭和一五・二	史論
東洋民族	昭和一五・五	論・隨筆・集
定版明治大正國民史（王政復古編）*	昭和一五・五	史論
定版明治大正國民史（維新改革編）*	昭和一五・五	歷史
定版明治大正國民史（議政樹立編）*	昭和一五・五	歷史
定版明治大正國民史（大陸進出編）*	昭和一五・五	歷史
定版明治大正國民史（世界經飛編）*	昭和一五・五	歷史
太平洋爭覇時代	昭和一六・三	史論
國難日本歷史	昭和一六・六	歷史
近衛家及近衛公	昭和一六・八	史論
改訂坂本龍馬（前篇及び後篇）	昭和一六・八	創作
東亞民族論（東洋民族論改題）*	昭和一七・二	史論・隨筆・集
改訂岩崎彌太郎	昭和一七・三	評傳
日本經濟沿革史（日本經濟革命史改題）*	昭和一七・六	歷史
日本民族論（新版）*	昭和一七・六	史論

★白柳秀湖名著★

民族日本歷史

全五卷

日本人の世界觀と人生觀を創造する不朽の國史出づ。日本民族生成の史實を科學的に研究し、歷史の流れに一貫する日本民族の生命力・精神力・文化・對外發展力等の根源を究め、祖國民族に對する愛と信念と理想を與ふる現代唯一の日本史！

明治大正國民史

全卷五

著者の獨創的史觀は、單なる事實の記述を排し、史實の根柢に流れる民族精神の創造的發展力を明かにすることによつて、歷史の眞實を理解せしめる。明治維新以來の日本民族發展の獨自性を、近代に於ける世界史及東洋史との關聯に於て之を認識せしめ現代日本建設の全貌を究むる國民的名著！

（總ルビつき）

建國編 | 王朝編 | 封建編 | 戰國編 | 近世編 | 王政復古編 | 維新改革編 | 憲政樹立編 | 大陸進出編 | 世界飛雄編

B6判各冊約四〇〇頁餘
（昭和十七年九月出來・品切）

各冊自由分賣

B6判各冊約五〇〇頁
定價各二圓

日本民族論 定價二・八〇

日本民族の生成、我國の民族性と國民性の本質、國體の神髓とを我が古代神話の解明によつて闡明せる不朽の名著である。

日本經濟沿革史 定價二・八〇

定評ある名著「日本經濟革命史」の改題せるもの、經濟史學界に獨自の地位を占むる書。

維新革命前夜物語 定價一・八〇

世界經濟鬪爭史 定價一・八〇

東亞民族論 定價二・〇〇

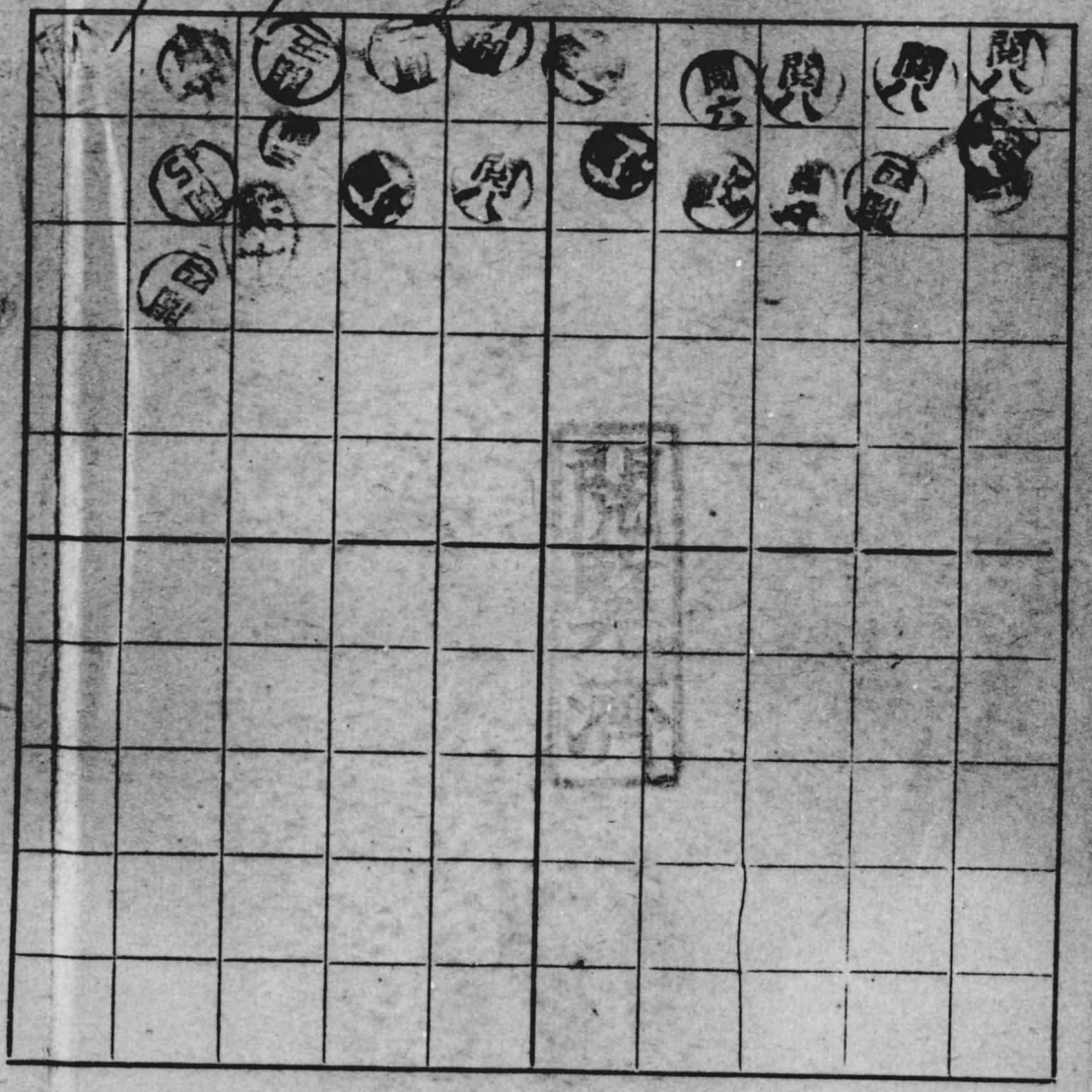
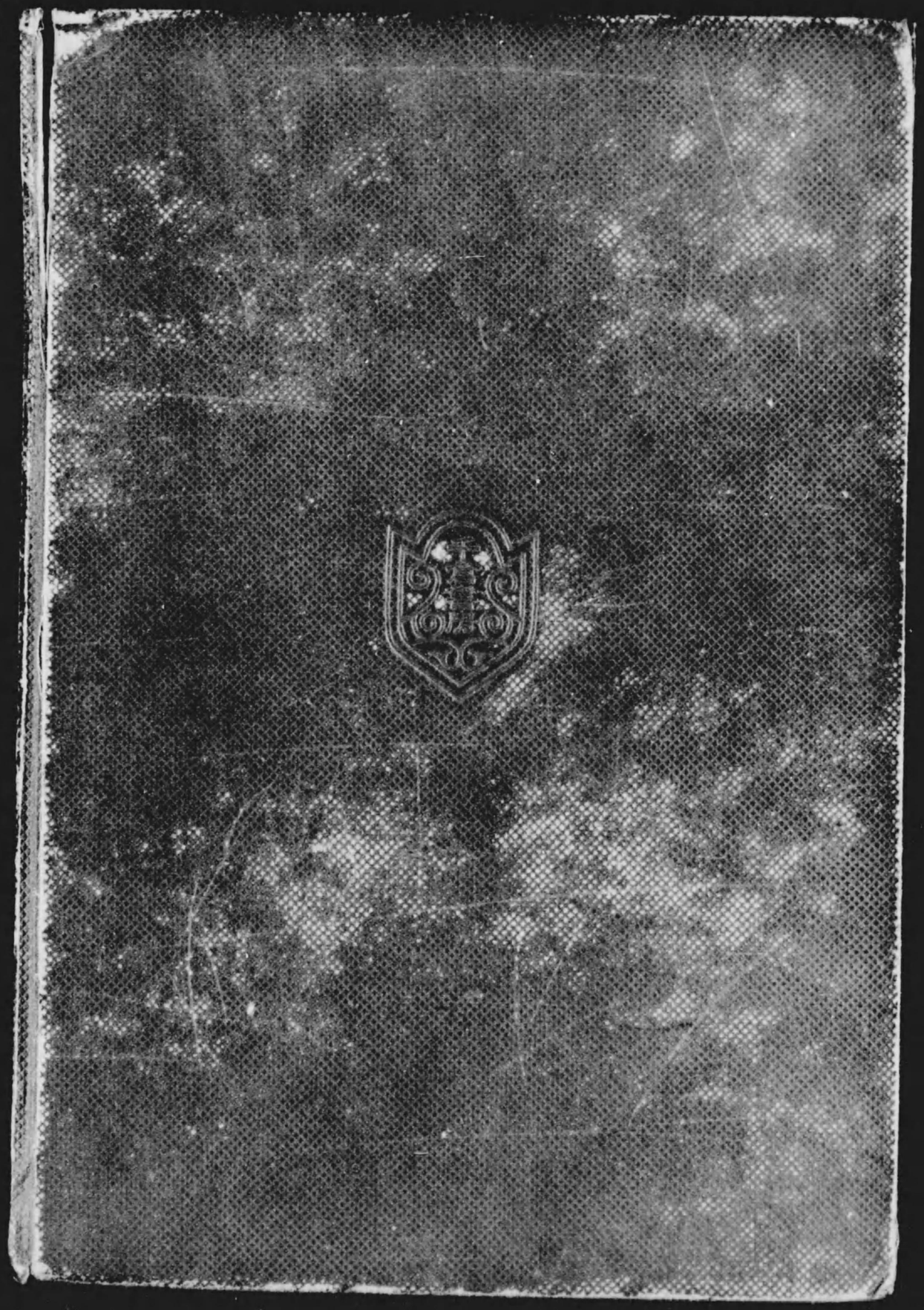
親分子分

英雄編 定價一・〇〇

浪人編 定價一・〇〇

俠客編 定價一・〇〇

★千倉書房刊★ （送料各冊二十錢）

769
207

17年 7月24日